

富士市埋蔵文化財調査報告 第75集

静岡県 富士市

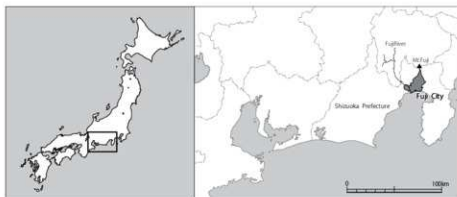
中島遺跡

2023年3月

富士市教育委員会

例 言

- 1 本書は、中島遺跡第1地区（静岡県富士市原田780-5）、第2地区（原田780-6外）、第3地区（原田774-1）、第5地区（原田849-1外）において実施した発掘調査にかかわる報告である。
調査は、土地改良工事（第1地区）、学術調査（第2地区）、雨水貯留池建設工事（第3地区）、宅地造成工事（第5地区）に伴い、埋蔵文化財の記録保存のために富士市教育委員会が実施した。
- 2 各調査の期間は以下のとおりである。
第1地区 昭和61年（1986年）12月1日から12月20日
第2地区 平成元年（1989年）1月9日から2月2日
第3地区 平成元年（1989年）10月30日から11月2日
第5地区 平成11年（1999年）1月14日
- 3 本報告書刊行に向けた整理作業は、令和3年（2021年）4月に開始し、本書の刊行をもって終了した。
- 4 本書の編集は佐藤祐樹（富士市教育委員会文化財課主査）・藤村 翔（同主査）の協力を得て、古瀬岳洋（同文化財調査員）が担当した。執筆は、第3章の遺物に関する記述と第4章・第5章を古瀬が、第3章の遺構に関する記述と第1章・第2章を若林美希（同文化財調査員）が担当した。
- 5 現地調査における記録写真撮影は各調査担当者による。
整理作業における遺物写真は佐藤が撮影した。
- 6 本書で報告した調査に関わる記録図面・出土遺物等の資料は、すべて富士市教育委員会に保管している。
今後、富士山かくや姫ミュージアム（富士市立博物館）に移管する予定である。
- 7 本書の作成にあたり、次の方々にご協力とご指導を賜りました。厚く御礼申し上げます。（敬称略、五十音順）
長田友也 小崎 晋 韓原 和太 成瀬陽介 原 悠翔 深澤麻衣 前嶋秀暎 森本隆寛
渡井 英智



静岡県富士市の位置

凡 例

1 調査地位図などで示す座標は、平面直角座標第Ⅷ系を用いた国土座標、世界測地系（平成14年4月施行）を使用している。

現地調査は、任意の杭・座標を用いて行った。各調査におけるBM（ベンチマーク）の標高値は不明である。

2 挿図の縮尺は、各図に添付したスケールで示す。写真図版の縮尺はすべて任意である。

3 土器の実測図では、断面を以下のように表現することで種類の違いを示した。

縄文土器・弥生土器・土師器  須恵器  灰釉陶器・陶器 

4 土層・遺物の色調は『標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議局監修）に準拠した。

5 遺構・遺物ともに、法量の（ ）は残存値、[]は推定値である。また、土器の残存率は図示中での残存率を示した。

6 出土遺物の評価については、主として次の文献と定義に基づいて検討した。

阿部友晴・長田友也・高橋 優ほか2002『奥三谷ダム関連遺跡発掘調査報告書XIII アチア平遺跡上段』新潟県朝日村教育委員会

池谷信之 編2012『高尾山古墳発掘調査報告書』沼津市教育委員会

小林達雄 編2008『総覧縄文土器』アム・プロモーション

佐藤祐樹 編・佐野五十三・小島利史2011『宮添遺跡Ⅳ』富士市教育委員会

佐藤祐樹 編・小島利史2012『宮添遺跡Ⅴ』富士市教育委員会

佐藤祐樹2021『東駿河における古墳時代の土器様相』『地域と考古学Ⅱ』向坂鋼二先生米寿記念論集

鈴木道之助1981『図録石器の基礎知識Ⅲ 縄文』柏書房

大工原豊・長田友也・建石徹 編2020『縄文石器提要』ニューサイエンス社

橋口尚武2001『黒潮の考古学』同成社

三田村美彦1999『山梨県史 資料編2 原始・古代2』山梨県

石器分類定義表

器 種	細 目	定 義
石鏃		二次加工によって最終に成形された石器
石鏃		二次加工によって先端部を最終に成形された石鏃
ナイフ様石器		ナイフ様の形状を持ち、鋭利な片側縁と調整を施された片側縁を持つ石器
石斧		扁平状調整を持つ打製石器
打製石斧	A類	直縁打撃によって成形された斧形石器。調整痕、B・C以外も含める
	B類	直縁打撃によって成形された斧形石器。調整痕
	C類	直縁打撃によって成形された斧形石器。分銅形
磨製石器		両端技法もしくは調整技法の両方によって刃部の成形が認められる石器
磨製石斧		刃部または器体全体を研磨されている斧形石器
磨石類	磨石 (A類)	磨・敲打、穿孔痕のいずれかを含む表面面に大きく凹んだ痕跡を残すもの、1辺ゆる凹石
	磨石 (B類)	手に持てる大きさの石で、表面面もしくは両側面に磨痕のみを残すもの
	磨石 (C類)	手に持てる大きさの石で、表面面もしくは両側面に磨痕のみを残すもの
	磨石 (D類)	手に持てる大きさの石で、表面面もしくは両側面に磨痕と最狭の両方を残すもの
石錘	A類	扁平な円縁に対向する切れ目状の加工を施した石器
	B類	扁平な円縁に対向する切れ目状の加工を施した石器
砥石		平坦な研磨面または溝状の研磨面があり、長い線条痕を持つ石器
石籠	A類	大型石材からなり、外形を含め全体を敲打によって加工され、大きく凹み磨られている石器
	B類	大型石材からなり、中央を敲打や研磨によって加工され、中央部が大きく凹んでいる石器
石棒		棒状の磨製石器

目 次

例 言

凡 例

目 次

第 1 章	調査の経緯と経過	
第 1 節	発掘作業の経緯と経過	1
第 2 節	整理作業の経緯と経過	4
第 2 章	中島遺跡の概要	5
第 3 章	遺構と遺物	
第 1 節	第 1 地区の調査成果	9
第 2 節	第 2 地区の調査成果	46
第 3 節	第 3 地区の調査成果	58
第 4 節	第 5 地区の調査成果	60
第 5 節	その他の表探遺物	60
第 4 章	富士山南麓地域出土の石錘に関する一考察	63
第 5 章	総括	71

付表 出土遺物観察表

写真図版

報告書抄録

挿図目次

第1章 調査の経緯と経通	
第1節 発掘作業の経緯と経通	
第1図 調査地区位置図	1
第2章 中島遺跡の概要	
第2図 周辺地形図	5
第3図 周辺遺跡分布図	6
第4図 中島遺跡・宇東川遺跡 概要図	7
第5図 中島遺跡 調査履歴図	8
第3章 調査の経緯と経通	
第1節 第1地区の調査成果	
第6図 1次調査 包含層出土遺物実測図 (1)	10
第7図 1次調査 包含層出土遺物実測図 (2)	11
第8図 1次調査 包含層出土遺物実測図 (3)	12
第9図 1次調査 包含層出土遺物実測図 (4)	13
第10図 1次調査 包含層出土遺物実測図 (5)	14
第11図 1次調査 包含層出土遺物実測図 (6)	15
第12図 1次調査 包含層出土遺物実測図 (7)	15
第13図 1次調査 包含層出土遺物実測図 (8)	16
第14図 1次調査 包含層出土遺物実測図 (9)	17
第15図 1次調査 包含層出土遺物実測図 (10)	17
第16図 第1地区 調査区全体図	18
第17図 第1地区 調査区基本セクション図	19
第18図 SB01	20
第19図 SB02	20
第20図 SK01～SK09、FP01	21
第21図 SK10	22
第22図 2次調査 SB01 出土遺物	23
第23図 2次調査 SK02 出土遺物	24
第24図 2次調査 SK06 出土遺物	25
第25図 2次調査 SK08 出土遺物	25
第26図 2次調査 包含層出土遺物 (1)	27
第27図 2次調査 包含層出土遺物 (2)	28
第28図 2次調査 包含層出土遺物 (3)	29
第29図 2次調査 包含層出土遺物 (4)	30
第30図 2次調査 包含層出土遺物 (5)	31
第31図 2次調査 包含層出土遺物 (6)	32
第32図 2次調査 包含層出土遺物 (7)	33
第33図 2次調査 包含層出土遺物 (8)	34
第34図 2次調査 包含層出土遺物 (9)	35
第35図 2次調査 包含層出土遺物 (10)	35
第36図 2次調査 包含層出土遺物 (11)	37
第37図 2次調査 包含層出土遺物 (12)	39
第38図 2次調査 包含層出土遺物 (13)	40
第39図 2次調査 包含層出土遺物 (14)	41
第40図 2次調査 包含層出土遺物 (15)	42
第41図 2次調査 包含層出土遺物 (16)	43
第42図 2次調査 包含層出土遺物 (17)	45
第43図 2次調査 包含層出土遺物 (18)	45
第43図 2次調査 包含層出土遺物 (18)	45
第2節 第2地区の調査成果	
第44図 第2地区 調査区全体図	46
第45図 第2地区 調査区セクション図	47
第46図 SK01～04、Pa01～02	48
第47図 2地区 (3次調査) 包含層出土遺物実測図 (1)	49
第48図 2地区 (3次調査) 包含層出土遺物実測図 (2)	50
第49図 2地区 (3次調査) 包含層出土遺物実測図 (3)	50
第50図 2地区 (3次調査) 包含層出土遺物実測図 (4)	52

第51図 2地区 (3次調査) 包含層出土遺物実測図 (5)	53
第52図 2地区 (3次調査) 包含層出土遺物実測図 (6)	54
第53図 2地区 (3次調査) 包含層出土遺物実測図 (7)	55
第54図 2地区 (3次調査) 包含層出土遺物実測図 (8)	55
第55図 2地区 (3次調査) 包含層出土遺物実測図 (9)	56
第56図 2地区 (3次調査) 包含層出土遺物実測図 (10)	57
第3節 第3地区の調査成果	
第57図 第3地区 トレンチ配置図	58
第58図 第3地区 トレンチセクション図	59
第4節 第5地区の調査成果	
第59図 第5地区 トレンチ配置図、セクション図	60
第5節 その他の表採遺物	
第60図 その他の表採遺物実測図 (1)	61
第61図 その他の表採遺物実測図 (2)	62
第62図 その他の表採遺物実測図 (3)	62
第4章 富士山南麓地域出土の石鏝に関する一考察	
第63図 富士山南麓における石鏝出土遺跡	64
第64図 石鏝形式図	65
第65図 エリア別・時期別の重量分布図と実測図	67
第5章 総括	
第66図 中島遺跡における遺構・遺物の変遷	72

挿表目次

第2章 中島遺跡 調査履歴一覧表	8
第4章 富士山南麓地域出土の石鏝に関する一考察	
第2表 石鏝の重量分布図	66

写真図版目次

- PL.1
出土遺物集合
- PL.2～PL.8 1地区(1次調査) 出土遺物
包含層出土遺物
- PL.9 1地区(2次調査) 調査
1. 調査区全景(西から)
2. 調査区全景(西から)
- PL.10 1地区(2次調査) 調査
1. SB01(北から)
2. SK01・SK02(南から)
- PL.11 1地区(2次調査) 調査
1. SK01(南から)
2. SK02(南から)
- PL.12 1地区(2次調査) 調査
1. SK02 礎土堆積状況(南から)
2. SK02 遺物(63・64・66) 出土状況(南から)
- PL.13 1地区(2次調査) 調査
1. SK03(東から)
2. SK04(東から)
- PL.14 1地区(2次調査) 調査
1. SK05(西から)
2. SK06～09(南から)
- PL.15 1地区(2次調査) 調査
1. SK08 遺物(68) 出土状況
2. FP01(南から)
- PL.16 1地区(2次調査) 調査
1. 遺物(73) 出土状況
2. 遺物(74) 出土状況
- PL.17 1地区(2次調査) 調査
1. 遺物(115) 出土状況
2. 遺物(138) 出土状況
- PL.18 1地区(2次調査・1次調査) 調査
1. 遺物(197) 出土状況
2. 2次調査の様子(西から)
3. 2次調査の様子(東から)
4. 1次調査遺物(南東から)
5. 1次調査の様子
- PL.19 1地区(2次調査) 出土遺物
1. SB01 出土遺物
2. SK06 出土遺物
3. SK02 出土遺物
- PL.20 1地区(2次調査) 出土遺物
1. SK08 出土遺物
- PL.21～PL.35 1地区(2次調査) 出土遺物
包含層出土
- PL.36 2地区(3次調査) 調査
1. 調査区全景(南から)
2. SK01～03・P01～02(西から)
- PL.37 2地区(3次調査) 調査
1. SK01 完掘
2. SK02 完掘
3. SK03 完掘
4. SK04 完掘
5. 遺物(201・243) 出土状況
- PL.38 2地区(3次調査) 調査
1. 遺物(231・246・252) 出土状況
2. 遺物出土状況
- PL.39 2地区(3次調査) 調査
1. 遺物(250) 出土状況
2. 遺物(235) 出土状況
- PL.40～PL.44 2地区(3次調査) 出土遺物
包含層出土
- PL.45 3地区(4次調査)・5地区 調査
1. 3地区 重機掘削の様子
2. 3地区 3トレンチ(南東から)
3. 3地区 1トレンチ(南東から)
4. 3地区 2トレンチ(北東から)
5. 3地区 2トレンチ土層
6. 5地区 重機掘削の様子(東から)
7. 5地区 トレンチ全景(南東から)
- PL.46 その他の表掘遺物
表掘遺物

第1章 調査の経緯と経過

第1節 発掘作業の経緯と経過

第1地区（1次調査・2次調査）

(1) 調査に至る経緯

昭和61年10月上旬、周知の埋蔵文化財包蔵地「中島遺跡」の範囲内に位置する富士市原田中島780-5で、事業者（個人）が実施した土地改良工事において、多量の縄文土器が出土したと工事業者から届け出があった。この土地改良工事は、表土を取り除いたところへ産業廃棄物等を埋め立て、その上へ元の表土を戻して耕作面を高くする、というものである。

昭和61年10月7日、富士市教育委員会（以下、市教委）文化体育課職員が現地確認を行ったところ、工事範囲の南半分は既に遺物包含層まで削平されており、縄文土器を主とする遺物がコンテナ2箱分ほ

ど採集された。また、縄文時代の敷石住居を思わせるヘギ石も確認された。この現地確認とそれに伴う遺物採集作業を1次調査と位置付ける。

昭和61年11月26日、事業者から文化財保護法第57条の2第1項（当時）の規定に基づく「埋蔵文化財発掘の届出について」が提出された。市教委は昭和61年11月27日、届出を静岡県教育委員会（以下、県教委）を経由して文化庁に進達するとともに、文化財保護法第98条の2第1項の規定に基づく「埋蔵文化財発掘調査の通知について」を提出した。その後、県教委から事業者に対して、市教委と協議して発掘調査を実施するように通知があった。



第1図 調査地区位置図

このため、工事未着手であった対象地の北部分について、市教委文化体育課職員による発掘調査（2次調査）を実施することとなった。

(2) 発掘調査の経過

発掘調査（2次調査）は昭和61年12月1日に開始し、同年12月20日に終了した。重機により表土を除去し、包含層を検出した後、人力により包含層を掘り下げて、遺構・遺物の検出につとめた。

土層の変化が激しく、遺構の検出が難しい状況であったが、堅穴建物と思われる落ち込み2基（SB01～02）、土坑9基（SK01～09）、大型土坑1基（SK10）、炉（FP01）を含む焼土4ヶ所を検出・完掘し、記録保存を行った。

第2地区（3次調査）

(1) 調査に至る経緯

富士市原田に所在する中島遺跡は、昭和25年と昭和61年（第1地区）に行われた発掘調査で、配石遺構や堅穴建物、多量の縄文土器や石器などが出土した、縄文時代後期を中心とする遺跡である。しかし、その範囲や性格などについてはいまだ不明な点が多いため、富士市教育委員会（以下、市教委）文化体育課では、第1地区の北東に位置する富士市原田780-6 外1筆（350㎡）において、本遺跡について、より詳細に把握するための学術調査を計画した。昭和64年1月7日、文化財保護法第98条の2第1項の規定に基づく「埋蔵文化財発掘調査の通知について」を静岡県教育委員会（以下、県教委）へ提出し、市教委文化体育課職員による学術調査を実施することとなった。

(2) 発掘調査の経過

調査は平成元年1月9日に開始し、同年2月2日に終了した。まず、重機により表土を除去し、古墳時代の遺物包含層である黒色土層（IV層）を検出し、人力により精査した。その結果、土坑4基（SK01～04）とピット2基（Pit01～02）を検出・完掘し記録保存した。土坑はⅢ層から掘り込まれたもので、中世から近・現代の遺構とみられる。

その後、IV層・V層を除去し、縄文時代後期の遺物包含層である黄褐色土層（VI層）を検出し、精査を行ったが、VI層上面では遺構は確認されなかった。

遺物は、コンテナ5箱分の縄文土器・土師器・須恵器と、コンテナ1箱の石器が出土したが、いずれも遺構に伴うものではなく、包含層から出土したものである。これらの遺物については、平成元年2月13日、富士警察署長宛に「埋蔵文化財発見届」（富教文第201号）を、県教委宛に「埋蔵文化財保管証」（富教文第203号）を提出し、平成元年3月16日、県教委から埋蔵物の文化財認定を受けている（教文第2-195号）。

平成元年2月13日、県教委宛に「発掘調査終了報告書」を提出した（富教文第202号）。

第3地区（4次調査）

(1) 調査に至る経緯

富士市長 渡辺彦太郎（以下、事業者）は、富士市原田774-1 外3筆（約6,600㎡）において、雨水貯留池を建設する工事を平成2年度から平成6年度にかけて実施することを計画した。当該地が周知の埋蔵文化財包蔵地「中島遺跡」の範囲に位置することから、事業者から、文化財保護法第57条の3第1項（当時）の規定に基づく「埋蔵文化財発掘の通知について」が提出された。平成元年10月27日、富士市教育委員会（以下、市教委）文化体育課では、これを静岡県教育委員会（以下、県教委）に進達（富教文第136号）するとともに、平成元年10月28日、文化財保護法第98条の2第1項の規定に基づき、「埋蔵文化財発掘調査の通知について」を提出した（富教文第139号）。平成元年11月28日、県教委より、工事着手前に発掘調査を実施するように通知があり（教文第2-185号）、市教委文化体育課職員による発掘調査を実施することとなった。

(2) 発掘調査の経過

発掘調査は、平成元年10月30日に開始し、同年11月2日に終了した。対象地に4本のトレンチを設定し、遺構・遺物の検出につとめたが、表土直下に河川由来の砂礫が堆積しており、遺構は確認されなかった。遺物は、コンテナ4分の1箱分の縄文土器・土師器・須恵器・陶磁器が出土したが、いずれも盛土中からの出土である。これらの遺物については、平成元年11月17日、富士警察署長宛に「埋蔵文化財発見届」（富教文第152号）を、県教委宛に「埋

蔵文化財保管証」(富教文体第151号)を提出した。

平成元年11月20日、県教委宛に「発掘調査終了報告書」を提出した(富教文体第152号)。

第5地区

(1) 調査に至る経緯

事業者(個人)は、富士市原田849-1 外12筆および官地(836.33㎡)において、宅地造成工事を計画した。当該地が周知の埋蔵文化財包蔵地「中島遺跡」の範囲内に位置するため、平成10年12月15日、事業者は富士市教育委員会(以下、市教委)文化振興課と埋蔵文化財の対応について協議を開始し、事業者から「埋蔵文化財試掘確認調査依頼書」および「発掘調査承諾書」が提出された。市教委は「埋蔵文化財の発掘調査の通知について」を静岡県教育委員会(以下、県教委)に提出し、市教委文化振興課職員による試掘調査を実施することとなった。

(2) 発掘調査の経過

試掘調査は平成11年1月14日に行った。対象地の北半分は6メートル以上の盛土がされており調査不能であるため、対象地の南に東西方向にトレンチを設定し、重機による表土掘削後、遺構・遺物の検出につとめた。表土直下は溶岩層であり、遺構・遺物は検出されなかった。平成11年3月26日、県教委ならびに事業者に「発掘調査終了報告書」を提出した(富教文第258号)。

調査の体制

本書で報告する中島遺跡の各調査は、以下の調査体制で行った。

【第1地区(昭和61年度)】

[調査主体]

富士市教育委員会 教育長 小川 清

[事務局]

富士市教育委員会 教育次長 秋山 武雄
文化体育課 課長 深澤 清一
課長補佐 鈴木 政俊
文化振興係 係長 山本 宣親
主事 平林 将信
主事 渡井 義彦

【第2地区(昭和63年度)】

[調査主体]

富士市教育委員会 教育長 山本 厚
[事務局]
富士市教育委員会 教育次長 伊達 喬一
文化体育課 課長 小野 肇
課長補佐 渡邊 誠
文化振興係 係長 杉本 篤
主事 渡井 義彦
主事 久松 義昭

【第3地区(平成元年度)】

[調査主体]

富士市教育委員会 教育長 山本 厚
[事務局]
富士市教育委員会 教育次長 伊藤 輝英
文化体育課 課長 小長谷秀夫
課長補佐 渡邊 誠
文化振興係 係長 杉本 篤
主事 渡井 義彦
主事 久松 義昭

【第5地区(平成10年度)】

[調査主体]

富士市教育委員会 教育長 太田 均
[事務局]
富士市教育委員会 教育次長 仲澤 健一
文化振興課 課長 遠藤 貞幸
課長補佐 殿岡 孝則
文化財係 係長 池田 晴夫
主査 志村 博
指導主事 鳥居己至夫

第2節 整理作業の経緯と経過

経緯と経過

発掘調査報告書刊行のための整理作業は、各調査の終了後、出土遺物の洗浄、一部の土器については注記・接合までが富士市教育委員会により進められていたが、長らく中断されていた。

令和3年4月から整理作業を再開し、出土遺物の再洗浄と注記、接合の検討、復元、図化、写真撮影、発掘記録図面類の整理、遺構図・遺物図のトレース作業、報告原稿の執筆等を行い、これらを編集して報告書を作成した。

令和5年3月31日、中島遺跡第1地区、第2地区、第3地区、第5地区の埋蔵文化財発掘調査に関わる一連の作業は、本書の刊行をもって終了した。

整理作業の体制

本書刊行のための整理作業は、以下の体制で行った。

【令和3年度】

[調査主体]

富士市教育委員会 教育長 森田 嘉幸

[担当機関]

富士市役所市民部 部長 高野 浩一

文化振興課 課長 久保田 伸彦

文化財担当 統括主幹 植松 良夫

主幹 石川 武男

主幹 井上 卓哉

[調査担当] 主査 佐藤 祐樹

主査 藤村 翔

発掘調査員 小島 利史

発掘調査員 若林 美希

【令和4年度】

[調査主体]

[調査主体]

富士市教育委員会 教育長 森田 嘉幸

[担当機関]

富士市教育委員会 教育次長 江村 輝彦

文化財課 課長 久保田 伸彦

文化財活用担当 統括主幹 石川 武男

[調査担当] 主査 佐藤 祐樹

主査 藤村 翔

発掘調査員 小島 利史

発掘調査員 古瀬 岳洋

発掘調査員 若林 美希

第2章 中島遺跡の概要

富士市原田に所在する中島遺跡は、富士山南麓に広がる低丘陵の先端、標高30～40mほどの緩斜面上に立地する、縄文時代および古墳時代の集落跡である。

本遺跡の西から南にかけて松原川が流下し、その対岸には、縄文時代中期から後期および弥生時代後期から平安時代にかけての集落跡である宇東川遺跡が立地する。また、本遺跡の東には縄文時代の遺物散布地である斉藤上遺跡・赫夜姫遺跡が、西と北には奈良・平安時代の遺物散布地である水神堂遺跡・三ツ沢遺跡が存在する。

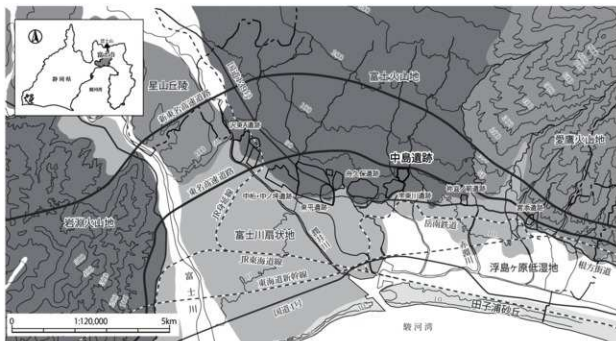
本遺跡では、富士市に記録が残るものとして、令和4年10月までに13ヶ所で発掘調査が行われている(第5図、第1表)。昭和61年に調査された第1地区では縄文時代の竪穴建物とみられる落ち込みや土坑が検出され、コンテナ20箱におよぶ大量の縄文土器・石器が出土している(本書第3章第1節)。平成24年に調査された第9地区では、同じく縄文時代の竪穴建物と推定される遺構と、堀之内2式の深鉢型土器を埋納する埋壘土坑が検出されている(富士市教育委員会2015)。

また、昭和25年にも発掘調査が実施され、縄文時代中期末～後期前半の称名寺式や堀之内式、後期後半の加曾利B式に位置づけられる土器と、打製石斧・石織・石鍾・石皿といった石器とともに、配石遺構(環状列石)が出土したという(中野1972)。

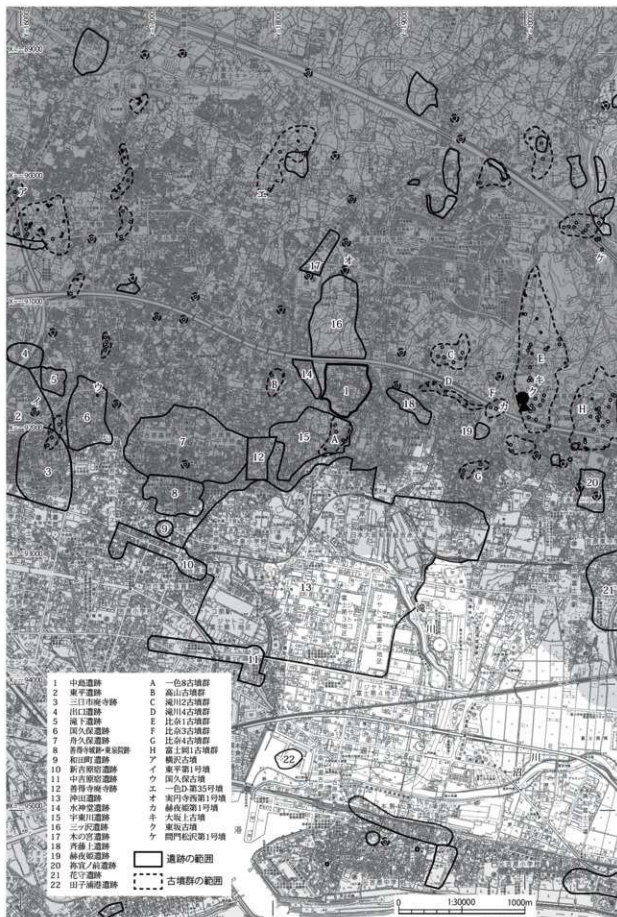
このように、本遺跡で確認される遺構・遺物は、縄文時代中期末～後期のものを主体としている。第2地区および第3地区では、遺構は未確認であるものの、古墳時代前期の土師器や、奈良・平安時代の土師器・須恵器も出土している(本書第3章第2・3節)。松原川の対岸に位置する宇東川遺跡では、縄文時代中期後葉から後期前葉と、弥生時代後期から平安時代にかけて、継続して集落が営まれており、中島遺跡においても宇東川遺跡と対応した集落が営まれていた可能性がある。

参考文献

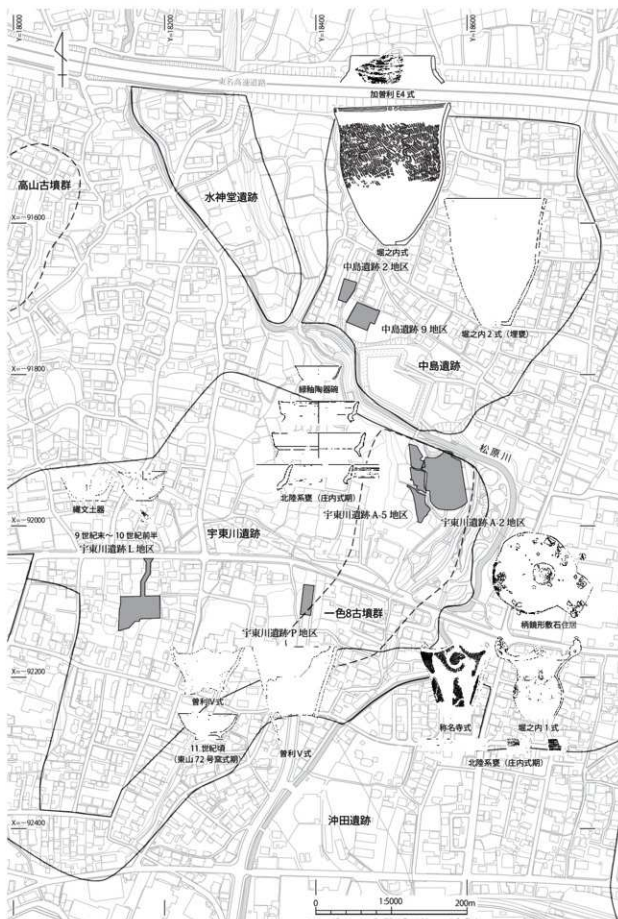
- 中野 国雄 1972『第一章 第一節 吉原のあけぼの』『吉原市史 上巻』富士市
 富士市教育委員会 2015『富士市内遺跡発掘調査報告書 一 平成24・25年度一』富士市埋蔵文化財調査報告 第57集



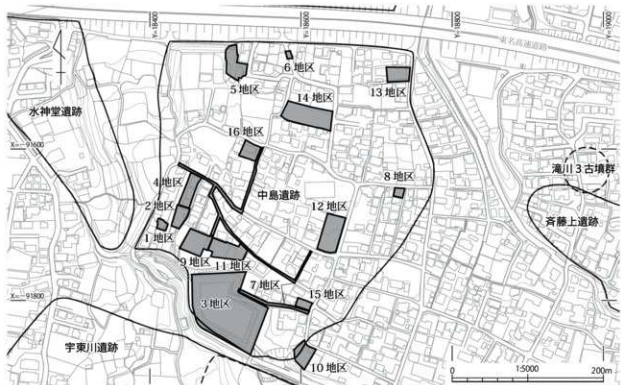
第2図 周辺地形図



第3図 周辺遺跡分布図



第4図 中島遺跡・宇東川遺跡 概要図



第5図 中島遺跡 調査履歴図

第1表 中島遺跡 調査履歴一覧表

調査年度	調査番号	地区名	調査種別	調査履歴	所在地	事業内容	対象面積 (㎡)	調査面積 (㎡)	時代	遺構	遺物	調査担当	報告書
S61		1地区	試掘 (第1次) (第2次)	19861201 ～19861220	原田 780-5	土地改良	200,000		縄文	堅穴建物跡・土坑・埴土	縄文土器・人骨・鹿角	平林 義典	本書
S63		2地区	字掘 調査	19890109 ～19890202	原田 780-6 外	造紙稲穂確認	350,000		縄文	土坑・ピット	縄文土器・石器・鹿角 土師器・須恵器	成井 久松	本書
T01		3地区	試掘 (第4次)	19891030 ～19891102	原田 774-1	雨水貯留池建設	6,600,000	400,000	なし		縄文土器・土師器・須恵器・陶磁器	成井 久松	本書
H04		4地区	工事 立会	19921208	原田 780-2 外	共同住宅	994,000		—	—	—	—	—
H10		5地区	試掘	19990114	原田 849-1 外	宅地造成	836,000	11,000	なし	なし	なし	志村 島信	本書
H11		6地区	工事 立会	199908	原田 848-1 地先	防火水溝築造	38,000		—	—	—	—	—
H11		7地区	工事 立会	19990920 ～19990921	吉原中島町2地先	下水道工事	560,000		—	—	—	—	—
H22	H22-16	8地区	試掘	20101109	原田 913-3	宅地造成	155,000	12,000	なし	なし	なし	佐藤 雅夫	A
H24	H24-05	9地区	試掘	20120604	原田 767-1、 766-1の一部	共同住宅新築	937,000	107,800	縄文	堅穴建物跡・埴土・土坑・ピット・色釉不明遺構	縄文土器・石器	佐藤 雅夫 若林	B
H27	H27-28	10地区	確認	20160125	原田 730-1 外	不動産売買	742,000	15,000	なし	なし	なし	佐藤 小島	C
H28	H28-12	11地区	確認	20160713	原田 767-1 の内	宅地分譲	999,000	21,743	なし	なし	なし	佐藤 小島	D
H30	H30-04	12地区	確認	20180416 ～20180419	原田 906-1	宅地分譲	1,276,000	63,221	不明	なし	なし	佐藤 小島	E
H30	H30-06	13地区	確認	20180426	原田 926-1	宅地分譲	557,430	8,023	なし	なし	なし	佐藤 小島	E
H30	H30-45	14地区	確認	20190201 ～20190205	原田 862-1	不動産売買	1,408,000	35,618	なし	なし	なし	伊藤 小島 志藤 藤村	E
R01 (R13)	R01-15	15地区	確認	20190604	原田 771-2 外	宅地造成	218,000	4,459	なし	なし	なし	藤村 小島 志藤 藤村	F
R03	R03-22	16地区	確認	20210811	原田 809-2	個人住宅建設	102,670	2,122	縄文	なし	縄文土器	藤村 小島	

〔報告書〕

- A 『富士市内遺跡発掘調査報告書—平成22・23年度—』 富士市埋蔵文化財調査報告書 第54集 (2013)
 B 『富士市内遺跡発掘調査報告書—平成24・25年度—』 富士市埋蔵文化財調査報告書 第57集 (2015)
 C 『富士市内遺跡発掘調査報告書—平成26・27年度—』 富士市埋蔵文化財調査報告書 第60集 (2017)
 D 『富士市内遺跡発掘調査報告書—平成28年度—』 富士市埋蔵文化財調査報告書 第62集 (2017)
 E 『富士市内遺跡発掘調査報告書—平成30年度—』 富士市埋蔵文化財調査報告書 第67集 (2019)
 F 『富士市内遺跡発掘調査報告書—令和元年度—』 富士市埋蔵文化財調査報告書 第70集 (2021)
 G 『富士市内遺跡発掘調査報告書—令和3年度—』 富士市埋蔵文化財調査報告書 第71集 (2022)

第3章 遺構と遺物

第1節 第1地区の調査成果

1次調査の遺構について

本地区では事業者によって土地改良工事が実施されており、文化体育課職員が現地確認を行った時点で、南半部分は遺物包含層まで削平されていた。

この現地確認とそれに伴う遺物採集作業を1次調査と位置付けており、縄文時代の敷石住居を思わせるヘギ石も確認されているものの、遺構調査の記録はなく、遺構の状況については不明である。

1次調査の遺物について

コンテナ2箱分の縄文土器・石器などが採集されている。

(1) 包含層出土土器 (1～41)

精製土器

大部分が堀之内式に該当する。1～10・12・13は深鉢であり1・2・4・6・12・13は平口縁、3・5・9・10は波状口縁である。1・2・4・8は地文に撫糸縄文が施され、沈線による懸垂文、横走多重文、蛇行文が施されている。6は口縁部が内に屈折しており沈線が施されている。胴部は2重沈線を基本単位とし、下部の2重沈線までの範囲にて施文が見られ、沈線による縦位楕円文、懸垂文、斜行文と充填縄文が見られる。5は器形が朝顔形深鉢に類似し、口縁部に沈線による横位連鎖した楕円文が施されている。胴部には縦位楕円文によって仕切られた中に蛇行文と破線状沈線が見られる。7は口縁部に3本の集合沈線と胴部へ多重沈線による渦巻文と充填縄文が見られる。9は円孔の周囲に沈線を有し、内面にも同様に沈線が見られる。10は口縁部に沈線と刺突文があり、内面に円形の刺突隆帯文を円形に配する様子が見られる。13は内湾する口縁部で2重沈線の間に破線状の沈線が見られる。

14・15は注口土器である。14は把手部と胴部であり器体面に隆帯文が見られる。15は注口部と胴部であり、器体面に刺突隆帯文が見られ、横位の隆帯文が注口部根元の意匠と合流する。16は蓋形土器で、平たく周縁に欠けがみられる。中心に凸部が2箇所あり穴のあいた柄杓であったと思われる。17は把手である。

18は台座で、中心が空洞である。側面に4箇所のスリットがあり、いずれも空洞部と接続する。

11は称名寺式土器に該当し、頸部にJ字文もしくはM字文の一部が施されているものとみられる。

粗製土器

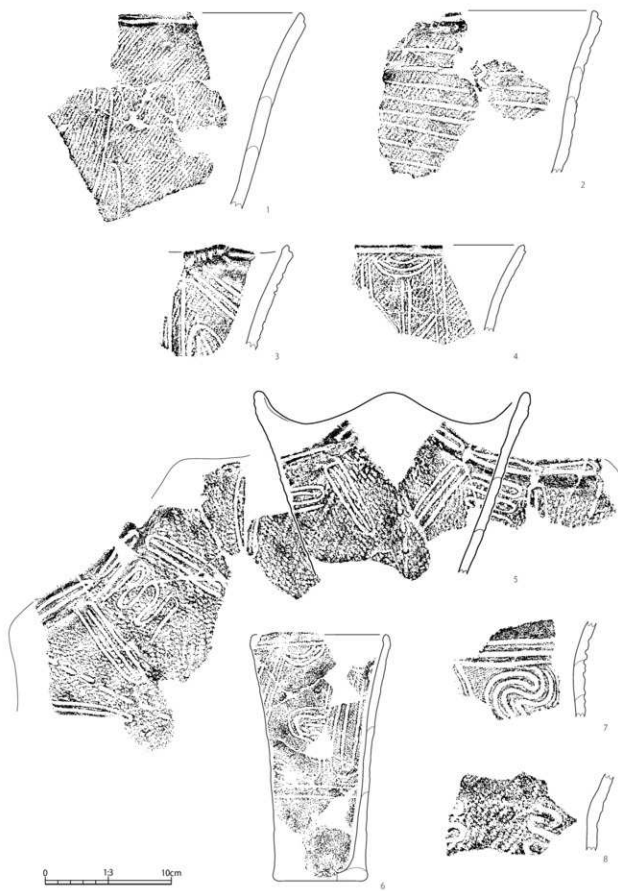
19～26は堀之内式に該当する。19～22は地文として撫糸縄文を全面的に施し、19～21はLR縄文で22はRL縄文による施文である。21のみが波状口縁であり他は平口縁である。

23～25は無文土器であり、23は頸部がくびれ25は口縁部が屈曲する形状を示す。26は2重沈線を基本とした横位施文が連続して行われ、その間に斜行する短沈線文が充填されている。横位の帯状施文から堀之内2式の可能性もあるが不明である。

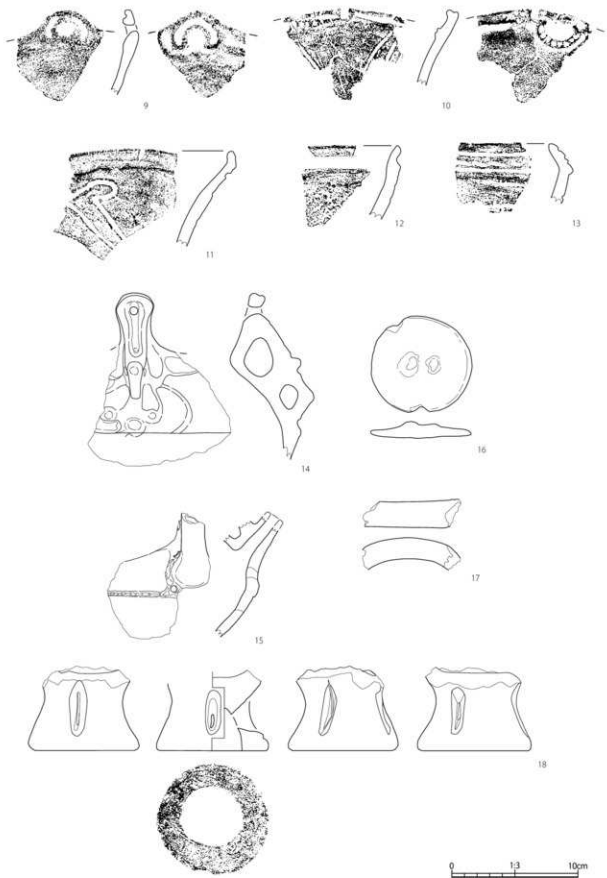
27～40は底部になる。立ち上がりが大きく外向するものが見られ、40などは顕著であり浅鉢である可能性が高い。29・30・33・35・37・40に網代痕が見られる。

五領ヶ台式

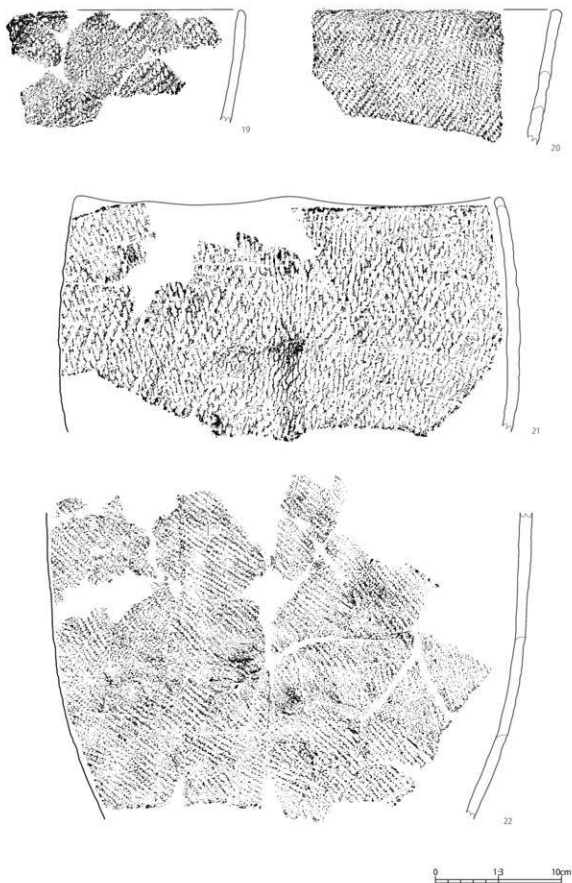
41は五領ヶ台式に該当する。口縁部の直下に3重沈線文が確認できる。



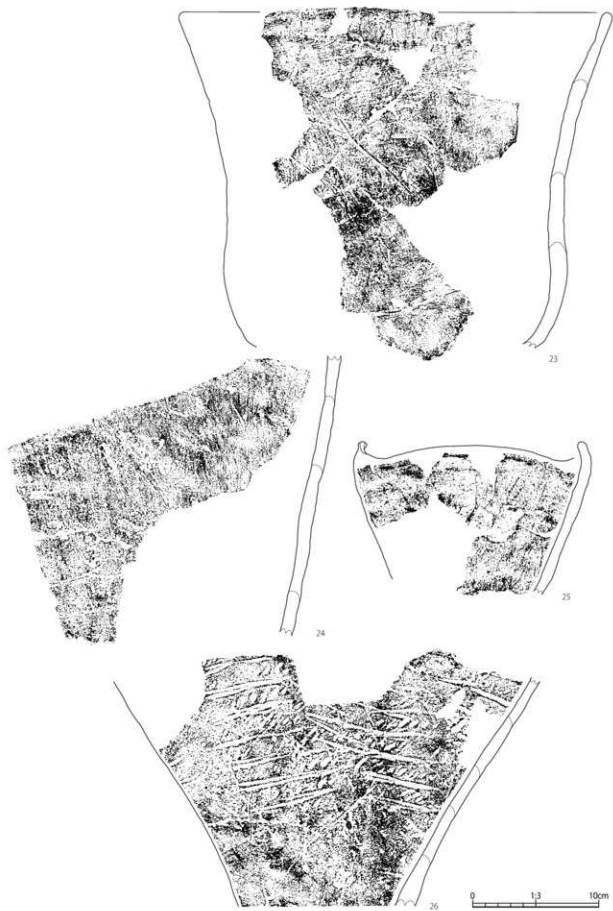
第6図 第1地区(1次調査)包含層出土遺物実測図(1)



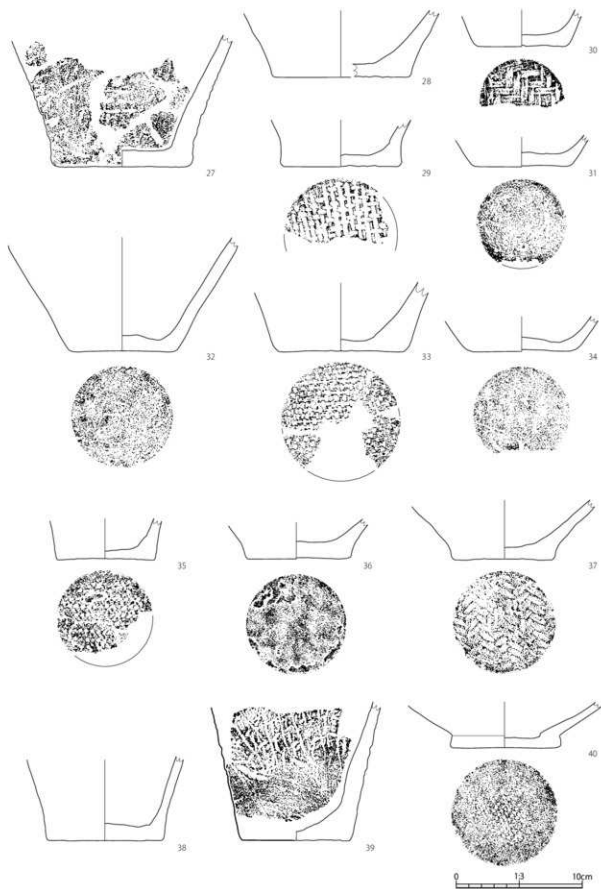
第7図 第1地区（1次調査）包含層出土遺物実測図（2）



第8図 第1地区(1次調査)包含層出土遺物実測図(3)



第9図 第1地区（1次調査）包含層出土遺物実測図（4）



第10图 第1地区(1次調査)包含層出土遺物実測図(5)

(2) 包含層出土石器 (42～55)

42～47は石錘である。

42～46は石錘Aに該当し、石材は砂岩、緑色岩、片麻岩である。扁平な円礫の長軸上両端へ、敲打による挟り部の作出が確認できる。

47は石錘Bに該当し、石材は砂岩である。下部が欠損しているが擦りによる切目加工が施されていることから石錘と判断する。

48～55は磨石類である。

49・50・53は磨石Aに該当し、石材は安山岩である。側縁部や正裏面に磨痕、打痕、凹痕が確認でき、いずれも厚みのある円礫を利用し両面に窪みを有する。

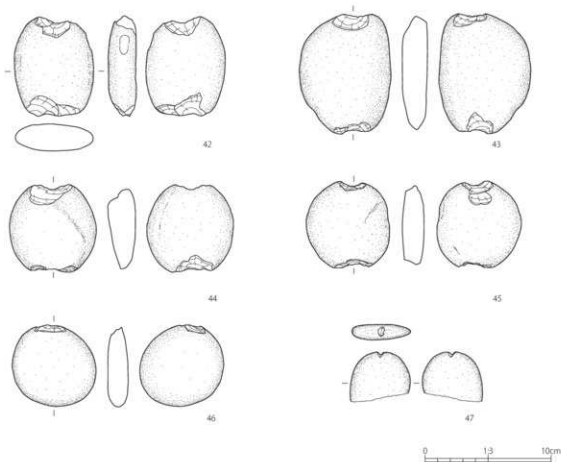
48は磨石Bに該当し、石材は砂岩である。正裏面の全面にわたり磨痕を残す。形状は上部、下部ともに欠損しており、破損前は比較的大きいものであったことが考えられ、置きながらの使用が推察さ

れる。上部において2箇所と同方向からの剝離痕が見られることから、石核としても使用された可能性がある。

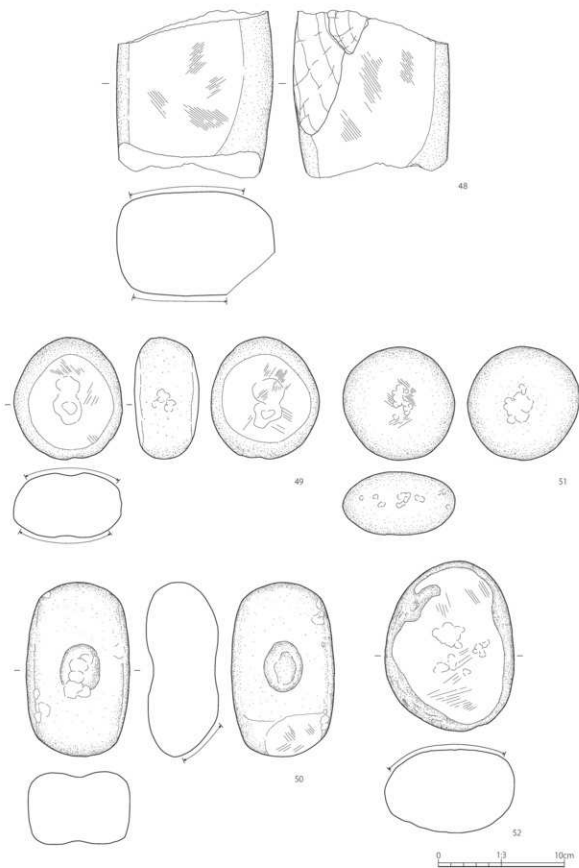
52・54・55は磨石Dに該当し、石材は花崗岩、玄武岩、砂岩である。周縁部や平面に磨痕、打痕が確認できる。使用の前後関係に関して52は敲打→磨きであり、54は磨き→敲打の箇所が見られる。



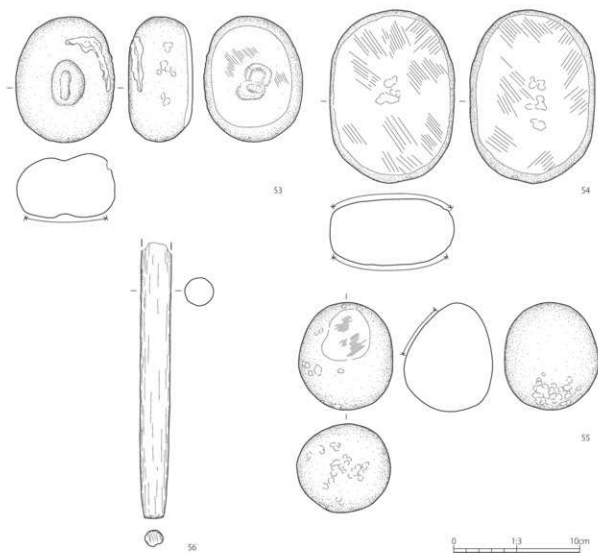
第11図 第1地区(1次調査)包含層出土遺物実測図(6)



第12図 第1地区(1次調査)包含層出土遺物実測図(7)



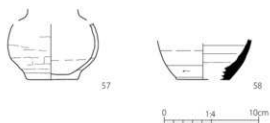
第13図 第1地区（1次調査）包含層出土遺物実測図（8）



第14図 第1地区(1次調査)包含層出土遺物実測図(9)

(3) 包含層出土石製品(56)

56は東正院型石棒に該当し、石材は三波川変成帯に伴う点紋緑泥石片岩である。上端は欠損し下端が残存している。形状は細身で円形の断面を呈し、下端に向かうにしたがい先細る形状である。全面にわたり磨かれており、打痕等の成形痕はほとんど見られない。



第15図 第1地区(1次調査)包含層出土遺物実測図(10)

(4) 包含層出土弥生土器(57)

57は弥生土器の小型壺である。口縁部・頭部は無く胴部の一部と底部を残す。底部から直線的に外向し、立ち上がりは横位ナデによる立ち上りの形態を示す。

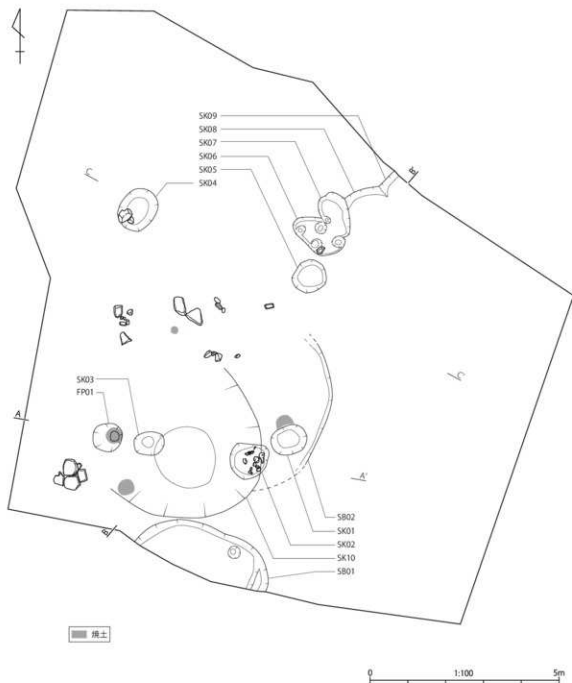
(5) 包含層出土須恵器(58)

58は須恵器の壺とみられるが口縁部・頭部が欠損しているため詳細は不明である。底部は平底であるが立ち上がりにかけて縦の刻みが入った小さな粘土塊が付着しており、トチンもしくはハマと考えられる。

第1地区2次調査の遺構について

2次調査では、竪穴建物とみられる落ち込み2基（SB01～02）、土坑9基（SK01～09）、大型土坑1基（SK10）、炉（FP01）とみられるものを含む焼土4ヶ所を検出し、記録保存した。

調査時の所見では、土層断面のみで確認される遺構とみられる落ち込みが数ヶ所記録されているが、今回は平面で明確に確認されるもののみを遺構として取り上げる。



第16図 第1地区（2次調査）調査区全体図

(1) 竪穴建物

SB01

調査区の南端中央に位置する。他の遺構との切り合い関係はない。南側は調査区外に位置するが、検出された北半分から、平面形は円形あるいは隅丸方形を呈すると推定される。残存部の東西幅は3.70mを測り、検出面からの深さは17cmほどである。床面の北壁寄りに径32cm、深さ15cmのピットがあり、東壁際は床面が段をなしているようであるが、部分的な検出のため、その性格は不明である。

SB02

調査区の中央南寄りに位置し、SK02・SK10に切られる。東壁に位置する部分で長さ3.2mほど、深さ10cmほどの弧を描く落ち込みが検出された。調査区セクションA-A'では、SK02に切られる深さ40cmほどの覆土が確認される。また、SB02に伴うものかは特定できないが、床面にあたる位置に径46cm、厚さ8cmの焼土跡が認められる。

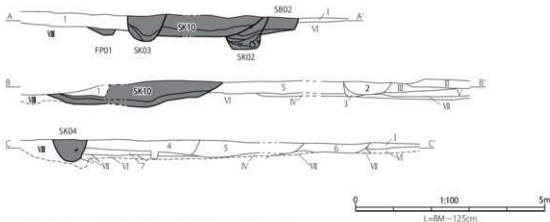
(2) 土坑

SK01

調査区の中央南寄りに位置する。SB02の内側に位置し、SB02内の焼土を切っていることから、SK02と同様に、SB02より新しい遺構の可能性がある。平面形は長径95cm、短径77cmの楕円形を呈し、断面形は逆台形、検出面からの深さは55cmを測る。

SK02

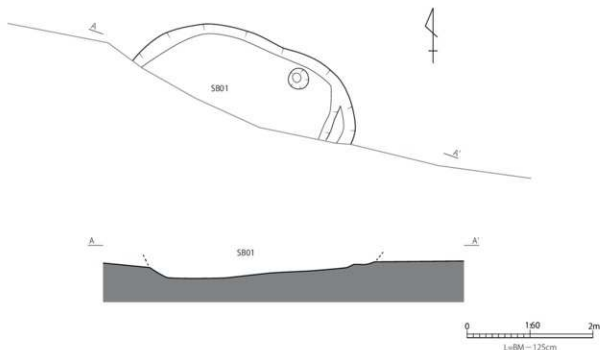
調査区の中央南寄り、SK01の南西に近接して位置する。SK10に切られ、SB02を切る。平面形は長径108cm、短径100cmのややいびつな楕円形を呈し、断面形は逆台形、深さは86cmを測る。本土坑では、上層(第20図4層)から人骨が、下層(第20図8層)から歯が出土し、底面から30cmほど浮いた位置で縄文土器深鉢の破片が出土している。



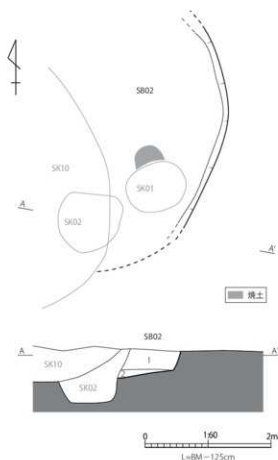
- | | |
|------------|--|
| I 黄褐色土層 | しまりあり、粘性あり。赤色スコリア・小石少量含む。 |
| II 暗褐色土層 | しまりあり、粘性あり。赤色スコリア・炭化物微量、小石少量含む。 |
| III 褐色土層 | しまりあり、粘性あり。赤色スコリア・小石少量、炭化物微量含む。 |
| IV 暗褐色砂質土層 | しまりあり、粘性弱。赤色スコリア・炭化物微量、暗褐色砂層・小石少量含む。 |
| V 暗褐色砂質土層 | しまりあり、粘性弱。炭化物・赤色スコリア微量、小石少量。茶褐色砂層多量含む。 |
| VI 暗褐色砂質土層 | しまりあり、粘性なし。赤色スコリア・小石少量含む。 |
| VII 茶褐色砂層 | しまり強。粘性なし。 |
| VIII 暗褐色土層 | しまり強。粘性あり。白色スコリア・赤色スコリア・溶岩礫少量含む。 |

- | | | |
|---------|--|-------|
| 1 黒褐色土層 | しまり強。粘性あり。赤色スコリア・小石少量。白色スコリア・炭化物微量含む。 | 遺構覆土か |
| 2 暗褐色土 | しまりあり。粘性あり。赤色スコリア少量。炭化物・骨粉微量含む。 | 遺構覆土か |
| 3 区褐色土 | しまりあり。粘性あり。灰多量。骨粉微量含む。 | 遺構覆土か |
| 4 暗褐色土 | しまりあり。粘性あり。赤色スコリア・小石少量。炭化物微量含む。 | 遺構覆土か |
| 5 暗褐色土 | しまりあり。粘性あり。赤色スコリア・小石少量。炭化物微量含む。 | 遺構覆土か |
| 6 褐色土 | しまりあり。粘性あり。赤色スコリア・小石少量。炭化物微量含む。 | 遺構覆土か |
| 7 褐色土 | しまりあり。粘性弱。赤色スコリア・小石(溶岩礫)少量。炭化物微量含む。やや砂質。 | 遺構覆土か |

第17図 第1地区(2次調査)調査区基本セクション図



第18図 SB01



- 1 暗褐色土層
2 黄褐色砂礫層
- しまりあり、粘性あり、赤色スコリア・小石少量含む。
しまり強、粘性なし、小石少量含む。

第19図 SB02

SK03

調査区の南西に位置する。SK10を切る。平面形は長径80cm、短径60cmの楕円形を呈し、断面形はU字形、深さは72cmを測る。

SK04

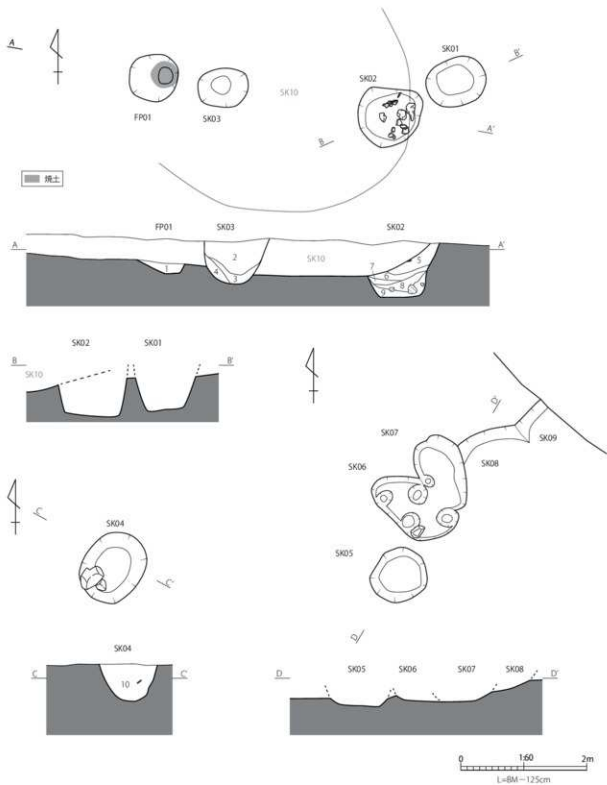
調査区の北西に位置する。平面形は長径117cm、短径93cmの楕円形を呈し、断面形はU字形、深さは58cmを測る。

SK05

調査区の中央やや北寄りに位置する。平面形は径85cmほどのややいびつな円形を呈し、断面形は皿状で、検出面からの深さは14cmを測る。他の遺構との切り合い関係は不明である。

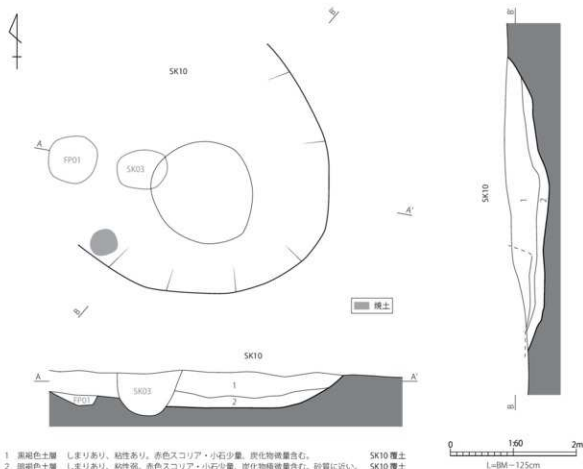
SK06

調査区の中央北寄りに位置する。平面形は長径145cm、短径95cmの楕円形を呈し、断面形は皿状で、検出面からの深さは10cmほどである。調査時の所見によれば、SK07に切られるようである。



- | | | |
|----------|--------------------------------------|---------|
| 1 褐色土層 | しまり弱、粘性あり。黄灰褐色土（灰）多量、埴土少量含む。 | FP01 覆土 |
| 2 黒褐色土層 | しまりあり、粘性あり。赤色スコリア・小石少量含む。 | SK03 覆土 |
| 3 暗褐色土層 | しまりあり、粘性あり。赤色スコリア・小石少量含む。 | SK03 覆土 |
| 4 褐色砂質土層 | しまりあり、粘性なし。赤色スコリア微量、小石少量含む。 | SK03 覆土 |
| 5 褐色土層 | しまりあり、粘性あり。小石少量、炭化物微量含む。黄褐色土が混ざる。 | SK02 覆土 |
| 6 暗褐色土層 | しまりあり、粘性あり。赤色スコリア・小石・炭化物少量含む。 | SK02 覆土 |
| 7 暗褐色土層 | しまりあり、粘性あり。赤色スコリア微量、炭化物・小石少量含む。 | SK02 覆土 |
| 8 黒褐色土層 | しまりあり、粘性あり。赤色スコリア微量、炭化物含む。 | SK02 覆土 |
| 9 暗茶褐色砂層 | しまりあり、粘性なし。 | SK02 覆土 |
| 10 暗褐色土層 | しまりあり、粘性あり。赤色スコリア・小石（溶岩片）少量、炭化物微量含む。 | SK04 覆土 |

第20図 SK01～SK09、FP01



- 1 黒褐色土層 しまりあり、粘性あり。赤色スコリア・小石少量。炭化物微量含む。 SK10 覆土
 2 暗褐色土層 しまりあり、粘性弱。赤色スコリア・小石少量。炭化物微量含む。砂質に近い。 SK10 覆土

第21図 SK10

SK07

調査区の中央北寄りに位置する。平面形は長径123cm、短径70cmの楕円形を呈し、断面形は皿状で検出面からの深さは16cmを測る。調査時の所見によれば、SK06を切るようである。

SK08

調査区の中央北端に位置する。楕円形の土坑状になると推定される。深さ20cmほどの部分的な落ち込みを検出したのみで、全容は不明である。SK07に切られる。SK09とも切り合いをもつが、その前後関係は不明である。

SK09

調査区の中央北端に位置する。楕円形の土坑状になると推定される。深さ20cmほどの部分的な落ち込みを検出したのみで、全容は不明である。SK08と切り合いをもつが、その前後関係は不明である。

SK10

調査区の南西に位置する。西半分は検出されなかったが、南北径4.20m、深さ50cmほどの皿状を呈する大型の土坑である。SB02とSK02を切り、SK03に切られる。

(3) 炉

FP01

調査区の南西、SK03の西に位置する。径76cm、深さ16cmの円形の掘り込みに多量の灰と少量の焼土を含む覆土が入る。土層観察から炉と考えられる。

2次調査の遺物について

2次調査での遺物出土量は非常に多く、コンテナ20箱分の縄文土器および石器が出土した。

(1) SB01 出土遺物 (59～62)

59は松ノ木式土器に該当する。外面は白く内面は黒い色調で、沈線による重複した方形の意匠が施されている。

60・61は土器底部である。どちらも大きく外向しており浅鉢とみられる。底面に網代痕を残す。

62は加曾利E4式土器に該当する。口径が窄まる形状であり、口縁部に一体化した隆帯、頸部方向へ斜行する隆帯が見られ、充填縄文が見られる。

(2) SK02 出土遺物 (63～66)

63～65は深鉢である。63は縁帯文式に該当する。頸部で少し縮れてから膨らむ胴部からなる。口唇部には沈線と円孔があり、無文帯に円孔が見られる。頸部では2重のL字状もしくはJ字状沈線が胴部と分帯するように配される。64は堀之内式に該当する。65は五層ヶ台式とみられ、頸部が強く屈曲し口縁部が直立する形状となる。口縁部は隆帯によって肉厚であり、胴部には横位の3重沈線が施される。

66は磨石Bに該当し、石材は安山岩である。正裏面に磨痕、側縁部に打痕が確認できる。形状は厚

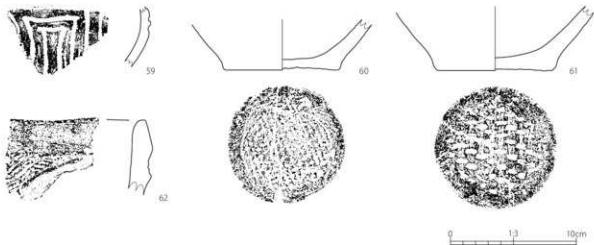
みのある円礫を素材とし、断面形は上面が弧状なのに対し下面は平状である。非常に顕著な磨痕を示しており、打撃使用後に磨いたとみられ前後関係を確認できる。打痕も同様に顕著な使用痕を示しており、正面から見て上側縁部・左側縁部に集中的な打痕が確認できる。

(3) SK06 出土遺物 (67)

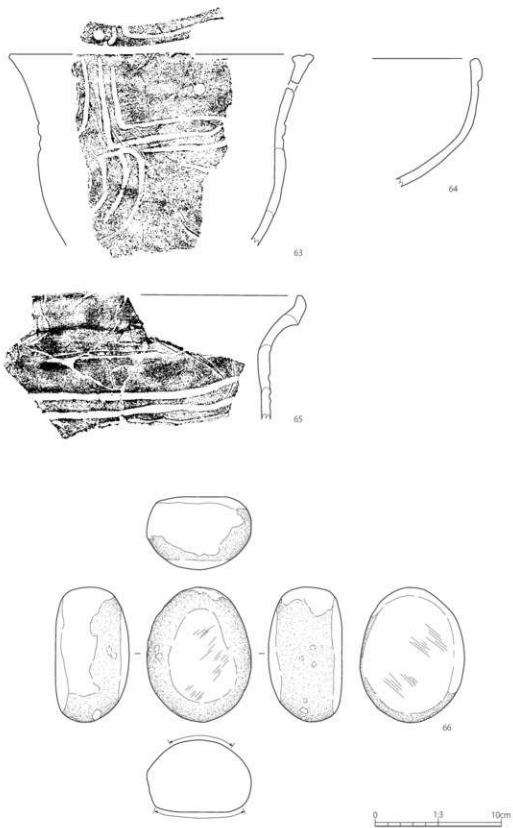
67は福田K2式新段階に該当する。広い口唇部と比較的薄い胴部の形状となり、胎土に雲母が含まれ、全体が黒色である。口唇部に2重沈線、磨消し縄文、磨きが施されており、縄文は粗く磨り消されている。胴部も同様に磨消し縄文、沈線、磨きがみられ、内面においても全面的に磨かれている。沈線によって区画され、上から横位の磨消し縄文と磨きの無文帯、3重沈線と隙間に縄文が配され粗い磨りが見られる。

(4) SK08 出土遺物 (68)

68は堀之内式に該当する。口縁部から底部まで残る。口縁部は平口縁で2つで1単位の円形押圧文が4つ配され、その間に太い沈線が廻る。頸部は無文帯であり、胴部にてRLの撫糸縄文が器体上半分まで施され蛇行文が8つ施文されている。



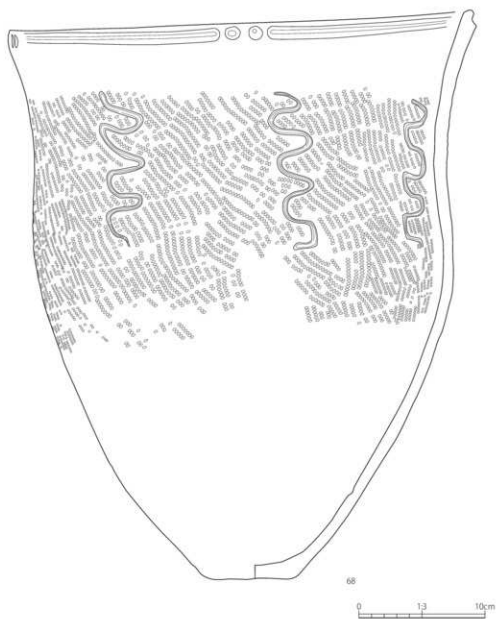
第22図 第1地区(2次調査)SB01出土遺物



第23図 第1地区(2次調査)SK02出土遺物



第24図 第1地区(2次調査)SK06出土遺物



第25図 第1地区(2次調査)SK08出土遺物

(5) 包含層出土土器 (69～150)

精製土器

78・99・114は福田K2式に該当する。102・106・115は称名寺式に該当する。69～77・79～98・100・101・103～105・107～113・116～123・127は堀之内式精製土器に該当する。70～89、91、92、95、97、101～109、111～114、116～121は深鉢である。その内69～85、87～89、91、92、95、101～106、116～120は口縁部を残す。

69～72は口縁部に突起を持ち円孔を開けている。円孔の周りには沈線と刺突文などが施されている。70は胴部に2重沈線を残す。

73・74は頸部口径が細くなるS字断面形の形状を有し、いずれも頸部は無文帯であり胴部に施文が見られる。73は口縁部に2つ円形押型文がある突起部を持ち、不規則な配置で2単位確認できる。頸部に把手部があり、胴部には3重沈線による懸垂文が見られ下半分は無文である。74にも同様に突起部があり沈線と円形押型文による意匠が見られる。横位の沈線による区画内にてLRの充填縄文と中に円形押型文を多数持つ楕円文が見られ、堀之内2式の可能性もある。77は波状口縁の頭頂部であり刺突文、沈線文、縄文を残す。

78・79は屈曲もしくは湾曲した頂部を持ち、波状口縁となる。78は福田K2式新段階とみられ、口縁部が内側へ屈曲し口縁頂部に沈線文と刺突文による意匠を残す。頸部は無文帯で胴部には2重沈線を基本とした横位沈線文が区画を引き、沈線による横位J字文、刺突文が見られる。79は78と違い口縁部が緩やかな波状となり、前者ほど分帯の意匠は見られない。円形押型文と刺突文が見られる。頸部は無文帯で胴部に沈線が見られJ字文とみられる。

80～85、87～89、92は波状口縁部の頭頂部であり、その内81、87、89は把手である。

91は口縁部の裝飾であり、台座のような部分に円孔が開けられ、ヘビのような意匠が模られている。

101～106は平口縁であり、頸部に湾曲はみられない。101は口縁部に沈線が見られ、胴部は2重沈線を基本とした懸垂文と渦巻文が確認でき、沈線間に磨消し縄文が見られる。102は胴部に沈線で区画された充填縄文帯がある。103は口縁部に刺突文、

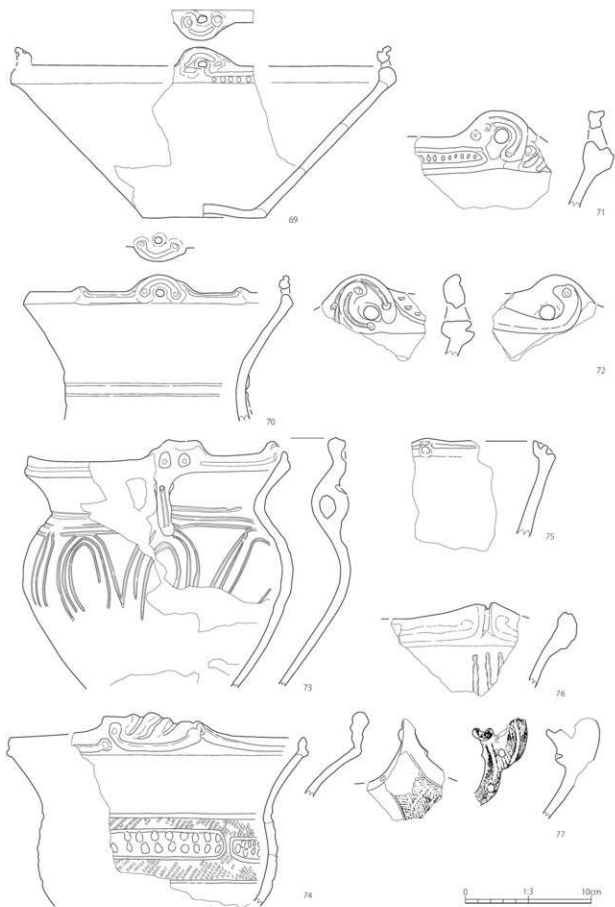
胴部に沈線を残す。104は口縁部に沈線文、胴部に縦位の沈線文と楕円押型文がある。105は口縁部に2重沈線があり沈線間に刺突文が施され、胴部は地文が縄文である。106は口縁部に沈線と連続する円形押型文が見られ、胴部には縦位で斜行する方形の沈線文がある。

116～120は平口縁を残し、いずれも口縁部に隆帯刺突文、胴部に横位の施文が確認できる。117～119は胴部の沈線区画内に磨り消し縄文による充填がされている。120は堀之内2式新段階であり、口縁部外面に横位刺突隆帯文、内面に5重沈線文が施され、沈線の上から1番目と3番目には縄文の痕跡が見られる。口唇部突起は丸く全体に細い沈線が多数施されており、貝を模った意匠であるとみられる。

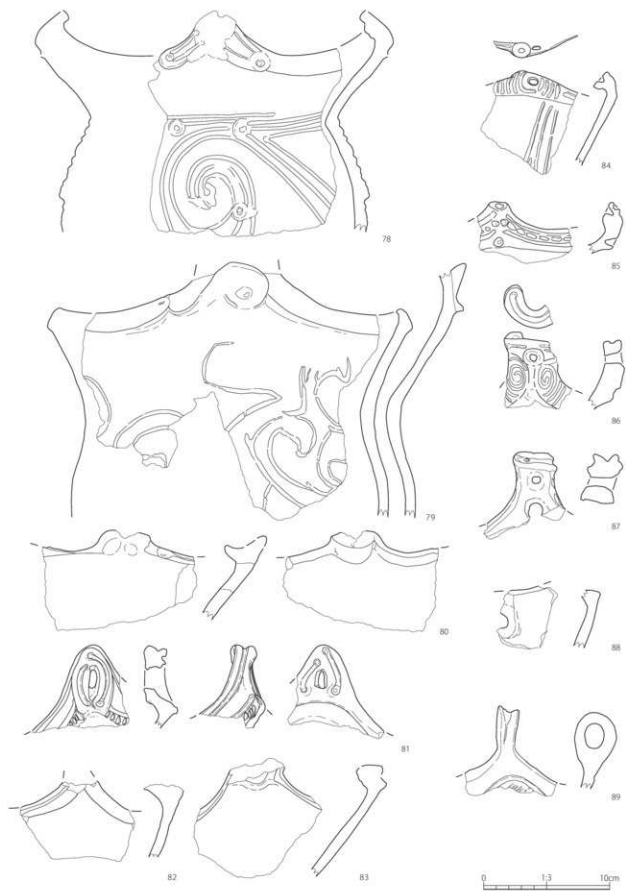
86・95・97・100・107～109・111～114は深鉢の胴部のみを残すものである。86はミミズク状突起である。95は把手とそれに伴う隆帯が施され、縦位楕円文とRL縄文が見られる。97は堀之内1式に該当し、頸部に刻目隆線文と4方向に刺突文を施す突起部がある。胴部には沈線による懸垂文と磨消し縄文が見られる。100は懸垂文と磨り消し縄文が見られる。108は丸みのあるX字状斜行の横位施文と磨消し縄文が確認できる。109は楕円文が4単位と3単位確認できる。111は楕縁部に楕円押型隆帯文があり、そこから縦横に刺突隆線文が伸びている。下部には単線文による意匠と磨消し縄文による充填が見られる。112は弧状の重複沈線が確認できる。113は平行する単線文が見られる。114は3重沈線を基本とし頸部に沈線と刻目目文、胴部には曲線の意匠が見られる。

110・121・122は深鉢の底部である。110は胴部に懸垂文の一部を残すが、121・122は横位沈線文帯が確認できる。網代痕は121・122に見られる。

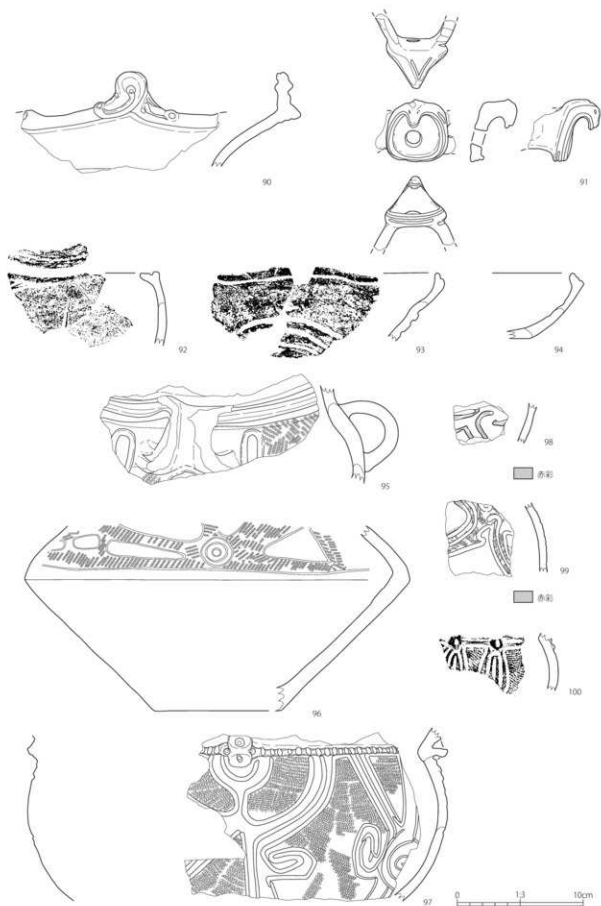
69、90、94は浅鉢である。69は口縁部と底部を残し、器形が広角であったことを示している。口縁突起部は円孔を囲う沈線文と刺突文による施文が内外面に確認できる。口縁部には横位刺突文による施文が見られる。90は波状口縁の1単位を示す。口縁部は無文であるが口唇部が隆帯によって厚みを増しており、隆帯と沈線によって振り上げるように波状突起が造形されている。



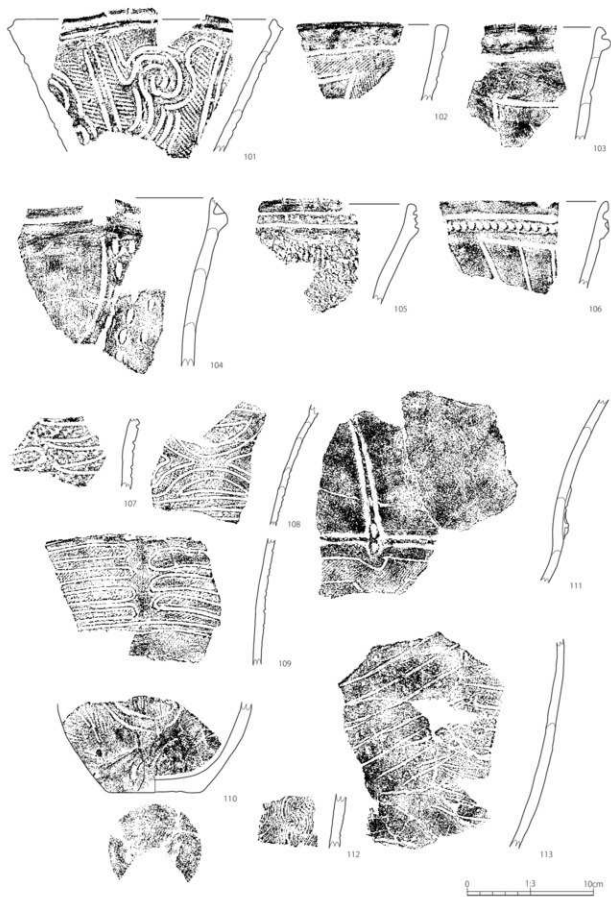
第26图 第1地区(2次調査)包含層出土遺物(1)



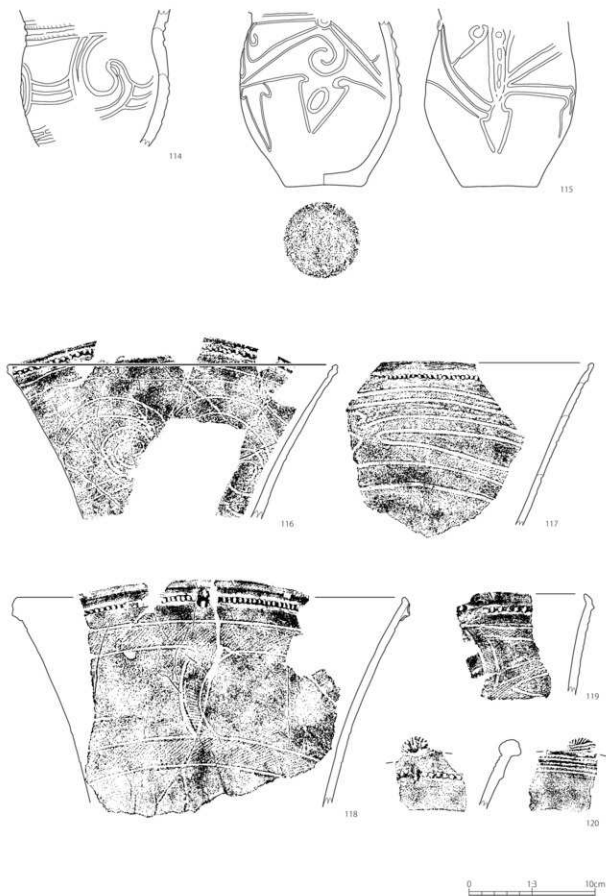
第27図 第1地区(2次調査)包含層出土遺物(2)



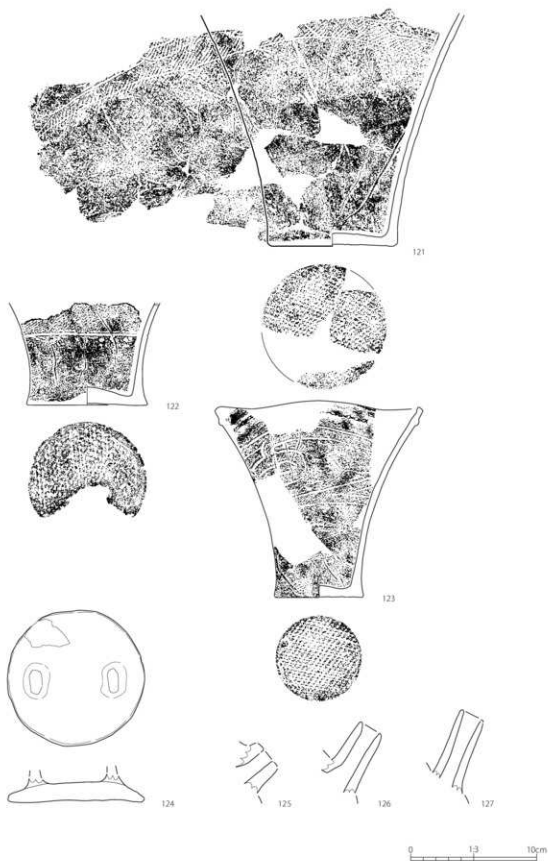
第28図 第1地区(2次調査)包含層出土遺物(3)



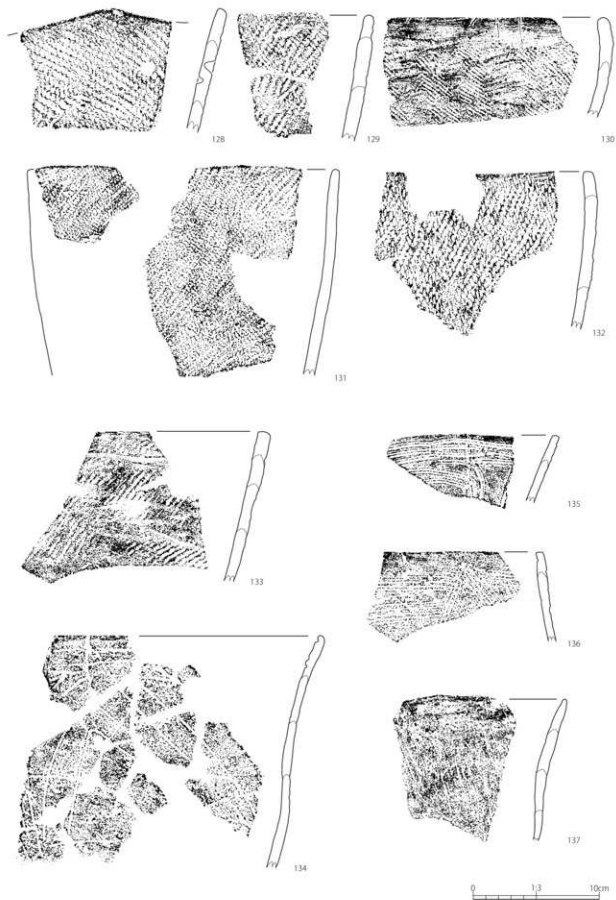
第29図 第1地区(2次調査)包含層出土遺物(4)



第30図 第1地区(2次調査)包含層出土遺物(5)



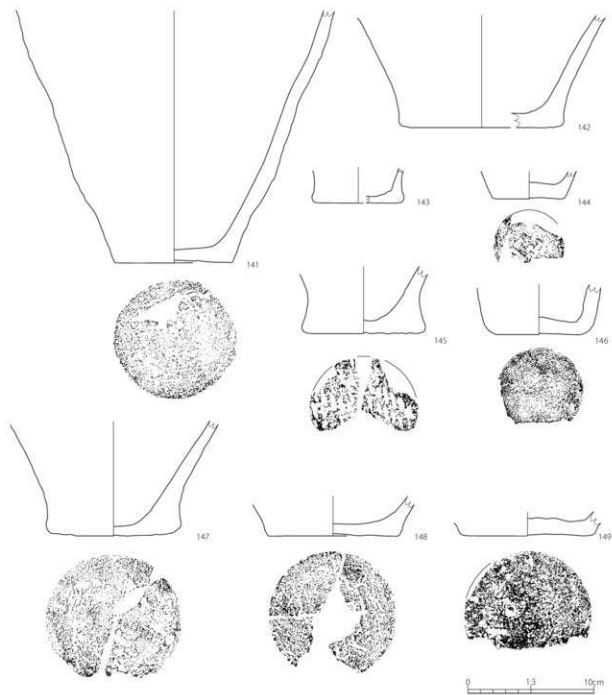
第31图 第1地区(2次調査)包含層出土遺物(6)



第32図 第1地区(2次調査)包含層出土遺物(7)



第33図 第1地区(2次調査)包含層出土遺物(8)



第34図 第1地区(2次調査)包含層出土遺物(9)



第35図 第1地区(2次調査)包含層出土遺物(10)

115・123は小型鉢である。115は称名寺式新段階頃の土器とみられ、胴部と底部を残す。刺突隆帯文の他に単沈線による意匠が目立ち、斜行文、渦巻文と矢印のような懸垂文が見られる。123は口縁部の現状の形状や刺突隆帯文から察するに浅く湾曲しており、ゆるい波状口縁の形状を取るものと思われる。器形は底部から反り返るように広がる形状をとる。単沈線による横位施文がされ磨消し縄文による充填が見られる。底部には網代痕を残す。

124は蓋形土器である。扁平な円形の器形であり、2箇所の凸部は摘みであったと考えられる。

125～127は注口土器の注口部である。

堀之内式：粗製土器

128～140は深鉢の口縁部を残すものである。128・129・131～133は地文に燃糸縄文が見られる。128は胴部にRL縄文の施文が見られるが、他はLR縄文の施文である。134～136は沈線による施文が確認できる。134は2重沈線を基本とした斜行文が見られ、口縁部内面にも沈線がある。135は口縁部に3重沈線があり、そこから上がる沈線が確認できる。136は細い沈線による集合沈線が横位、斜位に施文されている。137は無文の縄文土器である。138は大型深鉢であり無文である。139・140は単沈線による斜行文の間に、縄文による押型文が見られる。

底部

141～149は底部である。内145・146は網代痕を残す。

加曾利E4式

150は胴部から口縁部にかけて口径が細くなる器形を示す。口縁部は無文であり横ナデによる成形が窺え、頸部に胴部との境界となる隆帯が引かれている。胴部には縦位の楕円文の一部が見られ充填縄文が確認できる。

(6) 包含層出土石器 (151～196)

151・152は石畿である。形状はどちらも凹基無茎畿であり、石材はどちらも黒曜石である。151は凹基三角形畿の完形であり、両面とも全面に加工痕が認められる。152は先端および下部両端を欠き、基部は151に比べ抉りが深く、推定される脚部は長い。一部に主要剥離面を残す。

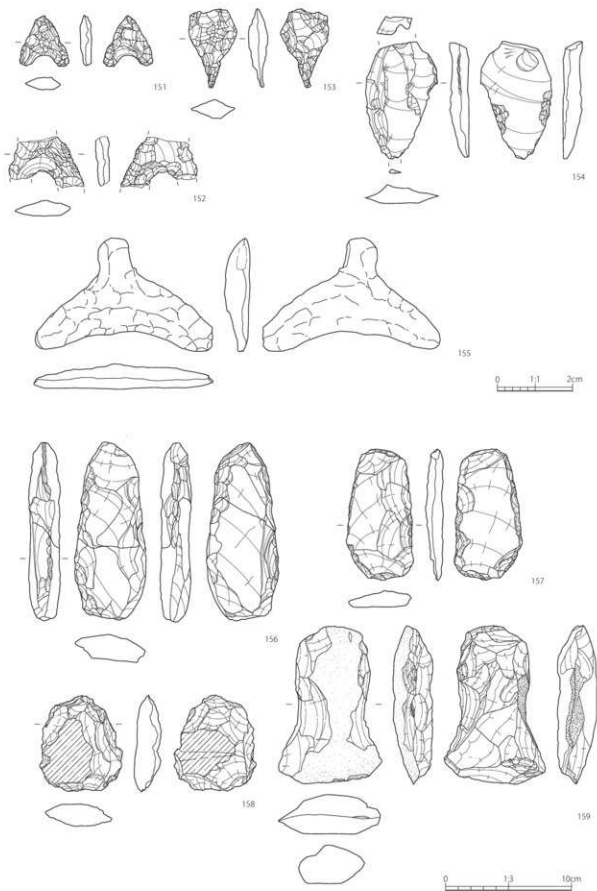
153は石錐であり、石材は黒曜石である。形状は二等辺三角形に近く、細長く加工された錐部と加工されたつまみ部を有する。錐部は先端の厚さが薄く、つまみ部へ向かうにしたがい急激に厚くなる。階段構造状の剥離状況から、下端から上部方向へ縦に剥離したものとみられ、使用による破損が考えられる。その後に再利用のため同箇所二次加工が施されているとみられる。

154はナイフ様石器であり、石材は黒曜石である。刃部とみられる鋭利な片側縁を持ち、対向する片側縁において急峻な二次加工が施され、欠けてはいるが先端を尖らせた形状となっている。背面の剥離痕からは主要剥離面のリング方向と同方向へ打たれたことを示すリングが観察でき、石核から同一方向へ連続した剥離が行われていたものと考えられる。刃部には広い範囲で微細剥離が観察でき、使用痕の可能性はある。加えて刃部に対し腹面に二次加工が見られ、刃部を鋭利にするための加工が再生に伴う加工の可能性はある。

155は石匙であり、石材はホルンフェルスである。形状は横長でつまみ部を有し、下部縁が内湾している。両面とも加工痕が確認できるが石材の風化が著しく進んでおり、詳細についての観察は困難である。

156～161は打製石斧である。

156～158は打製石斧Aに該当し、石材は緑色岩と緑色片岩である。短冊形に近い形状を呈し、156は裏面に主要剥離面を残し周縁から直交する直接打撃によって成形されている。裏面は全面に剥離痕が残り多方向からの剥離痕である。周縁部の成形は正面と同じである。刃部は欠損しており、使用によって壊れたものと推察される。二つに割れていた資料のようで、接着剤による接合が行われており、接合前の割れ状況の観察は難しい。157は正面に多方向の剥離痕、裏面に主要剥離面を残す。器体は少々湾



第36図 第1地区(2次調査)包含層出土遺物(11)

曲しており、厚みは薄く素材が大きめの剥片であったことが伺える。周縁部に直接打撃による直交した剥離が見られ、小さな剥離痕が連続しており加撃の力は弱いとみられるが、正面右側面には中心まで達する剥離が集中しておりこちらは加撃の力が強い。158は正裏面に大きい節理面があり周縁部に加工が施されている様相を呈する。石材由来の性質も影響しているとみられるが、度重なる直接打撃による階段状剥離が施されたものと見える。楔形石器にも類似しているが両極技法の痕跡とは異なると判断し打製石斧としている。

159は打製石斧Bに該当し、石材は緑色片岩である。撥形の形状を呈し、正面は原礫面を残し両側縁から対向する剥離が認められ、裏面も同様の剥離痕が見られる。正面左側縁は右側縁に比べ加工が強く、特にくびれ部にて敲打痕が見られること、対向する縁辺にも大きめの剥離があり敲打痕が確認できないことから両極技法による加工が考えられる。刃部は調整が少なく直刃に近いが、両側縁にて剥離が確認されている。

160・161は打製石斧Cに該当し、石材は緑色岩である。160は分銅形の未製品と考えられる。正面に多方向からの剥離痕が認められるが裏面の大部分は原礫面を保っている。上部に大きな剥離痕があり欠損とみられるが、その後についた剥離痕のようなものも見られる。両側縁に剥離痕があり、特に正面左側縁は顕著で度重なる敲打によって大きく抉れるように成形されている。しかし反対の縁辺には抉りの加工はなく少し内反りの形を呈し、両極技法による剥離であると思われる痕跡が残る。161は分銅形の形状を呈している。正面に原礫面を広く残し、刃部の辺と両側縁部に大きな剥離痕を残す。裏面は下部中央の一部に主要剥離面と思しき剥離面があり、周縁部から直交する剥離が施されている。両側縁の抉り部は両極技法による敲打痕と剥離痕を確認できる。刃部は折損と思しき大きな剥離の後に小規模剥離があったとみられる。

162～164は磨製石斧でありいずれも定角式の形態を呈している。石材は162・163が透閃石であり、164は蛇紋岩である。162は刃部が欠損しており使用していたことが考えられる。163・164は刃部に

細かい剥離と磨滅もしくは再研磨による痕跡が見られ、直交する線条痕も確認できる。

165は楔形石器であり、石材は緑色岩である。扁平な円礫を素材とし、対向する剥離の状況から石錘に類似するが、抉りの加工が認められないこと、上端に敲打痕が集中し下端の縁辺に剥離とつづれた縁辺があることから、両極技法により成形された楔形石器と判定する。

166～184は石錘である。

166～182は石錘Aに該当し、石材は砂岩、緑色岩、緑色片岩、安山岩、斑レイ岩である。長軸上の対向する位置に抉りの加工がなされている。大きさの似通った素材が多く選択的な素材獲得が推察される。

183・184は石錘Bに該当し、石材は緑色岩、緑色片岩である。どちらも同じような円礫を素材とし、長軸上の対向する位置に擦りによって切れ目を入れられている。

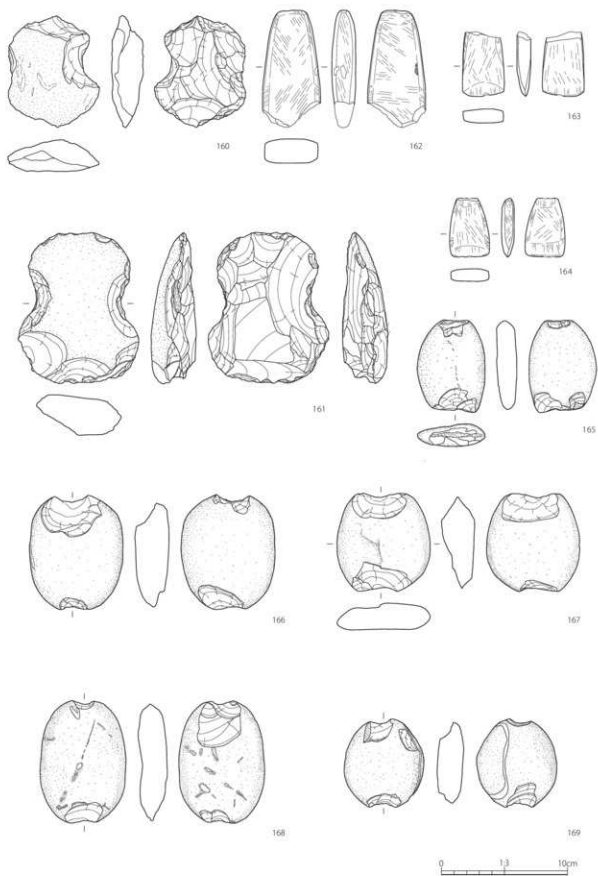
185～190は磨石類である。

185・186は磨石Aに該当し、石材は砂岩である。185は比較的厚みのある扁平な円礫を素材とする。正裏面の中央に凹痕と磨面を、周縁部に敲打痕を残し、敲打痕に関しては正面右側縁部に集中する。石材は砂岩である。186は扁平な円礫を素材とし、正面に浅い凹痕と磨面、裏面に敲打痕と磨面、周縁部に敲打痕と磨面が確認できる。下端の磨面は顕著であり、若干角張るまで利用している。

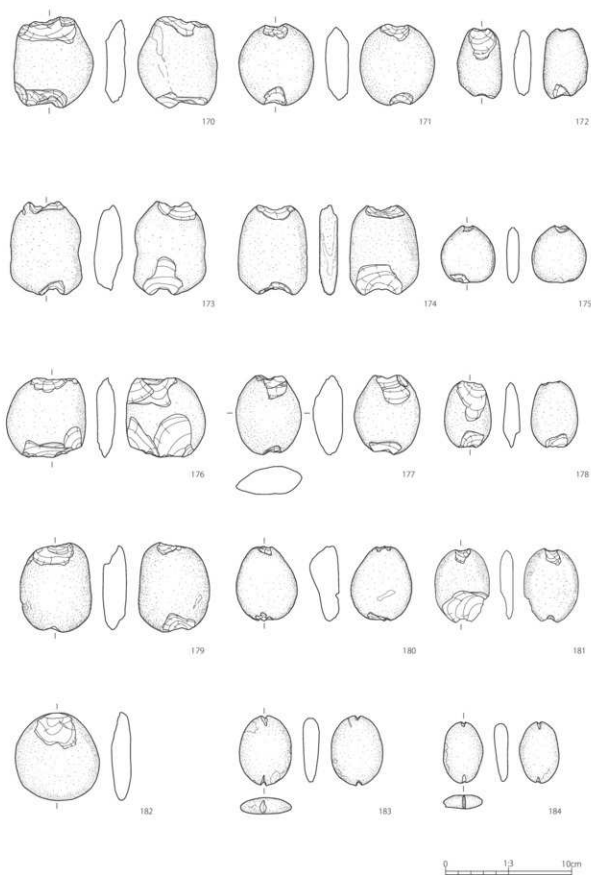
189は磨石Bに該当し石材は砂岩である。断面形がやや潰れた円形で厚みのある丸礫を素材とし、正裏面に磨面が認められる。

187・188は磨石Cに該当し石材は閃緑岩、安山岩である。187は扁平な円礫を素材とし正面と周縁部に敲打痕が認められる。石材は閃緑岩である。188は扁平な円礫を素材とし正面と上端に敲打痕が認められる。

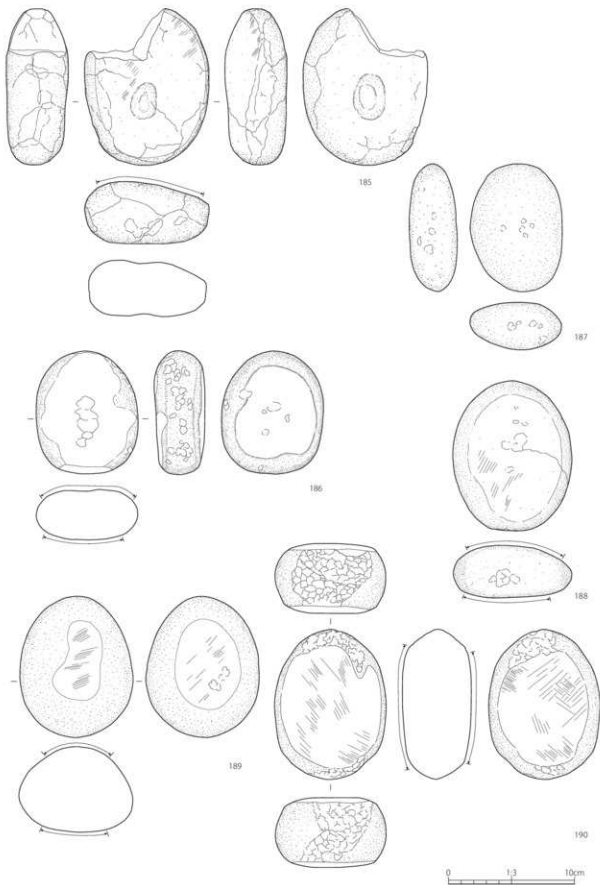
190は磨石Dに該当し、石材は安山岩である。厚みのある扁平な円礫を素材とし、正裏面に広範囲の磨面、長軸両端部に敲打痕が認められる。磨面の発達著しく、両面とも集中的な使用が見られる。特に裏面は顕著であり、角がたつほどに磨滅している。敲打痕の状態からも度重なる使用が推察され、特に上端部の広範囲に敲打痕の集中が確認できる。



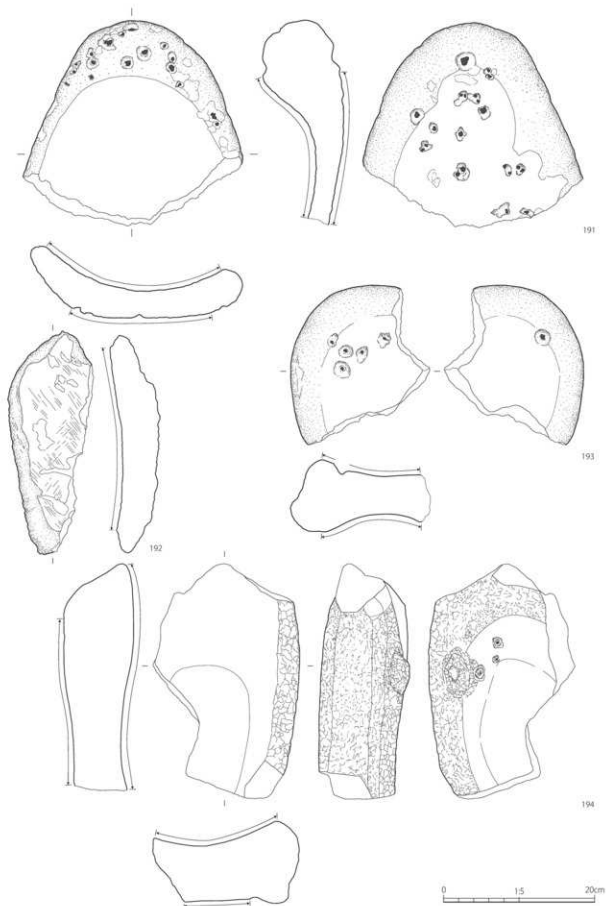
第37図 第1地区(2次調査)包含層出土遺物(12)



第38图 第1地区(2次調査)包含層出土遺物(13)



第39図 第1地区(2次調査)包含層出土遺物(14)



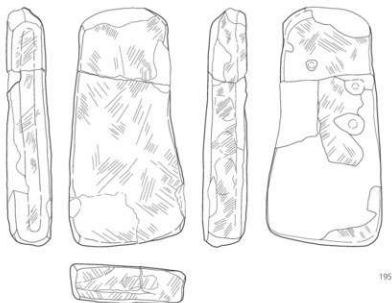
第40图 第1地区(2次調査)包含層出土遺物(15)

191～194は石皿である。

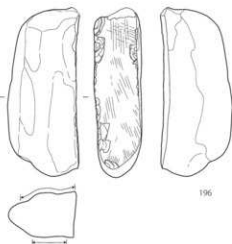
194は石皿Aに該当し石材は安山岩である。半分以上を欠損しているが器形は大きく、原形は現状の2倍以上はあったことが推察され、器形は長方形に近い形態であったと思われる。器体の正面は大きく窪んでおり、全面にわたり磨かれている。周縁では折損部以外の全体で敲打痕が見られ外形を敲打によって成形していることがわかる。これは側面においても同様である。裏面では正面ほど徹底されていないものの、中央が浅く窪み内に磨面が確認でき、少数の穿孔痕が見られる。裏面周縁に関しては磨痕範囲以外のほぼ全面で敲打痕が確認できるが、特筆

すべきは脚部の作出が認められることであり裝飾的なものと考えられる。原形では対なる脚部が最低でも1つあったであろうことが推測される。以上のことを踏まえ、本遺跡の石皿の中でも特に管理的な石器であったのではないかと見ている。

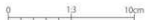
191～193は石皿Bに該当し、石材は安山岩である。191は約半分以上が欠損しているため、原形は大型であったことが推察される。正面はすり鉢状の非常に深い窪みが広範囲に及び、全面で磨面が認められることから高頻度での利用が考えられる。正面周縁の外形は原礫の形状と稜面を保っているが、複数の穿孔痕と敲打痕らしき潰痕が見られる。裏面では窪



195



196



第41図 第1地区(2次調査)包含層出土遺物(16)

みは確認できないが接地面らしき範囲を磨いており、掘えるための成形痕と思われる。加えて正面周縁と同様の穿孔痕と潰痕が散見され、正面とは異なった利用による作業面であった可能性を指摘できる。以上のことから、正面の磨面を利用する石皿的性格と正面周縁部と裏面の穿孔痕・潰痕跡を残すような蜂の巣石的性格の両属性を持つ石器であると考えられる。192は残存部位が部分的であり原形を推察するのは難しいが、残存部位の作業面の大きさから大型の石皿であったと推察する。正面は窪みの磨面のみで風化が進んでいる。裏面も同様に風化が進み表面情報は不明瞭である。193は比較的大型の円盤を石材とし正裏面を窪ませた形状となっている。大きく欠損しており、原形は大型であったことが推察される。正面はすり鉢状の窪みとそれに伴って磨面、穿孔痕が確認できる。裏面も正面の特徴と同様の痕跡を示しており、前後関係は不明であるが表裏で同様の作業を同程度行っていたことが考えられる。

195・196は砥石である。195は粗い砂岩を石材とし、板状の長方形を呈する。以前の整理作業の際に接着復元がされたようで接着以前の様相は不明である。5面において磨痕が確認できる。正面はほぼ全体が磨面となっており、多方向からの線条痕が観察できる。裏面は磨面と穿孔痕が複数見られ、作業面が全体にわたっていたと思われるが、石材の風化に伴い表面の多くが剥がれ落ちているため判別は難しい。正面左側面は磨面が全体にわたっていることに加え、溝状の磨痕が長軸に平行するように形成されている。正面右側面は形状的に若干弧状に反っており、全面に磨痕が確認できる。また小範囲の磨痕が

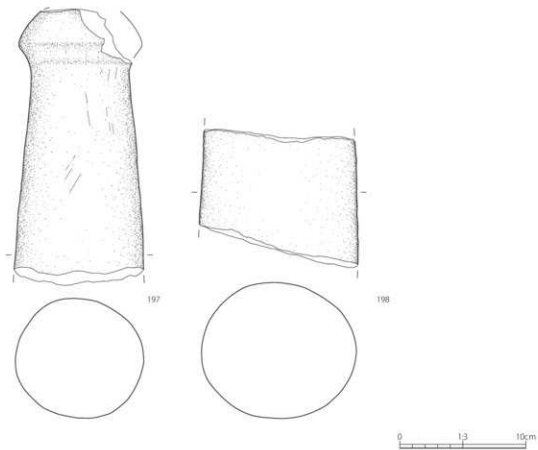
点状に見られる。下端側面も正面右側面と同様の使用痕を残す。これらから少なくとも4種類の異なる使用痕が確認でき、それぞれ異なる加工による痕跡だと考えられ、被加工物は不明であるが使用状況から加工具であると推測し砥石としている。縄文時代に由来するものと見ているが、正裏面の激しく摩擦した作業面などを見るに古墳時代の遺物である可能性も考えられる。196は砂岩を石材とし、3面に作業痕を残す。正裏面はともに広い範囲で磨面が形成されており、特に正面が顕著である。加えて4つの溝状磨痕が見られ、面的な磨痕とは異なった使用が考えられる。正面右側面において磨痕は見られないが縁に調整痕らしき剥離が見られ、スクレイパーに近いかと考えられるが加工が弱く、いかなる意図の加工か判断するのは難しい。

(7) 包含層出土石製品 (197～198)

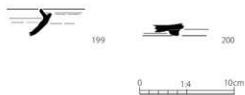
197・198は石棒に該当し、石材は安山岩である。197は下端部が欠損しているが上端の有頭部が一部残存しており明確な石棒の特徴を示している。断面形状は円形である。198は両端が欠落しており原型は不明であるが上部から下部へ裾が少し広がるような形状であり側面を全面磨いていることから石棒と判断した。断面形状は円形で197などと比べると同じくらい大きい。197と198は同一個体の可能性がある。

(8) 包含層出土須恵器 (199～200)

199は須恵器で、蓋受けをもつ坏身である。200は須恵器の高台坏であり、底部が高台より突出するものとみられる。

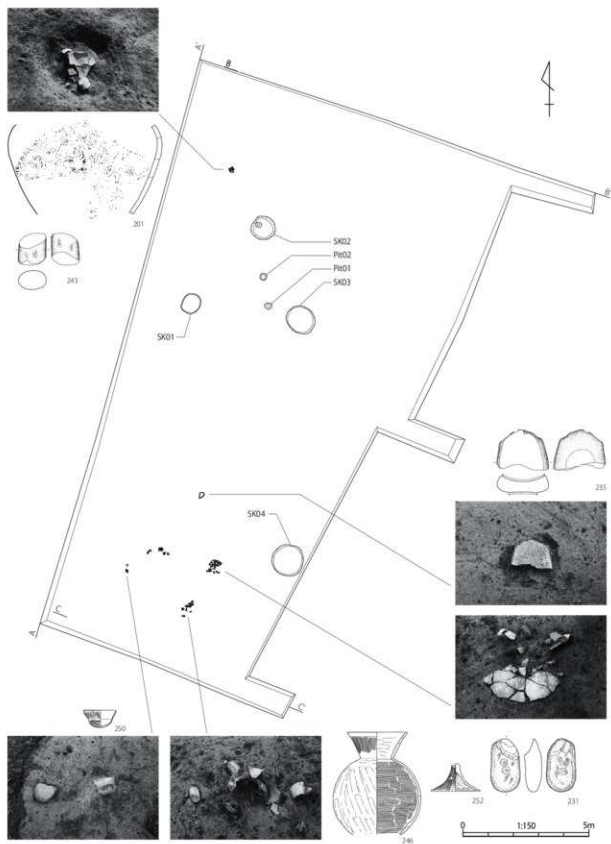


第42図 第1地区(2次調査)包含層出土遺物(17)



第43図 第1地区(2次調査)包含層出土遺物(18)

第2節 第2地区の調査成果



第44図 第2地区(3次調査)調査区全体図

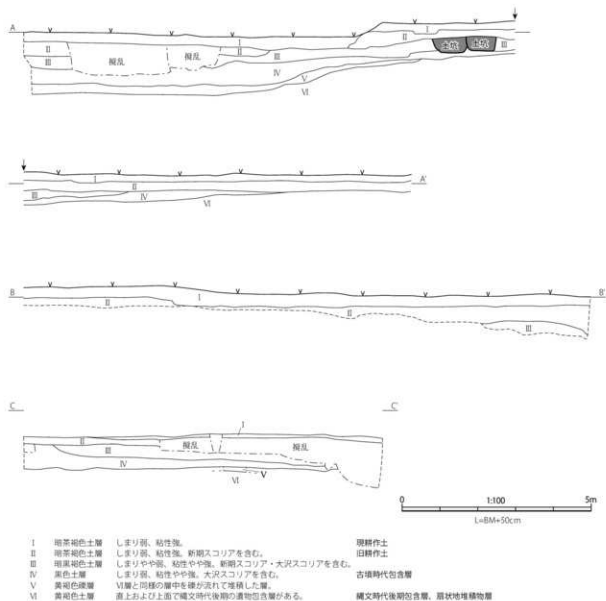
土層について

中島遺跡第2地区（3次調査）で確認された土層の堆積状況は次のとおりである。

- I層 暗茶褐色土（現耕作土）
- II層 暗茶褐色土 新期スコリアを含む。（旧耕作土）
- III層 暗黒褐色土 新期スコリア・大沢スコリアを含む。
- IV層 黒色土 大沢スコリアを含む。
- V層 黄褐色礫
- VI層 黄褐色土 扇状地堆積物層。

このうち、IV層が古墳時代の遺物包含層であり、VI層上層は縄文時代後期の遺物包含層である。

また、調査地は窪地となっており、全体に南東方向に緩く傾斜している。

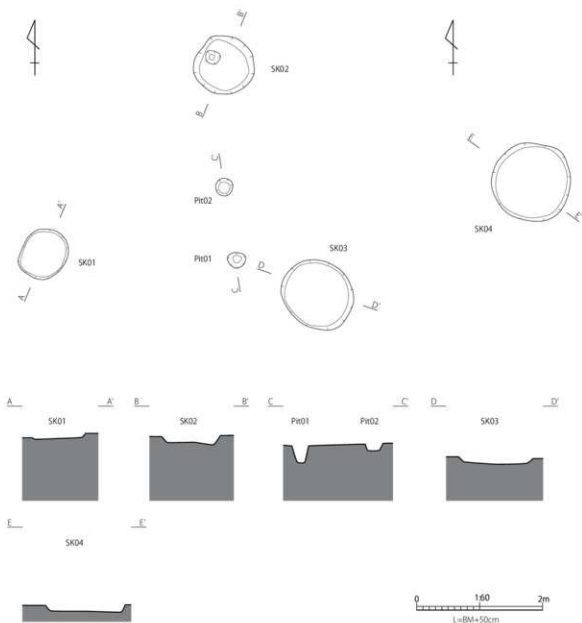


第45図 第2地区（3次調査）調査区セクション図

遺構について

古墳時代遺物包含層であるIV層上面で、土坑4基 (SK01～04)、ピット2基 (Pit01～02) を検出した。土坑はいずれも平面は円形、断面は浅い箱形を呈し、規模は、SK01が径84cm×深さ10cm、SK02は径92cm×深さ15cm、SK03は径117cm×深さ12cm、SK04は径126cm×深さ10cmである。ピットは平面が円形、断面はU字形を呈し、Pit01は径26cm×深さ27cm、Pit02は径27cm×深さ12cmを測る。

調査区西壁セクション(第45図A-A')においてもIII層から掘り込まれた土坑2基が確認されている。平面で確認されたSK01～04も同様にIII層から掘り込まれたものであり、これらの土坑は中世から近現代の遺構と捉えられる。Pit01～02については時期不明である。



第46図 SK01～04、Pit01～02

遺物について

コンテナ5箱分の縄文土器・土師器・須恵器と、コンテナ1箱分の石器が出土した。遺構に伴う遺物はなく、古墳時代以降の遺物はIV層上層で、縄文時代の遺物はVI層上層で、流れ込みの状況で検出されたものである。

(1) 包含層出土縄文土器 (201～222)

堀之内式：精製土器

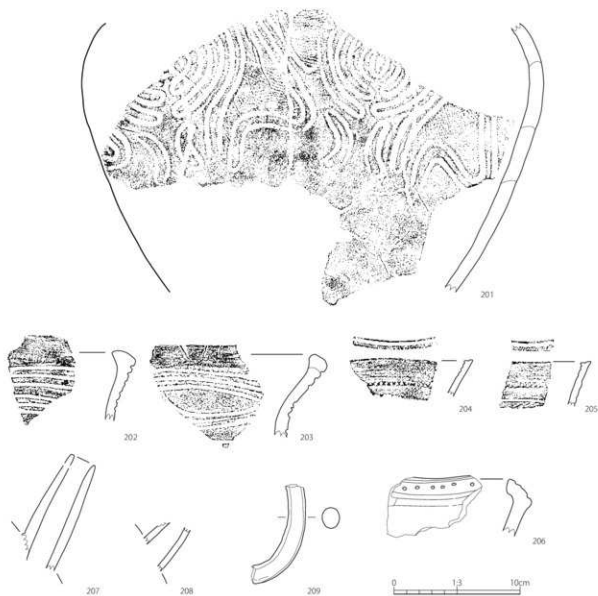
205・206は深鉢である。205は口唇部に刻目文と沈線を施し、口縁部内面に4単位の集合沈線と上から2番目の隆線以外に刻目文がみられる。外面には

細い刺突隆帯文、沈線が施され縄文帯に続く様子がみられる。206は口縁部が内側に屈曲しており、刺突隆帯文が施されている。

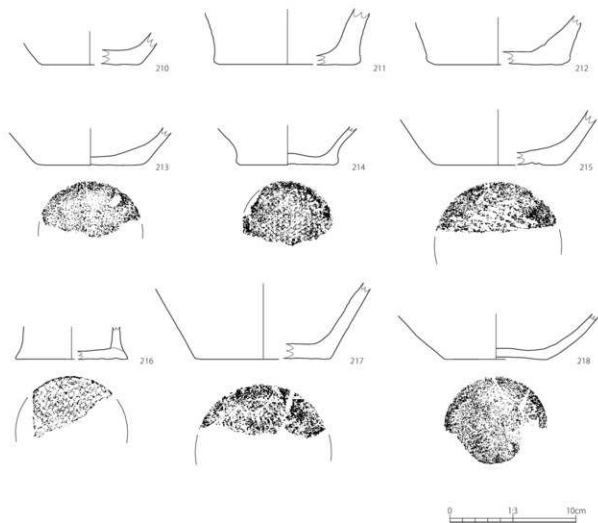
201は胴部になる。沈線により描かれた細長い楕円を同心円状に配置した渦巻文による施文であり、磨消し縄文による充填が見られる。

202～204は器形不明な口縁部であり、いずれも平口縁である。202・203は胴部に沈線による施文が見られ、どちらも3重沈線を基本単位としてみるとみられる。204は205とほぼ同じ意匠を持つ類似個体であり、口唇部に沈線をもつ。

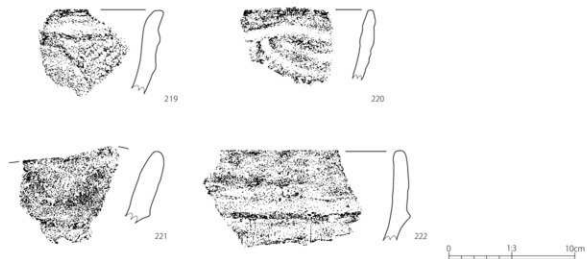
207～209は注口土器である。207・208は注口部



第47図 第2地区(3次調査) 包含層出土遺物実測図(1)



第48図 第2地区(3次調査) 包含層出土遺物実測図(2)



第49図 第2地区(3次調査) 包含層出土遺物実測図(3)

であり、209は把手であるとみられる。

210～218は底部であり210～217は深鉢、218は浅鉢であるとみられる。内214～216に網代直が確認できる。

加曾利式、曾利式

219は加曾利式土器の口縁部である。口縁部に横位隆帯、胴部にかけて斜行する隆帯がみられ、交差する付近に充填縄文が見られる。

220～222は曾利式土器の口縁部である。いずれも器体に厚みがあり、220は太い沈線による施文、221は無文、222は隆帯が見られる。

(2) 包含層出土石器 (223～238)

223～225は打製石斧である。

223は打製石斧Aに該当し、石材は緑色岩である。短冊形に類似した形状を呈する。刃部が折損しているが短冊形に類似するものとしている。正面に原礫面を残し、両側縁から垂直な剥離が確認できる。両極技法による成形とみられるが、表面が風化しており観察が難しい。裏面は主要剥離面を残し正面と同じく両側縁からの剥離が確認できる。刃部は前述通り欠損しているが、正面下端にて直交する小剥離が確認できることから、折損後に利用したか刃部再生を試みた可能性がある。

224・225は打製石斧Bに該当し、石材は緑色岩である。楕形に類似した形状を呈し、224は短冊形にも類似するが、中心で若干捻れることと刃部に向かうに従い幅が若干広がっていく形状から楕形とした。正面は原礫面を大部分で残し、両側縁と刃部から垂直方向の剥離が確認できる。裏面は主要剥離面を広く残し、四辺からの直交する剥離痕が見られ、加工状況は正面と一致する。基部に関しては裏面にのみ剥離が見られる。225は正面に原礫面を大部分に残し、基部・刃部・右側面から垂直方向の剥離痕を残す。裏面は主要剥離面を中央に残しつつ両側縁と刃部からの剥離痕が顕著であり、両側縁と刃部からはほぼ直交する剥離方向で施されている。正面左側縁には敲打痕が見られ、反対の縁辺には連続した階段状剥離痕が確認できることから、両極技法による成形が指摘できる。

226は磨製石斧に該当し、石材は蛇紋岩である。正裏面・両側面ともに磨かれており定角式の形態を呈している。刃部が欠損しており、裏面に端部から直交する剥離痕が見られることから、刃部方向からの衝撃により破損したものと思われる。

227～230は石錘である。

227～229は石錘Aに該当し、石材は砂岩、片麻岩である。いずれも正裏面の長軸上両端に数回の剥離によって抉入状の加工が施されている。礫形状は大よそ同じものであるが、227が若干大きい。

230は石錘Bに該当する。長軸上の両端に擦痕による切目状の加工が施されている。礫形状は227～229とは異なり細長い礫を利用している。

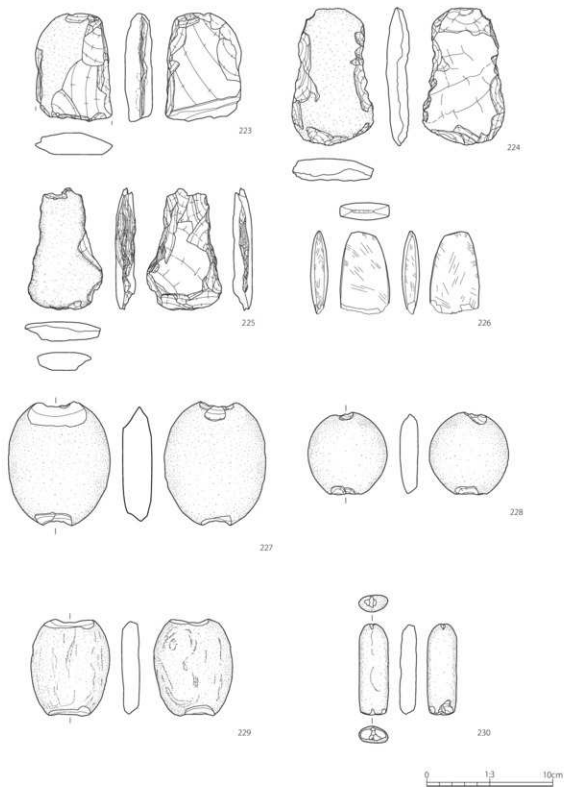
231～234は磨石類である。

231・232は磨石Aに該当し、石材は砂岩、溶岩である。231は正裏面の大部分にて原礫面を保っており、小規模の磨痕とそれぞれ2箇所凹痕を残す。正面上部に大きな剥離痕が確認でき、素材剥離の可能性もあるが詳細は不明である。232は正面に大きな穿孔痕が見られ、周囲では磨痕が確認できる。石材はスコリア礫である。

233は磨石Cに該当し、石材は砂岩である。正面の中央に縦長の磨面が形成されている。砥石にも近いと思われるが、線条痕の確認が難しく磨りによる光沢が見られるため磨石としている。

234は磨石Dに該当し、石材は砂岩である。正裏面は全面的に磨面が形成されており、正面中央に小規模の敲打痕が見られる。正面右側面も同様に磨面が見られ、正裏面よりも発達している。下部側面は薄い敲打痕の広がりが見られる。

235～238は石皿Bに該当し、石材は安山岩、溶岩である。235は下半分が欠損しており、原形は倍ほどの大きさであることが想定される。正面は主要作業面であるため広範囲にわたってすり鉢状の磨面が形成されている。裏面にも磨面が形成されているが正面と比べ加工具合は弱く、接地面を平坦にするための加工であるとみられる。236は下半分を欠損しており、原形は倍ほどの大きさであることが予想されるが、235よりも小型であると思われる。正裏面どちらにも磨面が形成されており、断面形状は両方とも同じような浅い反りを呈する。裏面では磨面



第50図 第2地区(3次調査) 包含層出土遺物実測図(4)

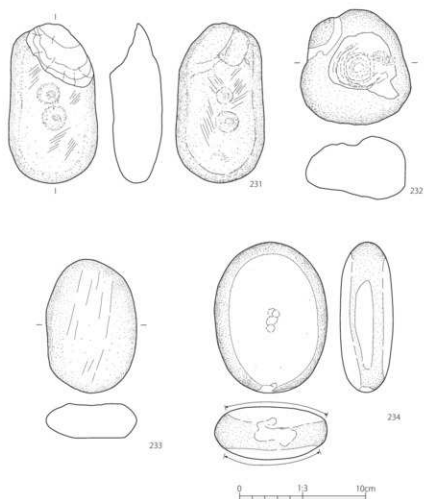
の広い範囲内で敲打痕が見られるが、成形に伴うものか使用に伴うものかの判別は難しい。237は下部において斜めに欠損し、元は現状よりも大型であると予想できる。正面は中心が大きく凹み、全面的に磨きの使用面とみられる。また中央付近に敲打痕が残る。周縁部は原礫面を残し目立った加工痕などは見られないが、小規模の敲打痕が確認できる。裏面では235などと同様な磨面が形成され、置くために均したと思われる。また敲打痕が散見され、いくつかは集中的な敲打の痕跡を示す。238は下半分が欠損しており、全体像は不明であるが原形は非常に大きいものであったと考えられる。正面は中心部が大きく凹み全面に磨きが見られ、周縁部においては全面的に敲打痕が残っており、成形に伴う痕跡と考えられる。側面に関しては礫面が残っており、成形が全体に及んでいたわけではないことがわかる。裏面

は全面にわたって磨り面が確認できるが正面に比べ加工度合は低い。中心とその周辺の敲打痕は加工に伴うものであるとみられるが、台石的な利用が行われていたと思われる。

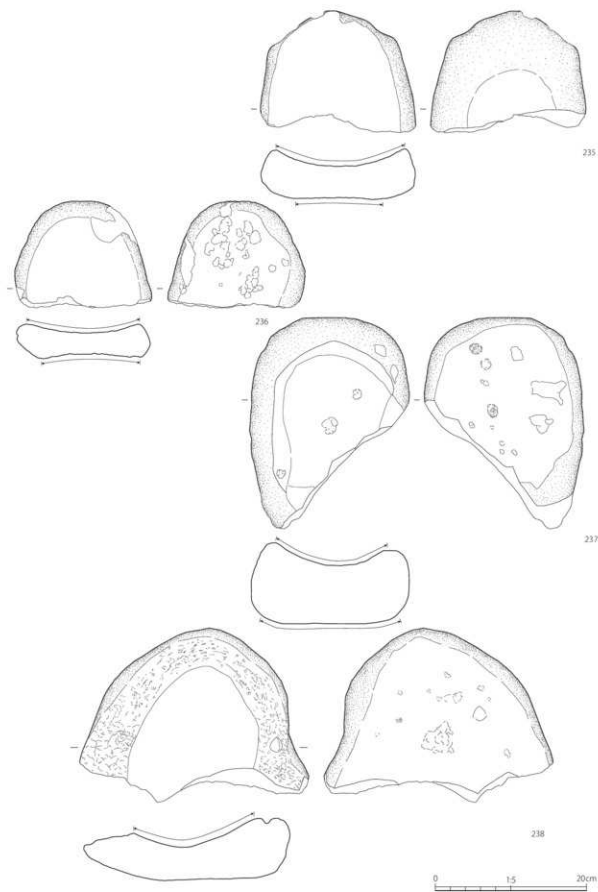
(3) 包含層出土土製品 (239～240)

239は装飾品である。元は瓶之内2式新段階土器の口縁部であると思われ、正面から左右面、下面が折れ面となる。施文としては横位の隆帯と沈線がみられる。口唇部には玉状の装飾がされ刻目文が施されている。土器として破損後に全体を磨いており正裏と折れ面ともに光沢が確認できる。

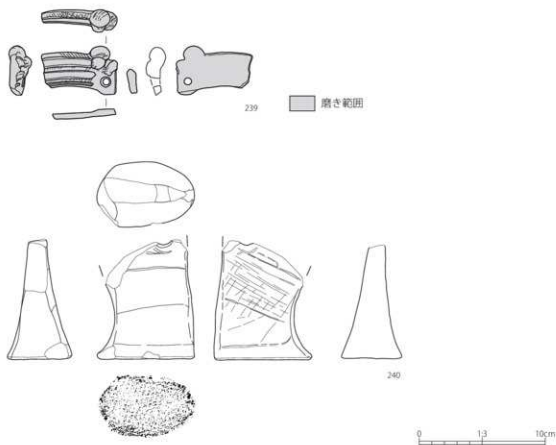
240は土偶の脚部である。後期前半のハート型土偶の脚部であると考えられ、原形は類例からつま先が内側を向くものと考えられる。折損部に折れ面と



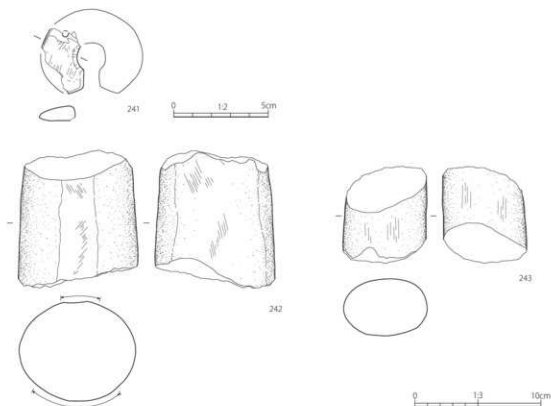
第51図 2地区(3次調査) 包含層出土遺物実測図(5)



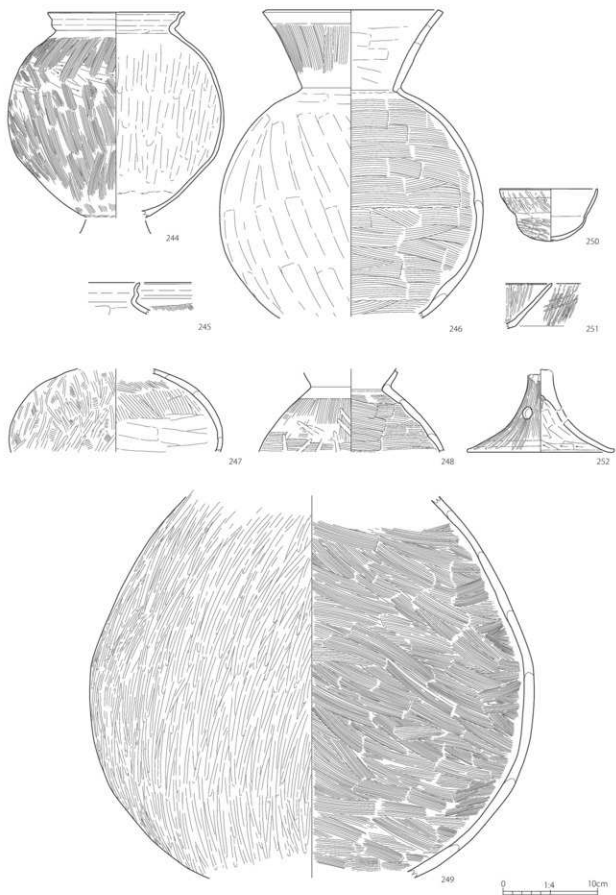
第52図 第2地区(3次調査) 包含層出土遺物実測図(6)



第53図 第2地区(3次調査) 包含層出土遺物実測図(7)



第54図 第2地区(3次調査) 包含層出土遺物実測図(8)



第55図 第2地区(3次調査) 包含層出土遺物実測図(9)

は異なる弧状の面があり、破損前には円孔が開けられていたものと思われる。正面には調整痕が確認できる。裏面には斜状に沈線とR無節縄文らしき模様、足先には横位単沈線が施されている。底面では網代痕が確認できる。脚部のみであるため全体像については不明であるが、残存値で約9～10cmと比較的大型であるため、原形も比例して大型であったと思われる。

(4) 包含層出土土製品 (241～243)

241は塊状耳飾であり、石材は滑石である。破損した一部のみであるが下端の切れ込み部分と中央の円孔の一部が確認できる。断面形状ではやや扁平なもので、内側が厚く外側へ行くにしたがって薄い形状となる。

242・243は石棒であり、石材は安山岩、砂岩である。242は両端が欠損しており原形は不明であるが、断面形状から見るに大型であったことが推察できる。全周にわたり磨かれているが、2箇所で面的に集中的な磨きの痕跡が見られ、特に正面の比較的狭い範囲で細長く残された痕跡は顕著である。断面では磨面だけが平らになっている様子がわかる。243は両端が欠損しており原形が不明である。断面形状は242などと比べ楕円形となっており形状が異なる。

(5) 包含層出土土師器 (244～252)

244は台付甕であり大塚Ⅲ～Ⅳ式にかけてのものともみられる。底部は残っていないが台との接触部らしき形状を有する。口縁部はS字であり頸部に接着されたと思しき痕跡を残す。外面は頸部から胴部の肩にかけて縦のハケ目が配されており、ナデによる成形後のものとみられる。245は甕であり大塚Ⅲ～Ⅳ式頃とみられる。口縁部はS字の形状を示し内面はやや屈曲する。肩外面には無節縄文と思われる意匠を有する。

246・247・248は土師器の壺であり、大塚式後半頃にあたとみられる。246は口縁部が直立する直口壺に該当する。色調は他のものに比べて白みがかった。外面は下から上へのミガキがされ、頸部に横方向のナデが見られる。口縁部には縦方向



第56図 第2地区(3次調査) 包含層出土遺物実測図(10)

のハケ目が配され口唇部付近で横方向にナデが施される。内面は胴部には全面的に横方向のハケ目が配され、口縁部にはハケ目後にナデによる成形が見られる。247は口縁部・頸部・底部が無く胴部の肩を残す。外面は横方向のハケ目の後に縦方向のミガキを施したことが伺える。内面は上部にハケ目を残し、下部はハケ目の後のナデが見られる。248は胴部と頸部を残す。くの字に屈曲した頸部を示し、肩は比較的膨らまずに落ちる形状である。外面はハケ目の上からミガキがされ頸部には横ナデが見られる。内面は横方向のハケ目が目立つ。249は胴部のみを残す。外面は縦方向のミガキが施されている。内面は横方向のハケ目が確認できる。

250は小型丸底土器(埴)であり、大塚後半頃のものともみられる。口縁部から底部にかけての一部が残る。底部は丸型を呈し、続く胴部を含め半球状であり肩部に若干の張りが見られる。頸部は接合状況が不明であるが外面で帯状のミガキが観察でき、内面はナデを伴う強い屈曲の形状を有する。口縁部は頸部から外へ直線的に立ち上がり口唇部は丸みを帯びる。外面は全体的に斜方向のミガキが施され、内面はナデによる整形痕が見られる。

251は高坏であり大塚後半頃のものともみられる。坏の底部から口縁部を残すが脚部は欠損している。外面、内面には縦ミガキが施されている。252は高坏脚部であり251とは別個体である。上半には円孔が開いている。外面は底部末端が横ナデされており、立ち上がりは縦ミガキが施されている。内面はナデによる整形されている。

包含層出土灰軸陶器 (253)

253は灰軸陶器碗である。底部には高台を有し、器体は平たい形状とみられる。外側は素面だが、内面にはみ釉薬がかかる。

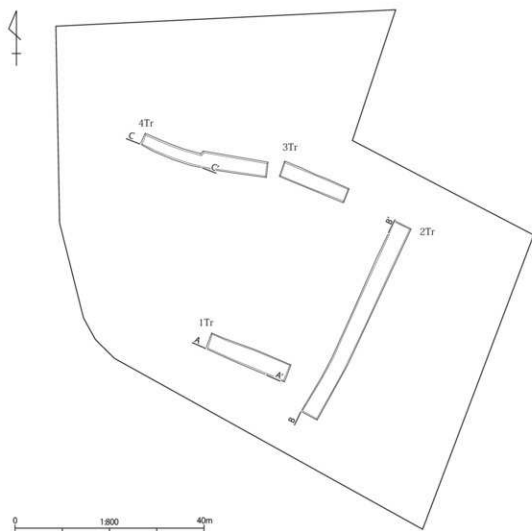
第3節 第3地区の調査成果

遺構について

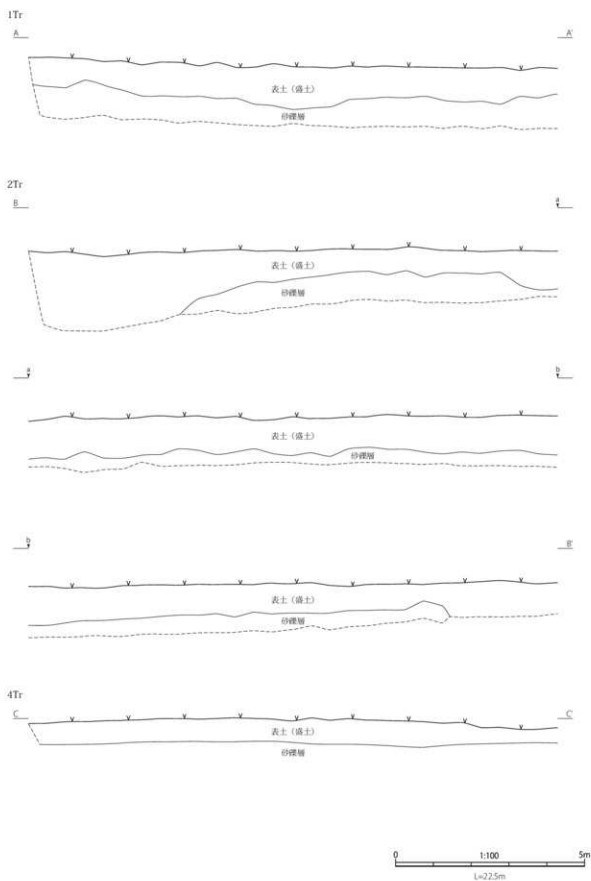
対象地の南に東西方向のトレンチを1本（1Tr）、東に南北方向のトレンチを1本（2Tr）、北に東西方向のトレンチを2本（3・4Tr）掘削したが、いずれのトレンチでも表土直下には対象地の南を流れる松原川由来の砂礫層が確認され、遺構は検出されなかった。

遺物について

コンテナ4分の1箱分の縄文土器・土師器・須恵器・陶磁器が出土したが、いずれも対象地を畑地として利用するために盛られた表土中からの出土であり、図化には至らなかった。



第57図 第3地区（4次調査）トレンチ配置図

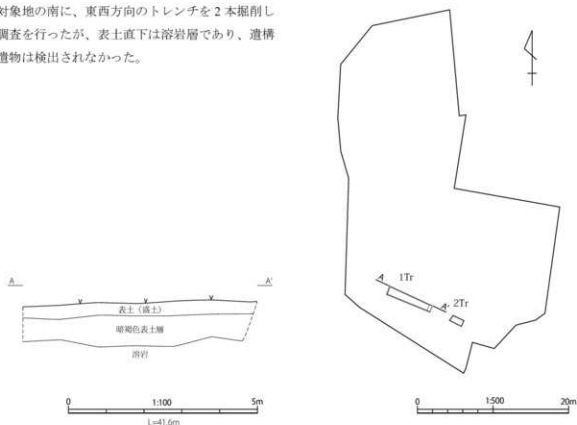


第58図 第3地区(4次調査)トレンチセクション図

第4節 第5地区の調査成果

遺構・遺物について

対象地の南に、東西方向のトレンチを2本掘削して調査を行ったが、表土直下は溶岩層であり、遺構や遺物は検出されなかった。



第59図 第5地区 トレンチ配置図、セクション図

第5節 その他の表採遺物

第1～3・5地区の遺物整理事業中、中島遺跡包蔵地範囲内で表採された、コンテナ1箱分の縄文土器および石器が確認された。その中から12点の石器を図化し、ここに報告する。

(1) 石器 (254～265)

254は打製石斧Cに該当し、石材は緑色片岩である。形状は中央で楕円形分銅形である。正面に主要剥離面が大きく残り両側縁と刃部から大きく剥離が施されている。楕円部では正面右側縁に敲打痕があり正面左側縁には階段状剥離が深くまで入り込んで

いることから両極技法による成形が考えられる。裏面は広い範囲で原礫面が確認でき、縁辺の加工に伴う剥離痕が確認できる。厚さは比較的薄手である。

255～259はいずれも石錘Aに該当し、石材は安山岩、砂岩、緑色岩である。素材重量的に255・256と257～259で分けることが可能であるとみられ、前者は長軸と短軸の長さの差が少なく重量は50g以上、後者は長軸が短軸と比べ長く重量は50g未満である。詳細は不明であるが使用方法と素材獲得に相関性があるかもしれない。

260～264は磨石類に該当する。

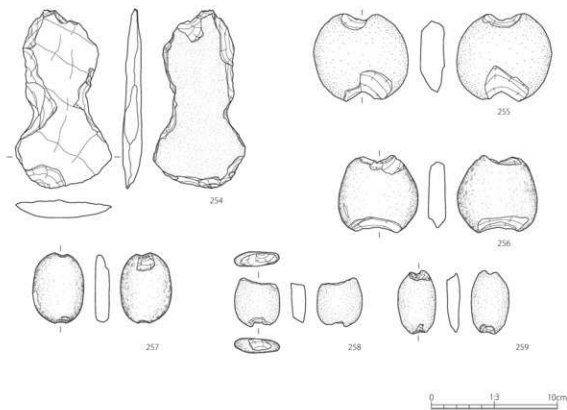
260・261は磨石Aに該当し、石材は安山岩、溶岩である。260は正裏面で磨面と敲打痕を有し、いずれの面も集中的な敲打の後に磨きが行われたとみられ、前後関係を示すものと思われる。261は正裏面に磨面、敲打痕、穿孔痕を有する。非常に使用痕が残る石器であり、どちらも広い範囲で敲打痕が見られ、正面は敲打一磨きの順番に利用の前後関係があるように見えるが、裏面はその逆のように見られる。周縁部についても使用痕は顕著であり、両側面と下部側面に集中した敲打痕が確認できる。

262は磨石Bに該当し、石材は砂岩である。正裏面で磨面が顕著であり、それ以外の使用痕は確認できない。

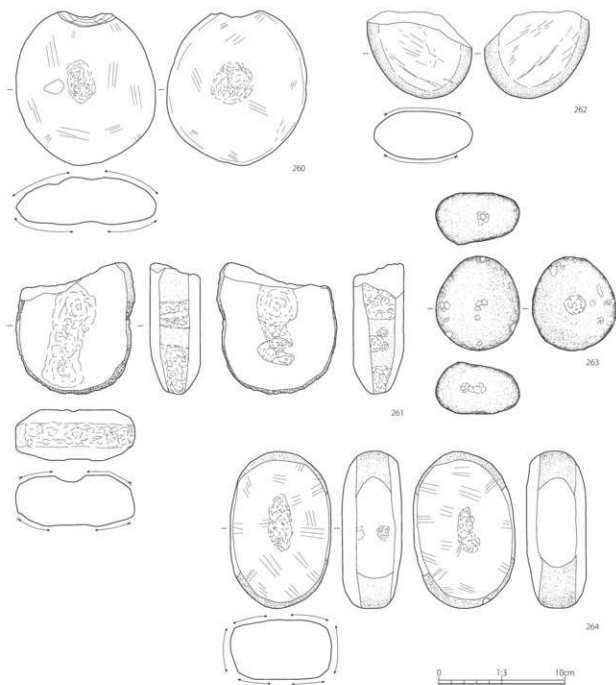
263は磨石Cに該当し、石材は砂岩である。正裏面で敲打痕が見られ、裏面は中心に集中的な敲打痕が確認できる。上部側面、下部側面にも集中的な敲打痕が確認できる。

264は磨石Dに該当し、石材は安山岩である。正裏面と両側面に磨面を有し、正裏面は特に多方向からの磨痕が顕著である。また正裏面の中心にて敲打痕が集中し、正面右側面においても敲打痕が見られる。

265は砥石であり、石材は凝灰岩である。形状は方形で一面だけが湾曲している。2面において磨面が形成されており、特に湾曲する面において顕著であり長い同一方向への線条痕の発達もみられることから、おそらく古代の砥石と思われる。



第60図 その他の表採遺物実測図(1)



第61図 その他の表採遺物実測図(2)



第62図 その他の表採遺物実測図(3)

第4章 富士山南麓地域出土の石錘に関する一考察

古瀬 岳洋

はじめに

中島遺跡は富士山南麓の松原川沿いに位置する、縄文時代中期末から後期頃の遺跡である。出土遺物については縄文時代のもものが中心であり、石器については石錘が最も大きな割合を占めている。このような石錘が多く出土する遺跡は周辺にも点在しており、各々に報告がされている。しかし富士地域の石錘について包括的な比較検討を行った事例は未だなく、実態についてはよくわかっていない。以上の現状を踏まえ、本論では石錘を重量的、空間的、時間的に比較し、富士山南麓地域における石錘の様相について考察してみたい。

1. 石錘について

石錘は扁平な円礫などを打ち欠く、もしくは擦り切ることによって溝を設けた石器のことである。用途としては概ね錘であると解され、編物錘または漁撈錘の2通りの用途によって説明される。しかし用途については不明確な部分があり、特に打欠石錘については諸説ある(渡辺 1984、松岡他 1977)。

石錘は渡辺(1981、1984)が巨視的な先行研究を行っている。同氏は全国で出土した縄文時代の石錘をまとめ、自ら設定した分類定義に基づいて形態分類を行った。また民具の編物錘・漁網錘との比較を行い、その結果として石錘は2種に分類できるとし、打欠石錘を編物錘、切目石錘を漁網錘とした。この研究以前、石錘は主に漁業に関わる錘という解釈が一般的でありはしたものの、具体的利用についての言説は乏しかった(渡辺 1969)。渡辺の研究は特に打欠石錘の用途について編物錘であるという説を強く打ち出すことによって、研究以前の漠然としていた用途論に新たな解釈を加えたものであった。この際、渡辺が打欠石錘を漁網用から外した理由を吉田(2006)が以下のようにまとめている。

- ①打欠石錘は粗い打ち欠きが漁網に適さない。
- ②縄文時代において漁網錘であることが確実な土

器片錘・切目石錘・有溝石錘に比べて、打欠石錘には重いものが多い。

③打欠石錘は水場に近い遺跡だけでなく内陸部の遺跡でも出土する。

④打欠石錘が住居址内でまとまって出土することがあり、後の時代にみられるコモ石などの出土位置と類似する。

この説は現在でも支持されており、石錘の用途について言及はせずとも2種の加工に分類して報告し、半ば慣例的に渡辺の説を援用していることも多いようである。この説の反証として、打欠石錘を漁網錘として検討する研究はいくつかある(松岡他 1977、田井中 2007、岡本 2021)。しかしどちらの研究においても、石錘の形態と用途が仮説の通り一致するかどうかの検討は難しく、現在においても解消には至っていない。

山本(2011)は打欠石錘の用途について、重量面から検討を行っている。石川県内の縄文遺跡から出土した石錘を対象に、県内の弥生時代～中世遺跡から出土した管状土錘の重量、漁網錘の民具資料の重量、渡辺(1981)にて報告されている民具の編物錘の重量と比較を行っている。また縄文石錘は水環境に近接する遺跡から出土していることから、海岸、湿地、河川の3エリアに振り分け、立地と出土石錘の様相について観察を行っている。その結果、民具の漁網錘、管状土錘の資料は共通して約3～90gに集中し、110gを超える資料が極めて少なくなる傾向が見られ、打欠石錘の重量分布にも同様の傾向があることが確認された。このことから打欠石錘の3～110gの分布に収まるものは漁網錘として利用された可能性があると指摘している。110gを超えるものに関しては、消去法的に編物錘の可能性があると述べている。また軽い打欠石錘は渡辺(1981)が示す民具編物錘の第1群(20～80g)、第2群(80～180g)にも該当することから、編物錘としても利用可能であるとしている。エリア別の石錘の観察

では、重量分布が海岸≧潟湖≧河川のような重い傾向にあるとみられ、この重量差は利用法に由来するものとみられるがそれ以上の言及はされていない。以上から、山本は打欠石鍾の用途が漁網鍾・福物鍾の何れかに分類できるものではなく、両方もしくはそれ以外の用途もあるのではないかと述べている。結論的に打欠石鍾の用途が多岐にわたることになるが、打欠石鍾についてより幅広い検討の余地を示すこととなった。

両者の研究は民具と石鍾重量の比較に主眼を置いたものである。近年では先行研究当時よりも資料数が増加したことを鑑みて、出土のコンテキストに即した議論が石鍾を検討するにあたり重要であると考えられている(近藤 2007)。

本論では上記の先行研究を参考に分類し、同時代の遺跡から出土した石鍾を対象とする。なお水場にて利用される石鍾に関し、用途は網以外にウケ漁や釣りなども想定されることから、ここでは漁網鍾ではなく包括的な意味合いを含め漁撈鍾と呼称する。

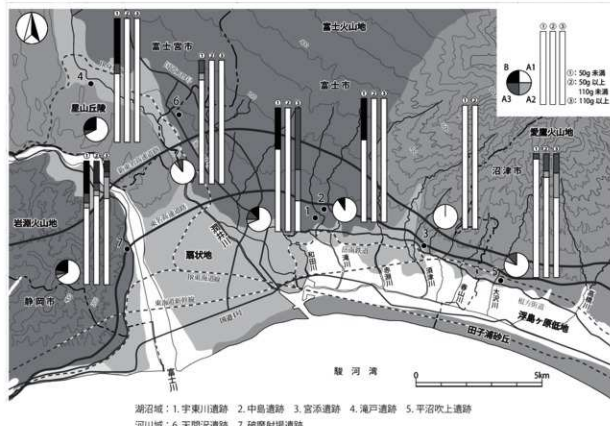
2. 遺跡間での比較

(1) 比較対象の遺跡

富士山南麓における石鍾の様相を検討するための遺跡は以下の条件にあてはまるものを抽出した。

- ①縄文時代中期から後期に該当する遺跡
- ②石鍾が一定数(10点以上)出土している遺跡
- ③富士山南麓地域に立地または近い立地の遺跡

この条件を満たす遺跡として、天間沢遺跡・宮添遺跡・破魔射場遺跡・宇東川遺跡(富士市)、滝戸遺跡(富士宮市)が挙げられる。平沼吹上遺跡(沼津市)については、縄文時代前期の遺跡であるものの、石鍾の出土数が突出して多く、時期別の比較を行う資料として今回加えている(第63図)。これらの遺跡は水環境に近かったと考えられるが、立地条件の詳細は異なり、湖沼域または河川域の2つに分けられる。本論では比較もかねて、湖沼域の遺跡として中島遺跡・宮添遺跡・宇東川遺跡・平沼吹上遺跡・滝戸遺跡、河川域の遺跡として天間沢遺跡・破魔射場遺跡を扱う。



第63図 富士山南麓における石鍾出土遺跡

(2) 石鐘の分類と分析方法

石鐘の形態分類は加工の違いによって打欠石鐘(A)、切目石鐘(B)の2種類に分類し、加工位置による細分化を行った。詳細な定義としては以下のようになる。

A1: 扁平な円礫の長軸上両端、または片側のみに抉り状の加工を施した石器

A2: 扁平な円礫の短軸上両端、または片側のみに抉り状の加工を施した石器

A3: 扁平な円礫の長軸・短軸両方に抉り状の加工を施した石器

B1: 扁平な円礫の長軸上両端、または片側のみに切目状の加工を施した石器

B2: 扁平な円礫の短軸上両端、または片側のみに切目状の加工を施した石器

B3: 扁平な円礫の長軸・短軸両方に切目状の加工を施した石器

AB1: 扁平な円礫の長軸上に対向する、抉り状および切目状の加工を施した石器

AB2: 扁平な円礫の短軸上に対向する、抉り状および切目状の加工を施した石器

AB3: 扁平な円礫の長軸・短軸両方に対向する抉り状および切目状の加工を施した石器

なお B2・AB3 は確認できた点数が皆無であったため、表などにおいて項目から除外している。

分析は石鐘重量に注目し、出土石鐘の形態分類と重量データの収集を行った。その後、立地または時期ごとに遺跡を分け、出土石鐘を合算させた数値をもとに比較を行った(第2表)。

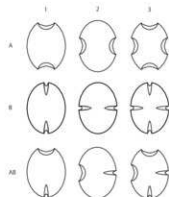
3. 各遺跡の石鐘重量

・湖沼域

(1) 滝戸遺跡(馬飼野他 1997)

白尾・明星山北西丘陵、標高約 130m の舌状台地上に位置し、台地から 15m 下がった東側の沖積地に潤井川や湧水の氾濫によって形成された湖沼(古大宮湖)があったとみられる。他の湖沼域の遺跡は潟湖に立地するのに対し、滝戸遺跡は淡水の湖沼に立地する。遺跡北側には潤井川が流れ、河川を下ると天間沢遺跡に近接する。

石鐘は 94 点が確認されている。内訳は A1 が 55



第 64 図 石鐘型式図

点、A3 が 5 点、B1 が 21 点である。A 類は全体的に軽く 50g 以下の割合は約 71% となる。B1 は平均値約 22 g で全体が 10 以上 30 g 未満に収まる。報告書の記述では、縄文時代中期の遺物集中または後期の遺物が集中する発掘区画から出土している石鐘の増減を比較しており、中期の区画より後期の区画の方で B 類の増加が確認されている。

(2) 宇東川遺跡(若林他 2012)

松原川右岸の河岸段丘上にあり、南側には浮島ヶ原低地がある。この低地は、富士山または愛鷹山から流れる河川や湧水が田子の浦砂丘によってせき止められて低地部に溜まり、現田子浦港周辺で海と接続することにより形成された汽水域の湖沼である。時代は縄文時代中期から後期(曾利Ⅳ～V式から堀之内式)まで継続的な活動痕跡が見られる。松原川の対岸には中島遺跡が存在する。

石鐘は A1 が 11 点、A2 が 1 点、A3 が 2 点、B1 が 2 点確認されている。全体の 75% が 20 以上 100g 未満に収まり、全体の約 43% が 50 g 未満である。B1 は 50g 未満に収まる。150g 以上は A 類に散見され、A2 が最も重い重量を有する。

(3) 中島遺跡

立地環境は松原川を挟んで隣接する宇東川遺跡と共通し、南側に浮島ヶ原低地が広がる。縄文時代後期頃が主な活動時期であり、宇東川遺跡とは一時的に併存していたとみられる。

石鐘は A1 が 29 点、B1 が 3 点確認されている。A 類は全体的に重く平均値は約 110g である。大まかに A 類の内訳を見ると 50g 以下と 70g 以上の 2 グループに分かれ、50 g 以下のグループは B1 と重量的に近似する。

第2表 石鐘の重量分布図

遺跡	種類	5.5g	30g	20g	30g	40g	50g	60g	70g	80g	90g	100g	110g	120g	130g	140g	150g	200g	250g	300g	計	
滝戸	A1		3	21	8	6	4	1	4	1	1	1	3				2	1			50	
			(1)	(2)		(1)	(4)			(1)											(8)	
	A2																					
	A3				3	2																5
	B1		8	16																		24
平沼川	A1		1	3			1	1	1	1	2								1		11	
	A2																			1	1	
	A3																	2			2	
	B1		1		1																	2
中島	A1		1		4	1			2	1	2	3	4	3	1	1	2	3		1	28	
			(1)																		(1)	
	A2																					
	B1			1	1	1																3
宮瀧	A1								2	2	2	1	2								9	
	A2																		(1)		(1)	
	A3																					
	B1																					
計(瀬沼)		9	22	20	13	7	1	6	6	7	5	6	6	1	1	6	5	1	1	1	114	
		(1)	(2)	(1)	(1)	(4)		(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)			(1)	(1)				(1)	
平沼吹上	A1		7		20	19	19	27	19	22	24	16	12	7	4	2	3	1			202	
			(2)																		(3)	
	A2							1	1	1	2	3	2		1	3	2	1			17	
	A3			(2)	1	1	3	1	4	3	7	4	3		2	1	1					31
	B1						(1)															(2)
計(縄文前期)		7	21	20	40	20	24	26	33	23	17	7	7	3	7	3	1	1	1	1	276	
		(1)	(2)	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	
天間	A1		6		6	4		3		1	2										21	
	A2			1																		1
	A3				1	1																2
	B1																					
破産村集	A1		(1)	8	18	27	18	8	14	11	4	7	4	1	5	1	2	4	2	1	137	
			(4)	(8)	(9)	(8)	(2)	(3)	(2)	(1)				(1)							(2)	
	A2				2	3	1	1									2		1	1	12	
				(1)																	(1)	
	A3			1	3	3	2	1	1	1	1				1							14
				(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)												(2)
	B1		(1)	4	6	17	4	2	2	7	1				1		1					46
			(8)	(3)	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)							(1)					(13)
B3					(1)																(1)	
AB1			1	1	(1)				1												3	
AB2					1																(1)	
計(河川)		17	26	41	33	32	26	20	8	9	5	2	9	3	4	5	3	1	1	1	258	
		(2)	(8)	(12)	(8)	(8)	(3)	(4)	(2)	(1)			(1)								(1)	

* () は破損品を示す

(4) 宮添遺跡(佐藤 2010、2011、2012)

愛鷹山南西麓の標高 30 m 丘陵上に位置し、南側には浮島ヶ原低地が広がっていたと想定される。

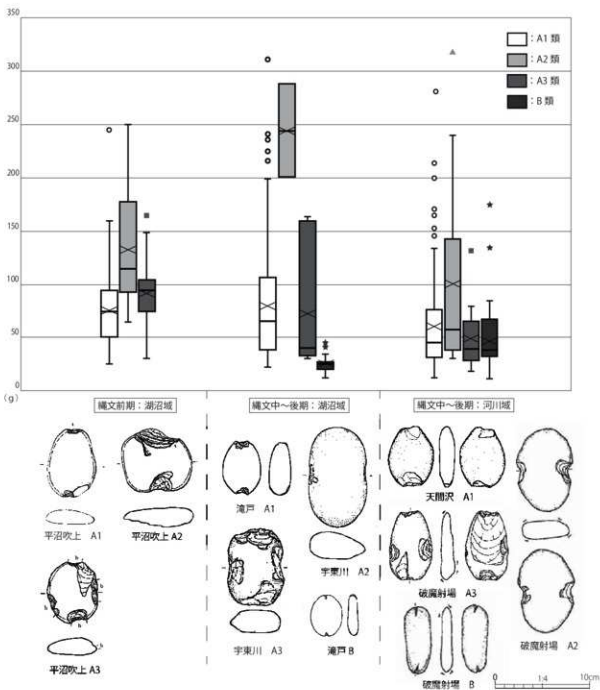
A 類のみが報告されており、A1 が 9 点となる。A1 は 70g 以上 120g 以下にほとんどの石鐘が収まり、平均重量は約 95 g と高めである。A2 は破損 1 点のみであるが非常に重い重量を有する。

(5) 平沼吹上遺跡(石川他 1985)

愛鷹山南麓の台地上、海拔 35 m ~ 39 m に位置し、南側に浮島ヶ原低地が広がっていたとみられる。今

回の検討では唯一の縄文時代前期に該当する遺跡であり、木島式土器が出土する。

石鐘は非常に多く全体で 256 点確認されている。内訳は A1 が 202 点、A2 が 17 点、A3 が 31 点であり、A1 が際立って多い。B 類は確認されていない。全体の約 80% が 110 g 未満、平均重量が約 80g である。このことから全体的には 110 g より軽い傾向があるとみなせる。しかし形態別に見てみると A2 は A1、A3 に比べて重い傾向がみられ、平均値は約 130g を超えている。



第 65 図 エリア別・時期別の重量分布図と実測図

・河川域

(6) 天間沢遺跡 (天間沢遺跡発掘調査報告書編集委員会 1984)

富士市と富士宮市の境界近くの富士山南西麓末端台地上にあり、西側そばに潤井川が流れる。縄文時代中期から後期頃には北西側に湖沼 (古大宮湖) があったとみられる。しかし距離的に遠いことを考慮して河川近接の遺跡とした。

石鐘は合計 26 点確認されており、A1 が 23 点、A2 が 1 点、A3 が 2 点である。全体的には 100g 以内に収まり、特に約 30g あたりを中心に偏る。

(7) 破魔射場遺跡 (佐野他 2001)

富士川西岸、現在の東名高速道路富士川 SA に位置する。縄文時代前期から晩期までの遺構・遺物が検出されている。石鐘に関しては中期から後期の発掘区画にて集中して出土している。

石鐘は269点確認されている。内訳はA1が137点、A2が12点、A3が14点、B1が43点、AB1が3点、AB2が1点となる。重量分布はA類においてA1・A3が100g以内に集中し平均値も近似するのに対し、A2は広範囲な分布と100g以上の平均値を示している。B類はA1・A3と近似した分布を示し、軽量な傾向にある。今回の検討ではこの遺跡だけにAB類とB3が確認されているが、少数であるため統計での計上は控えている。

4. 立地・時期別の重量観察

第65図は立地、時期別に石鐘重量をまとめた図と、各エリアの平均重量に近い石鐘の実測図である。これらから湖沼域の図を見てみると、A類とB類にて多少ながら特徴的な分布をしていることがわかった。A類において数的、分布幅的に充実しているのはA1であり、第1四分位から第3四分位の範囲は110g以下に収まる。A2は2点で200gを超える重量を示す。A3は50g以下の集中と100gを超える重量に開きがあるため少々広い分布を示すが、数的に軽量なものが多い。対してB1は全体的に軽く、全点が50gに収まる傾向を示し、素材の選択しているようにみられる。

河川域の分布状況は、A1・A3・B1は中央値、平均値、第2・3四分位の幅でお互いに近似する傾向をみせる。その中でもA1は少々広い分布をみせており、重量が多様とみえる。A2は突出して重いが、第1・第2四分位はA1など他のものとほぼ同じである。A3とB1はほぼ同じような分布を示す。

これらを踏まえ両地域を見ると、A類に関してA1は湖沼域のものが河川域のものより重い傾向にあり、分布幅も広いように見られる。A2は河川域のものが数的に多く、重量はどちらにおいても重い傾向を示す。A3は湖沼域のものが少数であるため比較困難な部分もあるが、中央値はA1・A2とほぼ同値であり下限も近似しているため、似たような石鐘が多いようにみえる。まとめると、両地域のA類に関しては明確な差異はないように見受けられる。しいて挙げるならば、湖沼域のA1分布幅が河川域のものより広く、多様な重量の石鐘が利用されていたことを示す点である。対してB1はA類と異

なる様相を見せる。湖沼域のものが50g未満に全て集中するが、河川域のものは50g以上100g未満に収まる傾向を見せており、A類とは逆の傾向が見られる。

次に時期別の比較のため平沼吹上遺跡を見てみると、まず縄文時代前期にB類が存在しないことがわかる。これは富士山南麓地域で縄文前期頃においてB類が無いか極少数であったことを示すものである。A類ではA1・A2にて数量と分布状況に時期を通して共通する傾向が見られ、重量面においてもA類は時期による差違などはみられない。

5. 富士山南麓地域における石鐘の考察

B1は漁撈鍾としての要件を満たしているといえ、両立地とも漁撈鍾として利用された可能性を指摘できる。河川域の資料は湖沼域の資料に対して開きのある分布幅を示すが、両環境の違いによる獲得石材の違い、または利用時における有用な重量の違いが影響していると考えられる。A2は両環境において重い重量を示していることから編物鍾としての利用が考えられる。この二種の重量と加工には用途を意識した相関性があるように思われる。問題はA1・A3であり、結論として漁撈鍾・編物鍾どちらともいえる。漁撈鍾の根拠としては、出土遺跡が水場に近しいこと、重量面で110gを下回るものの数量が多く、漁撈鍾の要件を満たすものであることが挙げられる。今回のA1・A3はこれらの条件に合致するものが多数確認できる。しかし110gを超える石鐘があること、軽量な編物鍾の民具事例から編物鍾としての用途を排除出来ない。これらは結果として山本の主張する説に近似するものと思われる。以上により、A1・A3は用途を排他的に分離することは難しく、数量や重量、水環境に近接した遺跡からの出土などを考慮すると、A類は編物鍾のみの利用にはとどまらずに漁撈鍾としても活用可能であるように思える。

一つ気になる点として、石鐘の破損品にも注目したい。第2表の平沼吹上遺跡の資料を抜きに破損した石鐘を見ると全点が67点が確認でき、その中で10～110g以内に収まる石鐘は64点であった。立地別に見ると湖沼域では15点で、河川域では49点

であり、全体比率で見ると湖沼域では約10%、河川域で約17%が破損品であることがわかった。これら破損品は10～30gに集中しており、原型を考慮しても非常に軽量なものが多く、重量の面において漁撈錘としての要件を満たしている可能性が高い。以上から破損品に関して推測の域を出ないが、漁撈錘に関係する可能性がある。石錘を破損するということは漁撈活動のような消耗の激しい利用によって起こると考えられ、また河川域に集中している点も、漁撈で用いると考えるなら強い水流を伴う環境が破損に関係しているように思われる。破損品の石錘は漁撈錘としての利用を想定できるかもしれない。

時期別の比較は前節にて縄文時代中期～後期の遺跡において、B類が出現してくることを指摘した。加えて縄文時代後期へ移行するに従ってB類は増加する傾向にあることが滝戸遺跡にて示されており、富士地域周辺では石錘の組成が時期を経るごとに変化している可能性がある。時期変遷による石器組成の変化事例は他石器にも見られ、平沼吹上遺跡と周辺遺跡、富士宮市の若宮遺跡と滝戸遺跡等の周辺遺跡などでは、前期頃から石鏃等の石器群の減少と石皿・磨石等の石器群の増加が確認されており、これらは狩猟的石器から植物加工的石器への生業変化の一端を示すものであると解されている。石錘の内容容変化もこうした生業の変化もしくは自然環境の変化に連動するものであるかもしれないが、利用の

具体的な部分が不明瞭であるため影響について明言はできない。以上から富士周辺地域の縄文遺跡は縄文時代前期頃から狩猟具が減り採取具が増える現象と並行して石錘もB類の出現と増加という変化を経ていったのではないかと推察する。また前期から後期を通してA1の数量、重量分布が類似している点も重要であるとみられる。これは石錘の利用について時期を経ても共通性があったということであり、時期差による石錘の利用法の変化は乏しいものであったと考えられる。

おわりに

今回石錘の検討を行ったところ、富士山南麓地域の石錘は水域に近い立地の遺跡から出土していること、打欠石錘が多く重量分布的に110gより軽いものが多数であり用途の分離は困難であるが漁撈用錘として活用が考えられること、前期頃には打欠石錘が支配的であり縄文中期から後期にかけて切目石錘が出現し石器組成が変化することを確認した。

以上から、富士山南麓地域の石錘は編み物用としての活用も考えつつ、水環境での活用も同時に想定しやすいものとみられる。しかし重量のみから用途を考察するのは困難であり、用途も2つに限定出来るものではないように思われる。今後は古代の錘資料と民具資料の検討や、破損品を含めた石錘のコンテキストなどを踏まえながら詳細に迫るのも有効かと思う。

参考文献

- 石川治夫・高尾好之ほか 1985『平沼吹上遺跡発掘調査報告書』沼津市文化財調査報告書第36集 沼津市教育委員会
- 上野修一 1988「那珂川流域の漁網鏝」『季刊考古学25』雄山閣 pp36-40
- 植松章八 1993「富士宮市の遺跡と文化」『富士宮市の遺跡』pp115-142
- 岡本 洋 2021「平沼村今津で使われていた漁網の石製沈子(略報)―縄文時代の石鏝と類似した民俗資料―」『青森県立郷土館研究紀要』45: pp53-56
- 近藤康久 2007「武蔵野・多摩・鶴見地域における縄文時代鏝具の分布評価: GISで考古遺物の性格を読み解く」『東京大学考古学研究室研究紀要』21: pp1-82
- 佐藤祐樹 2010『宮道遺跡Ⅲ』富士市埋蔵文化財発掘調査報告書 富士市教育委員会
- 佐藤祐樹(編)・佐野五十三・小島利史 2011『宮道遺跡Ⅳ』富士市埋蔵文化財発掘調査報告書
- 佐藤祐樹(編)・小島利史 2012『宮道遺跡Ⅴ』富士市埋蔵文化財発掘調査報告書 第52集
- 佐野五十三・諸星雅一・石川武男ほか 2001『富士川S A間遺跡』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第123集
- 鈴木道之助 1981『図録石器の基礎知識3 縄文』柏書房
- 天間沢遺跡発掘調査報告書編集委員会 1984『天間沢遺跡Ⅰ』富士市教育委員会
- 天間沢遺跡発掘調査報告書編集委員会 1985『天間沢遺跡Ⅱ』富士市教育委員会
- 田井中洋介 2007「石鏝による網漁」『縄文時代の考古学5 なりわい―食糧生産の技術―』同成社 pp155-161
- 野口行雄 1985「房総半島における縄文時代生産活動の様相」『千葉県文化財センター研究紀要』9: pp205-236
- 藤木 聡 2008「打穴石鏝の用途と切目石鏝の来歴」『九州における縄文時代の漁撈具』: pp17-22
- 藤村 翔 2017「浮島沼西岸・沖田遺跡の調査からみた湖沼利用の推移」『富士山かぐや姫ミュージアム館報』32: pp41-54
- 馬飼野行雄・渡井一信・伊藤晶光 1983『若宮遺跡』富士宮市文化財調査報告書第6集 日本道路公団名古屋建設局・静岡県教育委員会・富士宮市教育委員会
- 馬飼野行雄・渡井英吾ほか 1997『滝戸遺跡』富士宮市文化財調査報告書第23集 富士宮市教育委員会
- 松岡達郎・中田清彦・横山英介 1977「磯石鏝考―磯石鏝から網漁具を再現する一つの試み―」『考古学研究』24(1): pp73-82
- 山本直人 1988「北陸地方の漁網鏝」『季刊考古学25』雄山閣 pp50-54
- 山本直人 2011「縄文時代の打穴石鏝の用途に関する一考察」『名古屋大学文学部研究論集。史学』57: pp19-46
- 吉田泰幸 2006「秋田県角間崎貝塚出土の磯石鏝―角田コレクション紹介6―」『名古屋大学博物館報告』22: pp1-10
- 若林美希(編)・佐藤祐樹・藤村 翔ほか 2012『宇東川遺跡A地区』富士市埋蔵文化財調査報告 第50集 富士市教育委員会
- 渡井英吾・深澤麻衣・原 悠翔ほか 2021『富士宮市の遺跡7』富士宮市調査報告書第55集 富士宮市教育委員会
- 渡辺 仁 1969「所謂石鏝について。先史学に於ける用途の問題。」『考古学雑誌』55-2: pp34-42
- 渡辺 誠 1981「編み物用鏝具としての自然石の研究」『名古屋大学文学部研究論集。史学』27: pp1-46
- 渡辺 誠 1984『縄文時代の漁業』雄山閣
- 渡辺 誠 2002「考古学のための民具2・漁具」『名古屋大学博物館報告』18: pp75-90

第5章 総括

縄文時代

中島遺跡は第1～3・5地区の調査において、主に包含層から多数の遺物が出土した。

調査結果として第1・2地区にて遺構の検出がされており、縄文時代に該当する遺構として堅穴建物2基、土坑10基、焼土4ヶ所を記録している。そのうち遺物との対応関係が見られる遺構として、第1地区2次調査にて検出されたSB01、SK01、SK08の3ヶ所が認められる。

遺物に関して土器・土製品に関しては156点、石器・石製品に関しては93点を本報告にて図化している。これらは一部を除きほとんどが一括で採り上げた資料であり、遺構との相関関係や時期について明確に述べることは困難であるが、遺跡内に住居址が確認されていることからいずれも一定期間の居住に関わる資料であると考えられる。

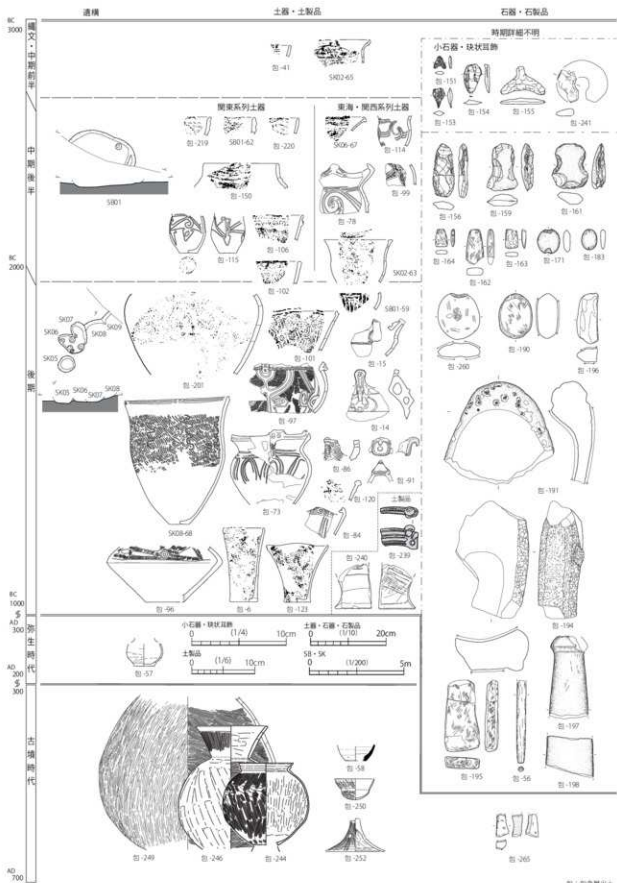
出土土器の内訳は、最も古いものとして五領ヶ台式の土器が出土しており、縄文時代中期初頭に設定している。数量的には称名寺式から堀之内式の型式が多く、中島遺跡における主な活動時期は縄文時代中期末～後期前半頃になるかと思われる。これは近隣遺跡である宇東川遺跡の縄文時代資料とも類似する。出土遺物の中には他地域からの土器の流入が見られ、東海西部や関西方面から来たと思しき福田K2式、縁帯文土器、松ノ木式土器が確認されており、縄文時代中期末～後期に至る時期の東西交流を示唆するものとみられる。福田K2式に関しては愛知県が東限とされているが、伊豆大島や東京湾沿岸部の遺跡で存在が確認されており、太平洋沿岸部における海路を使った関西方面からの伝播の可能性が示唆されている(橋口2001)。当時の地理環境的に浮島ヶ原低地帯と海岸部は接続しており、水路による遺跡への接近も可能であったとみられることから、上記のような海から遺跡へという形で土器の流入は想定できるものとする。土製品は堀之内式土器の破損した口縁部を再利用した装飾品や土偶の脚部が確認されており、特に後者は祭祀的な性格を帯びたものとみられる。

石器の内訳は、ほとんどが包含層一括出土であるため、遺構との関連性と時期の詳細については不明な部分も多いが、縄文時代の所産であるとみられる。数的に石鏃などの小型の定型的石器は少数で、主に打製石斧や磨石類・石皿などの石器が主体である。これらの様相からいわゆる狩猟具のような石器が少なく、植物加工などの生業を想定できる石器が多いといえる。またサイズがある程度大きい石器や使用痕素石器のほとんどは在地の石材であり、水場で採取できる円礫が多いように見える。遺跡の近くには河川や湖沼があったとみられることから、素材はこれらの環境から採取されたものであると思われる。打製石斧の石材などは富士川流域にみられるものが多く、また礫面が残されているものが多い点から、石材は遺跡内に持ち込まれ加工されていた可能性がある。また土器と同様に磨製石斧や石棒の中には在地の石材でないものが使われており、これらは他地域との交流品であった可能性を指摘できる。

弥生時代以降

第1～3・5地区の包含層からは弥生時代以降の遺物も少数ながら出土している。遺構に関しては弥生時代以降のものを特定するのが困難であるため言及は控える。

内訳としては弥生土器が1点、土師器が9点、須恵器が3点、石器が1点となる。遺物点数が少なく詳細なことは不明であるが、244のようなS字口縁をもつ甕や246のような直口壺が見られ、古墳時代における大廓式後半の土器であると考えられる。これらのことから、弥生時代以降は縄文時代に比べ遺跡の利用頻度が低下しているとみられ、古墳時代の大廓式後半あたり時期に小規模ながらの活動があったものと考えられる。



図：池田健治

第66図 中島遺跡における遺構・遺物の変遷

付 表

出土遺物觀察表

第1地区(1次調査)

・包含層出土 縄文時代の土器

報告番号	探洞番号	図説番号	R番号	地区	出土場所 時代	類別 分類	型式 種類/粗製	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	その他部位 (cm)	内面色調 外面色調	焼成 残存率	備考
1	第6図	PL.2	R466	1地区 1次	包含層 縄文	縄文土器 深鉢	塚之内式 精製土器	-	-	(15.6)		5YR6/6 橙 5YR6/6 橙	良 -	
2	第6図	PL.2	R477	1地区 1次	包含層 縄文	縄文土器 深鉢	塚之内式 精製土器	-	-	(12.8)		7.5YR6/0 橙 7.5YR6/6 橙	良 -	
3	第6図	PL.2	R407	1地区 1次	包含層 縄文	縄文土器 深鉢	塚之内式 精製土器	-	-	(8.3)		7.5YR3/1 黒褐 5YR6/8 橙	良 -	
4	第6図	PL.2	R455	1地区 1次	包含層 縄文	縄文土器 深鉢	塚之内式 精製土器	-	-	(6.9)		5YR5/6 明赤褐 5YR5/3 に近い赤褐	良 -	
5	第6図	PL.2	R472	1地区 1次	包含層 縄文	縄文土器 深鉢	塚之内式 精製土器	[21.3]	-	(14.7)		7.5YR6/6 橙 7.5YR6/6 橙	良 50	
6	第6図	PL.2	R471	1地区 1次	包含層 縄文	縄文土器 深鉢	塚之内式 精製土器	[10.8]	[7.4]	19.5		7.5YR4/4 橙 7.5YR4/4 橙	良 40	
7	第6図	PL.2	R408	1地区 1次	包含層 縄文	縄文土器 深鉢	塚之内式 精製土器	-	-	(7.6)		2.5YR4/6 赤褐 2.5YR5/8 明赤褐	良 -	
8	第6図	PL.2	R431	1地区 1次	包含層 縄文	縄文土器 深鉢	塚之内式 精製土器	-	-	(6.0)		7.5YR5/6 明褐 7.5YR6/6 橙	良 -	
9	第7図	PL.3	R407	1地区 1次	包含層 縄文	縄文土器 深鉢	塚之内式 精製土器	-	-	(6.9)		7.5YR5/6 明褐 7.5YR5/6 明褐	良 -	
10	第7図	PL.3	R411	1地区 1次	包含層 縄文	縄文土器 深鉢	塚之内式 精製土器	-	-	(6.0)		5YR5/6 明赤褐 5YR5/6 明赤褐	良 -	
11	第7図	PL.3	R408	1地区 1次	包含層 縄文	縄文土器 深鉢	赤名寺式 精製土器	-	-	(7.6)		7.5YR5/4 に近い褐 7.5YR5/4 に近い褐	良 -	
12	第7図	PL.3	R411	1地区 1次	包含層 縄文	縄文土器 深鉢	塚之内式 精製土器	-	-	(5.8)		5YR4/6 赤褐 5YR5/4 に近い赤褐	良 -	
13	第7図	PL.3	R411	1地区 1次	包含層 縄文	縄文土器 深鉢	塚之内式 精製土器	-	-	(4.8)		5YR5/6 明赤褐 5YR5/6 明赤褐	良 -	
14	第7図	PL.3	R462	1地区 1次	包含層 縄文	縄文土器 深鉢	塚之内式 精製土器	-	-	(13.7)		7.5YR7/8 黄褐 7.5YR7/8 黄褐	良 -	
15	第7図	PL.3	R438	1地区 1次	包含層 縄文	縄文土器 注口土器	塚之内式 精製土器	-	-	(9.6)		5YR5/6 明赤褐 5YR4/8 赤褐	良 -	
16	第7図	PL.3	R455	1地区 1次	包含層 縄文	縄文土器 蓋	塚之内式 精製土器	8.0	-	1.1		7.5YR6/4 に近い橙 5YR6/6 橙	良 95	
17	第7図	PL.3	R419	1地区 1次	包含層 縄文	縄文土器 -	塚之内式 精製土器	-	-	-	全長 幅 (7.7) 2.3	5YR5/6 明赤褐 7.5YR3/3 明褐	良 -	
18	第7図	PL.3	R461	1地区 1次	包含層 縄文	縄文土器 -	塚之内式 精製土器	-	8.5	(6.7)		2.5YR6/6 橙 5YR6/6 橙	良 95	網代瓦
19	第8図	PL.4	R467	1地区 1次	包含層 縄文	縄文土器 深鉢	塚之内式 粗製土器	-	-	(9.0)		5YR7/6 橙 5YR6/8 橙	良 -	
20	第8図	PL.4	R464	1地区 1次	包含層 縄文	縄文土器 深鉢	塚之内式 粗製土器	-	-	(10.8)		7.5YR6/6 橙 7.5YR6/6 橙	良 -	
21	第8図	PL.4	R468	1地区 1次	包含層 縄文	縄文土器 大型鉢	塚之内式 粗製土器	[33.2]	-	(18.6)		7.5YR7/6 橙 7.5YR7/6 橙	良 35	
22	第8図	PL.4	R470	1地区 1次	包含層 縄文	縄文土器 大型深鉢	塚之内式 粗製土器	-	-	(24.3)		10YR7/6 明赤褐 7.5YR6/6 橙	良 35	
23	第9図	PL.5	R475	1地区 1次	包含層 縄文	縄文土器 深鉢	塚之内式 粗製土器	[33.7]	-	(26.6)		2.5YR6/8 橙 5YR6/8 橙	良 30	
24	第9図	PL.5	R469	1地区 1次	包含層 縄文	縄文土器 深鉢	塚之内式 粗製土器	-	-	(22.2)		5YR6/6 橙 5YR6/6 橙	良 30	
25	第9図	PL.6	R473	1地区 1次	包含層 縄文	縄文土器 深鉢	塚之内式 粗製土器	17.8	-	(12.0)		10YR5/2 灰黄褐 5YR7/6 橙	良 60	
26	第9図	PL.5	R474	1地区 1次	包含層 縄文	縄文土器 深鉢	塚之内式 粗製土器	-	-	(17.8)		5YR4/6 赤褐 5YR5/6 明赤褐	良 35	
27	第10図	PL.6	R457	1地区 1次	包含層 縄文	縄文土器 -	塚之内式 粗製土器	-	[10.4]	(10.45)		10YR6/4 に近い黄褐 5YR7/8 橙	良 55	網代瓦
28	第10図	-	R405	1地区 1次	包含層 縄文	縄文土器 -	塚之内式 粗製土器	-	[10.5]	(5.3)		5YR6/6 橙 5YR6/6 橙	良 30	網代瓦
29	第10図	-	R406	1地区 1次	包含層 縄文	縄文土器 -	塚之内式 粗製土器	-	[9.0]	(3.75)		5YR6/6 橙 7.5YR6/6 橙	良 45	網代瓦
30	第10図	-	R405	1地区 1次	包含層 縄文	縄文土器 -	塚之内式 粗製土器	-	[6.9]	(2.9)		7.5YR7/6 橙 5YR6/6 橙	良 45	網代瓦
31	第10図	-	R405	1地区 1次	包含層 縄文	縄文土器 -	塚之内式 粗製土器	-	[7.1]	(2.6)		5YR6/6 橙 5YR5/4 に近い赤褐	良 80	
32	第10図	PL.6	R456	1地区 1次	包含層 縄文	縄文土器 深鉢	塚之内式 粗製土器	-	8.1	(9.1)		5YR6/6 赤褐 5YR7/6 橙	良 90	
33	第10図	-	R458	1地区 1次	包含層 縄文	縄文土器 -	塚之内式 粗製土器	-	9.4	(5.55)		10YR5/3 に近い黄褐 2.5YR6/6 橙	良 85	網代瓦
34	第10図	-	R405	1地区 1次	包含層 縄文	縄文土器 -	塚之内式 粗製土器	-	[7.6]	(2.75)		5YR6/6 橙 5YR6/6 橙	良 80	
35	第10図	-	R406	1地区 1次	包含層 縄文	縄文土器 -	塚之内式 粗製土器	-	7.6	(3.3)		7.5YR6/6 橙 7.5YR6/4 に近い橙	良 50	網代瓦
36	第10図	-	R405	1地区 1次	包含層 縄文	縄文土器 -	塚之内式 粗製土器	-	7.9	(3.15)		7.5YR6/4 橙 7.5YR6/4 に近い橙	良 95	

報告番号	探検番号	収取番号	R番号	地区	出土場所 時代	種別 分類	型式 複製/根拠	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	その他部位 (cm)	内面色調 外面色調	焼成 残存率	備考
37	第10回	PL.6	R459	1地区	包含層 縄文1次	縄文土器 -	椗之内式 -	-	8.1	(4.7)		5YR7/6 椗 5YR6/6 椗	良 95	網代直
38	第10回	PL.6	R460	1地区	包含層 縄文1次	縄文土器 -	椗之内式 -	-	[9.0]	(6.4)		7.5YR6/4 に近い椗 5YR6/6 椗	良 60	
39	第10回	PL.6	R403 R405	1地区	包含層 縄文1次	縄文土器 -	椗之内式 -	-	[8.6]	(11.1)		10YR6/4 に近い黄椗 7.5YR5/4 に近い椗	良 40	網代直
40	第10回	-	R405	1地区	包含層 縄文1次	縄文土器 -	椗之内式 -	-	8.4	(3.65)		10YR3/1 黒椗 7.5YR4/2 灰椗	良 95	網代直
41	第11回	PL.6	R409	1地区	包含層 縄文1次	縄文土器 深鉢	五領ヶ台式 -	-	-	(4.1)		5YR4/2 に近い赤椗 5YR5/8 赤椗	良 -	

・包含層出土 縄文時代の石器

報告番号	探検番号	収取番号	R番号	地区	出土場所 時代	種別 分類	石材	全長 (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
42	第12回	PL.7	R805	1地区	包含層 縄文1次	石器 石種A	砂岩	7.8	6.2	2.2	167.6	
43	第12回	PL.7	R806	1地区	包含層 縄文1次	石器 石種A	砂岩	9.5	7.2	2.0	225.2	
44	第12回	PL.7	R804	1地区	包含層 縄文1次	石器 石種A	片麻岩	6.9	6.9	2.1	141.1	
45	第12回	PL.7	R803	1地区	包含層 縄文1次	石器 石種A	緑色岩	6.8	6.7	1.7	125.7	
46	第12回	PL.7	R802	1地区	包含層 縄文1次	石器 石種A	緑色岩	6.5	6.6	1.6	130.0	
47	第12回	PL.7	R801	1地区	包含層 縄文1次	石器 石種B	砂岩	(4.0)	4.7	1.3	35.0	
48	第13回	PL.7	R822	1地区	包含層 縄文1次	石器 磨石C	砂岩	13.3	12.4	8.2	236.0	
49	第13回	PL.7	R815	1地区	包含層 縄文1次	石器 磨石A	安山岩	9.6	8.6	5.1	545.5	
50	第13回	PL.7	R819	1地区	包含層 縄文1次	石器 磨石A	安山岩	13.8	8.2	5.8	1267.2	
51	第13回	PL.7	R816	1地区	包含層 縄文1次	石器 磨石D	花崗岩	9.0	8.8	5.1	578.8	
52	第13回	PL.8	R821	1地区	包含層 縄文1次	石器 磨石D	花崗岩	13.5	12.5	6.6	1065.3	
53	第14回	PL.8	R814	1地区	包含層 縄文1次	石器 磨石A	安山岩	10.1	7.8	5.1	557.8	
54	第14回	PL.8	R820	1地区	包含層 縄文1次	石器 磨石D	玄武岩	13.7	9.9	5.3	1077.1	
55	第14回	PL.8	R817	1地区	包含層 縄文1次	石器 磨石D	砂岩	8.5	7.4	7.0	562.3	

・包含層出土 縄文時代の石製品

報告番号	探検番号	収取番号	R番号	地区	出土場所 時代	種別 分類	石材	全長 (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
56	第14回	PL.8	R480	1地区	包含層 縄文1次	石製品 石棒	緑色片岩	(21.8)	(2.3)		237.1	

・包含層出土 弥生時代以降の土器

報告番号	探検番号	収取番号	R番号	地区	出土場所 時代	種別 分類	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	内面色調 外面色調	焼成 残存率	備考
57	第15回	PL.8	R479	1地区	包含層 弥生後期	弥生土器 小型壺	-	5.4	(5.9)	10YR7/2 に近い黄椗 10YR7/3 に近い黄椗	良 60	
58	第15回	PL.8	R415	1地区	包含層 古代	須恵器 坏? 壺?	-	[5.6]	(4.1)	2.5Y5/1 黄灰 5Y4/1 灰	良 30	

第1地区(2次調査)

・SB01出土 縄文時代の土器

報告 番号	検出 番号	図版 番号	R番号	地区 2次	出土場所 時代	類別 分類	型式 精製/粗製	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	内面色調 外面色調	焼成 残存率	備考
59	第22図	PL.19	R575	1地区 2次	SB01 縄文	縄文土器 深鉢	松ノ木式 精製土器	-	-	(4.8)	2.5YR4/1 褐色 10YR7/2 に近い黄橙	良 -	
60	第22図	-	R583 R630	1地区 2次	SB01 縄文	縄文土器 -	壺之内式 -	-	(8.9)	(4.0)	7.5YR6/4 に近い褐 7.5YR5/4 に近い褐	良 80	副代皿
61	第22図	PL.19	R630	1地区 2次	SB01 縄文	縄文土器 -	壺之内式 -	-	9.15	(5.05)	7.5YR7/6 橙 7.5YR7/6 橙	良 85	副代皿
62	第22図	PL.19	R575	1地区 2次	SB01 縄文	縄文土器 深鉢	加曾利 E4 精製土器	-	-	(6.0)	2.5YR6/6 橙 2.5YR6/6 橙	良 -	

・SK02出土 縄文時代の土器

報告 番号	検出 番号	図版 番号	R番号	地区 2次	出土場所 時代	類別 分類	型式 精製/粗製	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	内面色調 外面色調	焼成 残存率	備考
63	第23図	PL.19	R622	1地区 2次	SK02 縄文	縄文土器 深鉢	緑帯文系 精製土器	[24.1]	-	(15.2)	10YR5/3 に近い黄褐 10YR3/2 黒褐	良 35	
64	第23図	PL.19	R622	1地区 2次	SK02 縄文	縄文土器 浅鉢	壺之内式 精製土器	-	-	(10.2)	7.5YR2/1 黒 7.5YR2/1 黒	良 -	
65	第23図	PL.19	R622	1地区 2次	SK02 縄文	縄文土器 深鉢	壺之内式 精製土器	-	-	(9.85)	7.5YR5/3 に近い褐 2.5Y2/1 黒	良 -	

・SK02出土 縄文時代の石器

報告 番号	検出 番号	図版 番号	R番号	地区 2次	出土場所 時代	類別 分類	石材	全長 (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
66	第23図	PL.19	R709	1地区 2次	SK02 縄文	石器 磨石 D	安山岩	10.6	8.1	5.8	803.2	

・SK06出土 縄文時代の土器

報告 番号	検出 番号	図版 番号	R番号	地区 2次	出土場所 時代	類別 分類	型式 精製/粗製	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	内面色調 外面色調	焼成 残存率	備考
67	第24図	PL.19	R625	1地区 2次	SK06 縄文	縄文土器 深鉢	福田 K2 式 精製土器	-	-	(4.95)	2.5Y2/1 黒 5Y2/1 黒	良 -	

・SK08出土 縄文時代の土器

報告 番号	検出 番号	図版 番号	R番号	地区 2次	出土場所 時代	類別 分類	型式 精製/粗製	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	内面色調 外面色調	焼成 残存率	備考
68	第25図	PL.19	R673	1地区 2次	SK08 縄文	縄文土器 大型深鉢	壺之内式 精製土器	36.2	6.8	43.6	2.5YR5/6 明赤褐 2.5YR5/4 に近い赤褐	良 85	

・包含層出土 縄文時代の土器

報告 番号	検出 番号	図版 番号	R番号	地区 2次	出土場所 時代	類別 分類	型式 精製/粗製	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	内面色調 外面色調	焼成 残存率	備考
69	第26図	PL.21	R514	1地区 2次	包含層 縄文	縄文土器 深鉢	壺之内式 精製土器	[29.7]	9.7	(13.4)	7.5YR2/2 黒褐 7.5YR2/1 黒	良 30	
70	第26図	PL.21	R568	1地区 2次	包含層 縄文	縄文土器 深鉢	壺之内式 精製土器	[21.3]	-	(11.3)	10YR4/4 褐 10YR4/4 褐	良 45	
71	第26図	PL.21	R642	1地区 2次	包含層 縄文	縄文土器 深鉢	壺之内式 精製土器	-	-	(7.7)	2.5YR5/8 明赤褐 2.5YR5/8 明赤褐	良 -	
72	第26図	PL.21	R605	1地区 2次	包含層 縄文	縄文土器 深鉢	壺之内式 精製土器	-	-	(6.8)	5YR5/6 明赤褐 5YR6/8 橙	良 -	
73	第26図	PL.22	R501	1地区 2次	包含層 縄文	縄文土器 深鉢	壺之内式 精製土器	20.0	-	(20.0)	2.5YR4/2 灰赤 2.5YR5/6 明赤褐	良 (50)	
74	第26図	PL.21	R510	1地区 2次	包含層 縄文	縄文土器 深鉢	壺之内式 精製土器	[23.9]	-	(15.2)	5YR5/6 明赤褐 5YR5/6 明赤褐	良 40	
75	第26図	PL.21	R543	1地区 2次	包含層 縄文	縄文土器 深鉢	壺之内式 精製土器	-	-	(7.6)	7.5YR3/3 暗褐 7.5YR4/3 褐	良 -	
76	第26図	PL.21	R561	1地区 2次	包含層 縄文	縄文土器 深鉢	壺之内式 精製土器	-	-	(6.0)	7.5YR6/6 橙 7.5YR6/6 橙	良 -	
77	第26図	PL.21	R538	1地区 2次	包含層 縄文	縄文土器 深鉢	壺之内式 精製土器	-	-	(8.0)	5YR5/6 明赤褐 7.5YR7/4 に近い橙	良 -	
78	第27図	PL.23	R512	1地区 2次	包含層 縄文	縄文土器 深鉢	福田 K2 式 精製土器	[24.0]	-	(17.7)	7.5YR7/6 橙 7.5YR8/4 黄黄橙	良 35	
79	第27図	PL.23	R509	1地区 2次	包含層 縄文	縄文土器 深鉢	壺之内式 精製土器	[28.4]	-	(19.2)	5YR5/4 に近い赤褐 5YR5/6 明赤褐	良 40	
80	第27図	PL.23	R538	1地区 2次	包含層 縄文	縄文土器 深鉢	壺之内式 精製土器	-	-	(6.7)	10YR5/3 に近い黄褐 5YR5/4 に近い赤褐	良 -	

報告番号	探検番号	区画番号	R番号	地区区画	出土場所時代	種別分類	型式	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	内面色調 外面色調	焼成 残存率	備考
81	第27区	PL.23	R538	1地区 2次	包含層 縄文	縄文土器 深鉢	福之内式 精製土器	-	-	(5.6)	7.5YR7 黄緑 7.5YR8.6 浅黄緑	良 -	
82	第27区	PL.23	R580	1地区 2次	包含層 縄文	縄文土器 深鉢	福之内式 精製土器	-	-	(6.4)	5YR5.6 明赤褐 7.5YR4.3 褐	良 -	
83	第27区	PL.23	R543	1地区 2次	包含層 縄文	縄文土器 深鉢	福之内式 精製土器	-	-	(8.6)	7.5YR2/3 暗赤褐 7.5YR2.2 黒褐	良 -	
84	第27区	PL.23	R603	1地区 2次	包含層 縄文	縄文土器 深鉢	福之内式 精製土器	-	-	(7.4)	7.5YR4.3 褐 5YR4.6 赤褐	良 -	
85	第27区	PL.23	R541	1地区 2次	包含層 縄文	縄文土器 深鉢	福之内式 精製土器	-	-	(4.0)	2.5YR3.2 暗赤褐 2.5YR4.4 に近い赤褐	良 -	
86	第27区	PL.23	R612	1地区 2次	包含層 縄文	縄文土器 深鉢	福之内式 精製土器	-	-	(5.5)	5YR4.8 赤褐 5YR4.2 灰褐	良 -	
87	第27区	PL.23	R584	1地区 2次	包含層 縄文	縄文土器 深鉢	福之内式 精製土器	-	-	(7.0)	5YR6.6 黄 5YR3/1 黒褐	良 -	
88	第27区	PL.23	R567	1地区 2次	包含層 縄文	縄文土器 深鉢	福之内式 精製土器	-	-	(4.6)	5YR4.4 に近い赤褐 7.5YR4.2 灰褐	良 -	
89	第27区	PL.23	R556	1地区 2次	包含層 縄文	縄文土器 深鉢	福之内式 精製土器	-	-	(7.1)	7.5YR7/4 に近い黄 7.5YR7/4 に近い黄	良 -	
90	第28区	PL.24	R551	1地区 2次	包含層 縄文	縄文土器 浅鉢?	福之内式 精製土器	-	-	(7.5)	10YR6/3 に近い黄緑 7.5YR6/4 に近い黄	良 -	
91	第28区	PL.24	R651	1地区 2次	包含層 縄文	縄文土器 深鉢	福之内式 精製土器	-	-	(5.0)	7.5YR7/4 に近い黄 7.5YR7/4 に近い黄	良 -	
92	第28区	PL.24	R592	1地区 2次	包含層 縄文	縄文土器 深鉢	福之内式 精製土器	-	-	(5.9)	7.5YR5/3 に近い黄 10YR3/1 黒褐	良 -	
93	第28区	PL.24	R580	1地区 2次	包含層 縄文	縄文土器 浅鉢? 深鉢?	福之内式 精製土器	-	-	(6.0)	10YR5.2 灰黄褐 7.5YR4.2 灰褐	良 -	
94	第28区	PL.24	R519	1地区 2次	包含層 縄文	縄文土器 浅鉢	福之内式 精製土器	-	-	(5.25)	10YR4.2 灰黄褐 7.5Y2/3 黒	良 -	
95	第28区	PL.24	R546	1地区 2次	包含層 縄文	縄文土器 深鉢	福之内式 精製土器	-	-	(7.7)	7.5YR6.6 黄 5YR6.6 黄	良 -	
96	第28区	PL.24	R511 R666	1地区 2次	包含層 縄文	縄文土器 深鉢	福之内式 精製土器	-	[7.2]	(10.8)	2.5YR5.6 明赤褐 2.5YR5.6 明赤褐	良 46	
97	第28区	PL.24	R513	1地区 2次	包含層 縄文	縄文土器 深鉢	福之内式 精製土器	-	-	(13.8)	7.5YR6.6 黄 5YR6.6 黄	良 20	
98	第28区	PL.24	R613	1地区 2次	包含層 縄文	縄文土器 深鉢	福之内式 精製土器	-	-	(3.2)	5YR5.4 に近い赤褐 5YR4.2 灰褐	良 -	表面朱付着
99	第28区	PL.24	R579	1地区 2次	包含層 縄文	縄文土器 深鉢	福田 K2 式 精製土器	-	-	(5.5)	10YR3/1 黒褐 7.5YR5/3 黄い褐	良 -	表面朱付着
100	第28区	PL.24	R666	1地区 2次	包含層 縄文	縄文土器 深鉢	福之内式 精製土器	-	-	(4.9)	7.5YR5.2 灰褐 5YR3/1 黒褐	良 -	
101	第29区	PL.25	R517	1地区 2次	包含層 縄文	縄文土器 深鉢	福之内式 精製土器	-	-	(10.4)	7.5YR5.3 に近い黄 5YR6.6 黄	良 -	
102	第29区	PL.25	R543	1地区 2次	包含層 縄文	縄文土器 深鉢	赤名寺式 精製土器	-	-	(6.1)	5YR5.6 明赤褐 7.5YR5.4 に近い黄	良 -	
103	第29区	PL.25	R640	1地区 2次	包含層 縄文	縄文土器 深鉢	福之内式 精製土器	-	-	(8.9)	5YR6.6 黄 5YR6.6 黄	良 -	
104	第29区	PL.25	R521	1地区 2次	包含層 縄文	縄文土器 深鉢	福之内式 精製土器	-	-	(13.3)	7.5YR4.2 灰褐 10YR4.2 灰黄褐	良 -	
105	第29区	PL.25	R580	1地区 2次	包含層 縄文	縄文土器 深鉢	福之内式 精製土器	-	-	(7.9)	7.5YR6.6 黄 5YR6.6 黄	良 -	
106	第29区	PL.25	R635	1地区 2次	包含層 縄文	縄文土器 深鉢	赤名寺式 精製土器	-	-	(6.85)	7.5YR7.6 黄 5YR7.6 黄	良 -	
107	第29区	PL.25	R604	1地区 2次	包含層 縄文	縄文土器 深鉢	福之内式 精製土器	-	-	(5.6)	7.5YR3/1 黒褐 5YR6.6 黄	良 -	
108	第29区	PL.25	R651	1地区 2次	包含層 縄文	縄文土器 深鉢	福之内式 精製土器	-	-	(9.6)	5YR5.4 に近い赤褐 5YR6.6 黄	良 -	
109	第29区	PL.25	R669	1地区 2次	包含層 縄文	縄文土器 深鉢	福之内式 精製土器	-	-	(10.1)	7.5YR6.6 黄 10YR6.4 に近い黄緑	良 -	
110	第29区	PL.25	R653	1地区 2次	包含層 縄文	縄文土器 深鉢	福之内式 精製土器	-	7.3	(7.2)	7.5YR7/4 に近い黄 7.5YR8.6 浅黄緑	良 65	
111	第29区	PL.25	R522	1地区 2次	包含層 縄文	縄文土器 深鉢	福之内式 精製土器	-	-	(16.25)	10YR5/3 に近い黄 7.5YR4.2 灰褐	良 -	
112	第29区	PL.26	R538	1地区 2次	包含層 縄文	縄文土器 深鉢	福之内式 精製土器	-	-	(4.35)	7.5YR8.6 浅黄緑 5YR6.6 黄	良 -	
113	第29区	PL.26	R531 R540	1地区 2次	包含層 縄文	縄文土器 深鉢	福之内式 精製土器	-	-	(16.7)	5YR6.6 黄 5YR4.2 灰褐	良 -	
114	第30区	PL.26	R617	1地区 2次	包含層 縄文	縄文土器 深鉢	福田 K2 式 精製土器	-	-	(11.0)	7.5YR5.3 に近い黄 7.5YR5.3 に近い黄	良 45	
115	第30区	PL.26	R502	1地区 2次	包含層 縄文	縄文土器 小型鉢	赤名寺式 精製土器	-	6.0	14.4	7.5YR6.3 に近い黄 7.5YR6.4 に近い黄	良 70	
116	第30区	PL.26	R528	1地区 2次	包含層 縄文	縄文土器 深鉢	福之内式 精製土器	[26.1]	-	(12.15)	7.5YR6.6 黄 5YR6.6 黄	良 -	
117	第30区	PL.26	R606	1地区 2次	包含層 縄文	縄文土器 深鉢	福之内式 精製土器	-	-	(12.85)	5YR6.6 黄 7.5YR6.6 黄	良 -	
118	第30区	PL.26	R525	1地区 2次	包含層 縄文	縄文土器 深鉢	福之内式 精製土器	[30.8]	-	(17.3)	5YR4.2 灰褐 7.5YR3.3 暗褐	良 25	

報告番号	採回番号	図録番号	R番号	地区 次	出土場所 年代	類別 分類	型式 精製/粗製	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	内面色調 外面色調	焼成 状況	備考
119	第30回	PL.27	R535	1地区 2次	包含層 縄文 深鉢	縄文土器 深鉢	堀之内式 精製土器	-	-	(8.2)	2.5Y2/1 黒 5YR54 に近い赤褐色	良	-
120	第30回	PL.27	R567	1地区 2次	包含層 縄文 深鉢	縄文土器 深鉢	堀之内式 精製土器	-	-	(5.5)	5YR44 に近い赤褐色 5YR2/2 赤褐色	良	-
121	第31回	PL.27	R504	1地区 2次	包含層 縄文 深鉢	縄文土器 深鉢	堀之内式 精製土器	-	9.9	(18.5)	10YR3/1 黒褐色 5YR5/6 明赤褐色	良	副代皿
122	第31回	PL.27	R668	1地区 2次	包含層 縄文 深鉢	縄文土器 深鉢	堀之内式 粗製土器	-	9.4	(8.1)	10YR2/1 黒 2.5YR6/8 橙	良	副代皿
123	第31回	PL.27	R505	1地区 2次	包含層 縄文 小型鉢	縄文土器 小型鉢	堀之内式 精製土器	-	6.9	(15.1)	7.5YR3/1 黒褐色 5YR4/8 赤褐色	良	25
124	第31回	PL.27	R570	1地区 2次	包含層 縄文 蓋	縄文土器 蓋	堀之内式 精製土器	10.9	-	(2.3)	7.5YR7/6 橙 7.5YR3/4 に近い橙	良	95
125	第31回	PL.27	R644	1地区 2次	包含層 縄文 注口土器	縄文土器 注口土器	堀之内式 粗製土器	-	-	(4.0)	5YR54 に近い橙 10YR6/3 に近い黄褐色	良	-
126	第31回	PL.27	R540	1地区 2次	包含層 縄文 注口土器	縄文土器 注口土器	堀之内式 精製土器	-	-	(5.6)	7.5YR4/3 褐 7.5YR4/3 褐	良	-
127	第31回	PL.27	R541	1地区 2次	包含層 縄文 注口土器	縄文土器 注口土器	堀之内式 精製土器	-	-	(6.7)	10YR5/3 に近い黄褐色 10YR5/3 に近い黄褐色	良	-
128	第32回	PL.28	R581	1地区 2次	包含層 縄文 深鉢	縄文土器 深鉢	堀之内式 粗製土器	-	-	(9.8)	7.5YR4/2 灰褐色 7.5YR5/3 に近い褐色	良	-
129	第32回	PL.28	R586	1地区 2次	包含層 縄文 深鉢	縄文土器 深鉢	堀之内式 粗製土器	-	-	(10.0)	5YR6/6 橙 7.5YR3/2 黒褐色	良	-
130	第32回	PL.28	R564	1地区 2次	包含層 縄文 深鉢	縄文土器 深鉢	堀之内式 精製土器	-	-	(8.0)	5YR5/6 明赤褐色 5YR5/6 明赤褐色	良	-
131	第32回	PL.28	R532	1地区 2次	包含層 縄文 深鉢	縄文土器 深鉢	堀之内式 粗製土器	[24.2]	-	(16.2)	7.5YR5/3 に近い褐 7.5YR4/4 褐	良	30
132	第32回	PL.28	R516	1地区 2次	包含層 縄文 深鉢	縄文土器 深鉢	堀之内式 粗製土器	-	-	(12.5)	5YR6/6 橙 7.5YR4/3 褐	良	-
133	第32回	PL.28	R608	1地区 2次	包含層 縄文 深鉢	縄文土器 深鉢	堀之内式 粗製土器	-	-	(11.85)	5YR6/8 橙 7.5YR4/3 褐	良	-
134	第32回	PL.28	R527	1地区 2次	包含層 縄文 深鉢	縄文土器 深鉢	堀之内式 粗製土器	-	-	(19.2)	5YR6/8 橙 5YR6/8 橙	良	-
135	第32回	PL.29	R665	1地区 2次	包含層 縄文 深鉢	縄文土器 深鉢	堀之内式 粗製土器	-	-	(5.35)	5YR54 に近い赤褐色 7.5Y4/3 褐	良	-
136	第32回	PL.29	R665	1地区 2次	包含層 縄文 深鉢	縄文土器 深鉢	堀之内式 粗製土器	-	-	(7.0)	10YR6/2 灰黄褐色 5YR5/3 に近い赤褐色	良	-
137	第32回	PL.29	R578	1地区 2次	包含層 縄文 深鉢	縄文土器 深鉢	堀之内式 粗製土器	-	-	(11.2)	7.5YR4/1 黄褐色 7.5YR4/1 黄褐色	良	-
138	第33回	PL.29	R672	1地区 2次	包含層 縄文 大型深鉢	縄文土器 大型深鉢	堀之内式 粗製土器	[28.8]	6.5	40.9	5YR54 に近い赤褐色 2.5YR5/6 明赤褐色	良	35
139	第33回	PL.30	R545	1地区 2次	包含層 縄文 深鉢	縄文土器 深鉢	堀之内式 粗製土器	-	-	(16.4)	7.5YR6/4 に近い橙 7.5YR6/4 に近い橙	良	-
140	第33回	PL.30	R523	1地区 2次	包含層 縄文 深鉢	縄文土器 深鉢	堀之内式 粗製土器	[31.5]	-	(25.25)	7.5YR5/4 に近い褐色 5YR4/6 赤褐色	良	25
141	第34回	PL.30	R671	1地区 2次	包含層 縄文 深鉢	縄文土器 深鉢	堀之内式 粗製土器	-	9.4	(20.0)	5YR6/6 橙 2.5YR4/6 赤褐色	良	45
142	第34回	PL.30	R667	1地区 2次	包含層 縄文 深鉢	縄文土器 深鉢	堀之内式 粗製土器	-	[11.8]	(8.7)	10YR3/3 暗褐色 5YR6/6 橙	良	副代皿
143	第34回	-	R667	1地区 2次	包含層 縄文 深鉢	縄文土器 深鉢	堀之内式 粗製土器	-	[6.5]	(2.8)	7.5YR7/6 橙 5YR7/8 橙	良	40
144	第34回	-	R647 R605	1地区 2次	包含層 縄文 深鉢	縄文土器 深鉢	堀之内式 粗製土器	-	5.6	(2.2)	2.5YR6/6 橙 2.5YR6/6 橙	良	副代皿
145	第34回	PL.30	R579	1地区 2次	包含層 縄文 深鉢	縄文土器 深鉢	堀之内式 粗製土器	-	[8.2]	(5.3)	10YR3/2 黒褐色 5YR6/6 橙	良	副代皿
146	第34回	-	R592	1地区 2次	包含層 縄文 深鉢	縄文土器 深鉢	堀之内式 粗製土器	-	[6.9]	(4.0)	7.5YR4/2 灰褐色 2.5YR5/6 明赤褐色	良	55
147	第34回	PL.30	R503	1地区 2次	包含層 縄文 深鉢	縄文土器 深鉢	堀之内式 粗製土器	-	10.7	(9.1)	10YR7/3 に近い黄褐色 5YR6/6 橙	良	95
148	第34回	-	R597 R598 R589	1地区 2次	包含層 縄文 深鉢	縄文土器 深鉢	堀之内式 粗製土器	-	[10.1]	(3.2)	5YR7/6 橙 5YR7/6 橙	良	85
149	第34回	-	R543	1地区 2次	包含層 縄文 深鉢	縄文土器 深鉢	堀之内式 粗製土器	-	[10.1]	(1.9)	7.5YR4/3 褐 5YR6/8 橙	良	副代皿?
150	第35回	PL.30	R651	1地区 2次	包含層 縄文 深鉢	縄文土器 深鉢	加普利E4 精製土器	[26.0]	-	(9.0)	7.5YR6/6 橙 7.5YR5/4 に近い褐色	良	20

・包含層出土 縄文時代の石器

報告番号	採回番号	図録番号	R番号	地区 次	出土場所 年代	類別 分類	石材	全長 (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
151	第36回	PL.31	R751	1地区 2次	包含層 縄文 石籠	石籠	黒曜石	1.3	1.3	0.3	0.44	
152	第36回	PL.31	R762	1地区 2次	包含層 縄文 石籠	石籠	黒曜石	1.4	2.0	0.3	0.93	
153	第36回	PL.31	R763	1地区 2次	包含層 縄文 石籠	石籠	黒曜石	2.0	1.3	0.5	0.84	

報告番号	採掘番号	区画番号	R番号	地区	出土場所 時代	種別 分類	石材	全長 (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
154	第36区	PL-31	R745	1地区	包含層 2次	石製 ナイフ様石器	黒曜石	3.1	1.9	0.4	2.26	
155	第36区	PL-31	R775	1地区	包含層 2次	石製 石匙	ホルンフェルス	3.0	4.6	0.6	5.49	
156	第36区	PL-31	R715	1地区	包含層 2次	石製 打製石斧A	緑色片岩	14.1	6.0	3.0	257.36	
157	第36区	PL-31	R677	1地区	包含層 2次	石製 打製石斧A	緑色岩	10.4	5.3	0.8	92.26	
158	第36区	PL-31	R703	1地区	包含層 2次	石製 打製石斧A	緑色片岩	8.5	6.7	2.0	114.13	
159	第36区	PL-31	R681	1地区	包含層 2次	石製 打製石斧B	緑色片岩	12.5	8.4	3.0	326.77	
160	第37区	PL-32	R699	1地区	包含層 2次	石製 打製石斧C	緑色岩	8.7	7.2	2.3	166.37	
161	第37区	PL-32	R713	1地区	包含層 2次	石製 打製石斧C	緑色岩	11.8	9.1	3.5	464.1	
162	第37区	PL-32	R507	1地区	包含層 2次	石製 磨製石斧	透閃石	9.4	4.6	1.8	141.25	
163	第37区	PL-32	R506	1地区	包含層 2次	石製 磨製石斧	透閃石	5.1	3.4	0.9	36.8	
164	第37区	PL-32	R508	1地区	包含層 2次	石製 磨製石斧	蛇紋岩	5.1	3.2	1.0	30.0	
165	第37区	PL-32	R691	1地区	包含層 2次	石製 楔形石器	緑色岩	7.3	5.4	1.7	105.85	
166	第37区	PL-32	R688	1地区	包含層 2次	石製 石鏢A	砂岩	9.0	7.9	2.9	236.44	
167	第37区	PL-32	R701	1地区	包含層 2次	石製 石鏢A	砂岩	7.2	7.3	2.6	198.85	
168	第37区	PL-32	R700	1地区	包含層 2次	石製 石鏢A	緑色岩	9.8	7.1	2.8	241.39	
169	第37区	PL-32	R704	1地区	包含層 2次	石製 石鏢A	緑色岩	6.9	6.3	19.7	128.28	
170	第38区	PL-33	R706	1地区	包含層 2次	石製 石鏢A	緑色片岩	7.1	6.3	1.3	84.6	
171	第38区	PL-33	R690	1地区	包含層 2次	石製 石鏢A	安山岩	6.5	6.0	1.9	114.85	
172	第38区	PL-33	R683	1地区	包含層 2次	石製 石鏢A	砂岩	5.5	3.4	1.4	39.19	
173	第38区	PL-33	R724	1地区	包含層 2次	石製 石鏢A	緑色岩	7.4	5.8	2.1	119.14	
174	第38区	PL-33	R705	1地区	包含層 2次	石製 石鏢A	緑色岩	7.1	6.3	1.6	109.13	
175	第38区	PL-33	R685	1地区	包含層 2次	石製 石鏢A	緑色岩	4.5	4.3	1.0	31.5	
176	第38区	PL-33	R692	1地区	包含層 2次	石製 石鏢A	砂岩	6.3	6.3	1.6	95.02	
177	第38区	PL-33	R693	1地区	包含層 2次	石製 石鏢A	緑色岩	6.3	5.2	2.2	96.33	
178	第38区	PL-33	R696	1地区	包含層 2次	石製 石鏢A	緑色片岩	5.2	3.8	1.3	39.53	
179	第38区	PL-33	R682	1地区	包含層 2次	石製 石鏢A	緑色岩	7.1	5.7	1.9	117.66	
180	第38区	PL-33	R679	1地区	包含層 2次	石製 石鏢A	安山岩	5.8	4.9	1.8	72.78	
181	第38区	PL-33	R698	1地区	包含層 2次	石製 石鏢A	緑色岩	5.7	4.4	0.9	38.57	
182	第38区	PL-33	R678	1地区	包含層 2次	石製 石鏢A	鹿レイ岩	7.0	6.4	1.5	109.53	
183	第38区	PL-33	R702	1地区	包含層 2次	石製 石鏢B	緑色岩	5.5	4.2	1.3	45.4	
184	第38区	PL-33	R697	1地区	包含層 2次	石製 石鏢B	緑色片岩	4.8	3.1	1.1	23.17	
185	第39区	PL-34	R730	1地区	包含層 2次	石製 磨石A	砂岩	12.4	10.0	49.0	803.9	
186	第39区	PL-34	R687	1地区	包含層 2次	石製 磨石A	砂岩	9.5	8.0	4.0	537.8	
187	第39区	PL-34	R689	1地区	包含層 2次	石製 磨石C	閃緑岩	10.1	7.3	3.8	435.3	
188	第39区	PL-34	R686	1地区	包含層 2次	石製 磨石D	安山岩	11.8	9.3	4.0	698.6	
189	第39区	PL-34	R694	1地区	包含層 2次	石製 磨石D	砂岩	11.2	9.0	6.8	1035.68	
190	第39区	PL-34	R729	1地区	包含層 2次	石製 磨石D	安山岩	11.9	8.7	5.5	952.36	
191	第40区	PL-35	R720	1地区	包含層 2次	石製 石鏢B	安山岩	26.7	29.7	9.9	6300	

報告番号	検出番号	国庫番号	R番号	地区	出土場所 時代	類別 分類	石材	全長 (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
192	第40回	PL.35	R712	1地区 2次	包含層 縄文	石器 石皿B	安山岩	28.8	10.6	6.9	2060	
193	第40回	PL.35	R719	1地区 2次	包含層 縄文	石器 石皿B	安山岩	20.0	17.3	7.1	4260	
194	第40回	PL.35	R718	1地区 2次	包含層 縄文	石器 石皿A	安山岩	30.5	19.3	11.5	7340	
195	第41回	PL.35	R710	1地区 2次	包含層 縄文	石器 砥石	砂岩	18.9	9.4	3.3	766.69	
196	第41回	PL.35	R726	1地区 2次	包含層 縄文	石器 砥石	砂岩	13.4	5.6	3.6	402.74	

・包含層出土 縄文時代の石製品

報告番号	検出番号	国庫番号	R番号	地区	出土場所 時代	類別 分類	石材	全長 (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
197	第42回	PL.35	R722	1地区 2次	包含層 縄文	石製品 石棒	安山岩	21.1	10.4	9.7	2987.20	
198	第42回	PL.35	R723	1地区 2次	包含層 縄文	石製品 石棒	安山岩	10.7	12.6	12.2	2288.18	

・包含層出土 弥生時代以降の土器

報告番号	検出番号	国庫番号	R番号	地区	出土場所 時代	類別 分類	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	内面色調 外面色調	焼成 残存率	備考
199	第43回	-	R558	1地区 2次	包含層 古墳～飛鳥	須恵器 坏	-	-	(2.8)	2.5YR6/1 黄灰 2.5YR6/1 黄灰	良 -	
200	第43回	-	R537	1地区 2次	包含層 古代	須恵器 坏	-	-	(1.25)	2.5YR8/1 灰白 2.5YR8/1 灰白	良 -	

第2地区 (3次調査)

・包含層出土 縄文時代の土器

報告番号	検出番号	国庫番号	R番号	地区	出土場所 時代	類別 分類	型式 種類/組数	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	その他部位 (cm)	内面色調 外面色調	焼成 残存率	備考
201	第47回	PL.40	R062 R080	2地区 3次	包含層 縄文	縄文土器	壺之内式 深鉢 精製土器	-	-	(21.3)		5YR6/6 橙 5YR6/6 橙	良 30	
202	第47回	PL.40	R059	2地区 3次	包含層 縄文	縄文土器	壺之内式 深鉢	-	-	(5.55)		7.5YR4/1 褐灰 7.5YR3/2 黒褐	良 -	
203	第47回	PL.40	R083	2地区 3次	包含層 縄文	縄文土器	壺之内式 精製土器	-	-	(6.6)		10YR3/2 黒褐 10YR4/1 褐灰	良 -	
204	第47回	PL.40	R048	2地区 3次	包含層 縄文	縄文土器	壺之内式 精製土器	-	-	(2.8)		10YR3/2 黒褐 10YR6/4 に近い黄褐	良 -	
205	第47回	PL.40	R037	2地区 3次	包含層 縄文	縄文土器	壺之内式 深鉢 精製土器	-	-	(3.5)		7.5YR3/2 黒褐 7.5YR3/1 黒褐	良 -	
206	第47回	PL.40	R011	2地区 3次	包含層 縄文	縄文土器	壺之内式 深鉢 精製土器	-	-	(4.5)		5YR6/6 橙 5YR6/6 橙	良 -	
207	第47回	PL.40	R081	2地区 3次	包含層 縄文	縄文土器	壺之内式 注口土器 精製土器	-	-	(7.9)		5YR5/6 明赤褐 5YR5/6 明赤褐	良 95	
208	第47回	PL.40	R081	2地区 3次	包含層 縄文	縄文土器	壺之内式 注口土器 精製土器	-	-	(3.9)		5YR5/4 に近い赤褐 5YR5/4 に近い赤褐	良 -	
209	第47回	PL.40	R081	2地区 3次	包含層 縄文	縄文土器	壺之内式 精製土器	-	-	-	全長 幅 (7.9) 1.6	5YR6/8 橙 5YR6/6 橙	良 -	
210	第48回	-	R014	2地区 3次	包含層 縄文	縄文土器	壺之内式	-	-	(7.5) (2.55)		7.5YR6/4 に近い橙 7.5YR6/4 に近い橙	良 40	
211	第48回	-	R068	2地区 3次	包含層 縄文	縄文土器	壺之内式	-	-	(10.8) (4.4)		7.5YR6/4 に近い橙 5YR6/6 橙	良 30	
212	第48回	-	R043	2地区 3次	包含層 縄文	縄文土器	壺之内式	-	-	(9.75) (3.85)		5YR6/6 橙 7.5YR5/4 に近い橙	良 40	
213	第48回	-	R040	2地区 3次	包含層 縄文	縄文土器	壺之内式	-	-	8.3 (2.95)		5YR6/6 橙 5YR5/6 明赤褐	良 50	網代煎?
214	第48回	-	R059	2地区 3次	包含層 縄文	縄文土器	壺之内式	-	-	(7.3) (3.2)		5YR7/6 橙 7.5YR7/6 橙	良 55	網代煎
215	第48回	-	R040	2地区 3次	包含層 縄文	縄文土器	壺之内式	-	-	(10.1) (4.4)		5YR6/6 橙 5YR6/6 橙	良 40	網代煎
216	第48回	-	R051	2地区 3次	包含層 縄文	縄文土器	壺之内式	-	-	(8.9) (2.5)		2.5Y7/3 浅黄 7.5YR7/4 に近い橙	良 40	網代煎
217	第48回	-	R080 R062	2地区 3次	包含層 縄文	縄文土器	壺之内式	-	-	(10.8) (5.95)		5YR7/8 橙 5YR7/6 橙	良 40	
218	第48回	-	R080 R062	2地区 3次	包含層 縄文	縄文土器	壺之内式	-	-	8.2 (3.6)		5YR6/6 橙 5YR6/6 橙	良 75	
219	第49回	PL.40	R079	2地区 3次	包含層 縄文	縄文土器	加曾利	-	-	(6.6)		10YR5/3 に近い黄褐 7.5YR5/6 明褐	良 -	

報告番号	押込番号	区画番号	R番号	地区	出土場所 時代	種別 分類	型式 複製/複製	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	その他部位 (cm)	内面色調 外面色調	焼成 残存率	備考
220	第49回	PL.40	R068	2地区 3次	包含層 縄文	縄文土器 管利	-	-	-	(5.6)		10YR4/6 黒 5YR4/6 赤黒	良-	
221	第49回	PL.40	R040	2地区 3次	包含層 縄文	縄文土器 深鉢	管利	-	-	(5.7)		10YR6/6 明黄褐色 10YR6/6 明黄褐色	良-	
222	第49回	PL.40	R076	2地区 3次	包含層 縄文	縄文土器 管利	-	-	-	(7.1)		5YR6/6 橙 7.5YR6/4 に近い橙	良-	

・包含層出土 縄文時代の石器

報告番号	押込番号	区画番号	R番号	地区	出土場所 時代	種別 分類	石材	全長 (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
223	第50回	PL.41	R010	2地区 3次	包含層 縄文	石器 打製石斧A	緑色岩	8.6	6.1	1.7	150.92	
224	第50回	PL.41	R071	2地区 3次	包含層 縄文	石器 打製石斧A	緑色岩	10.9	7.5	1.8	153.58	
225	第50回	PL.41	R088	2地区 3次	包含層 縄文	石器 打製石斧B	緑色岩	9.7	6.0	1.5	99.41	
226	第50回	PL.41	R075	2地区 3次	包含層 縄文	石器 磨製石斧	蛇紋岩	6.6	3.8	1.4	62.1	
227	第50回	PL.41	R093	2地区 3次	包含層 縄文	石器 石錘A	砂岩	8.1	10.0	2.3	310.98	
228	第50回	PL.41	R070	2地区 3次	包含層 縄文	石器 石錘A	砂岩	8.5	6.2	1.5	101.34	
229	第50回	PL.41	R051	2地区 3次	包含層 縄文	石器 石錘A	片麻岩	7.7	6.7	1.4	112.86	
230	第50回	PL.41	R064	2地区 3次	包含層 縄文	石器 石錘B	緑色岩	7.3	2.3	1.2	34.4	
231	第51回	PL.42	R044	2地区 3次	包含層 縄文	石器 磨石A	砂岩	12.7	7.0	3.9	549.59	
232	第51回	PL.42	R093	2地区 3次	包含層 縄文	石器 磨石A	凝岩	9.2	8.8	5.0	345.62	
233	第51回	PL.42	R081	2地区 3次	包含層 縄文	石器 磨石B	砂岩	10.6	7.2	2.7	362.34	
234	第51回	PL.42	R093	2地区 3次	包含層 縄文	石器 磨石D	砂岩	11.8	8.9	4.2	712.1	
235	第52回	PL.42	R092	2地区 3次	包含層 縄文	石器 石皿B	安山岩	16.1	20.6	4.3	2520	
236	第52回	PL.42	R094	2地区 3次	包含層 縄文	石器 石皿B	凝岩	14.1	18.2	4.8	1680	
237	第52回	PL.42	R095	2地区 3次	包含層 縄文	石器 石皿B	安山岩	28.0	21.2	10.3	7300	
238	第52回	PL.42	R096	2地区 3次	包含層 縄文	石器 石皿B	安山岩	23.1	30.3	8.3	6700	

・包含層出土 縄文時代の土製品

報告番号	押込番号	区画番号	R番号	地区	出土場所 時代	種別 分類	内面色調 外面色調	焼成 残存率	全長 (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
239	第53回	PL.43	R081	2地区 3次	包含層 縄文	土製品 土製品	5YR6/6 橙 7.5YR6/6 橙	良-	6.1	3.9	1.8		
240	第53回	PL.43	R100	2地区 3次	包含層 縄文	土製品 土俵	10YR6/4 に近い黄褐色 10YR6/4 に近い黄褐色	良-	長径 7.7	短径 5.1	高さ (9.3)		

・包含層出土 縄文時代の石製品

報告番号	押込番号	区画番号	R番号	地区	出土場所 時代	種別 分類	石材	全長 (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
241	第54回	PL.43	R101	2地区 3次	包含層 縄文	石製品 決状耳飾り	滑石	[5.4]		[0.8]		
242	第54回	PL.43	R093	2地区 3次	包含層 縄文	石製品 石棒	安山岩	(10.8)	9.3	7.7	1341.3	
243	第54回	PL.43	R080	2地区 3次	包含層 縄文	石製品 石棒	砂岩	7.7	7.7	4.5	316.87	

・包含層出土 弥生時代以降の土器

報告番号	検出番号	図版番号	R番号	地区次	出土場所時代	類別分類	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	内面色調 外面色調	焼成 状況	備考
244	第55図	PL.44	R049	2地区 3次	包含層 古墳	土師器 S字壺	14.3	-	(21.5)	10YR5/3 にぶい黄褐色 10YR5/3 にぶい黄褐色	良 50	
			R050									
			R091 R071									
245	第55図	-	R010	2地区 3次	包含層 古墳	土師器 S字壺	-	-	(3.3)	2.5YR4/6 赤褐色 2.5YR4/6 赤褐色	良 30	
			R039									
246	第55図	PL.44	R044	2地区 3次	包含層 古墳	土師器 壺	18.1	-	(32.6)	7.5YR7/6 橙褐色 7.5YR8/6 浅黄褐色	良 50	
			R045									
			R052 R053									
247	第55図	PL.44	R050	2地区 3次	包含層 古墳	土師器 壺	-	-	(8.8)	7.5YR6/6 橙褐色 7.5YR3/3 極暗褐色	良 70	
			R045 R046									
248	第55図	PL.44	R045	2地区 3次	包含層 古墳	土師器 壺	-	-	(8.85)	5YR6/6 橙褐色 7.5YR6/6 橙褐色	良 55	
			R044									
249	第55図	PL.44	R056	2地区 3次	包含層 古墳	土師器 壺	-	-	(40.4)	10YR8/4 浅黄褐色 10YR7/4 にぶい黄褐色	良 30	
			R063									
250	第55図	PL.44	R057	2地区 3次	包含層 古墳	土師器 埴	10.4	1.4	5.6	7.5YR3/3 浅黄褐色 5YR7/6 橙褐色	良 60	
			R070									
251	第55図	-	R070	2地区 3次	包含層 古墳	土師器 高坏	-	-	(4.7)	2.5YR4/8 赤褐色 2.5YR4/8 赤褐色	良 -	
			R058									
252	第55図	PL.44	R058	2地区 3次	包含層 古墳	土師器 高坏	-	(15.6)	(8.7)	5YR6/6 橙褐色 5YR6/6 橙褐色	良 30	
			R023									
253	第56図	-	R023	2地区 3次	包含層 古代	灰輪陶器 皿	-	(6.6)	(1.6)	2.5YR6/2 灰黄褐色 10YR6/2 黄灰褐色	良 25	

その他の表採

・縄文時代の石器

報告番号	検出番号	図版番号	R番号	地区次	出土場所時代	類別分類	石材	全長 (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
254	第60図	PL.46	R320	その他 の表採	表採 縄文	石器 打製石片 C	緑色片岩	14.2	7.6	1.4	164.4	
255	第60図	PL.46	R317	その他 の表採	表採 縄文	石器 石種 A	安山岩	6.9	7.4	1.7	123.0	
256	第60図	PL.46	R316	その他 の表採	表採 縄文	石器 石種 A	砂岩	6.1	6.3	1.3	79.3	
257	第60図	PL.46	R315	その他 の表採	表採 縄文	石器 石種 A	緑色岩	5.6	4.2	1.1	47.0	
258	第60図	PL.46	R313	その他 の表採	表採 縄文	石器 石種 A	砂岩	3.9	3.7	1.2	26.1	
259	第60図	PL.46	R314	その他 の表採	表採 縄文	石器 石種 A	緑色岩	5.0	3.1	1.0	22.8	
260	第61図	PL.46	R325	その他 の表採	表採 縄文	石器 石種 A	安山岩	12.2	11.2	3.7	714.5	
261	第61図	PL.46	R322	その他 の表採	表採 縄文	石器 石種 A	溶岩	12.4	8.0	4.7	797.7	
262	第61図	PL.46	R323	その他 の表採	表採 縄文	石器 石種 B	砂岩	8.8	6.1	3.8	299.0	
263	第61図	PL.46	R321	その他 の表採	表採 縄文	石器 石種 C	砂岩	7.4	6.6	3.8	308.8	
264	第61図	PL.46	R324	その他 の表採	表採 縄文	石器 石種 D	安山岩	10.2	9.6	3.9	362.9	

・弥生時代以降の石器

報告番号	検出番号	図版番号	R番号	地区次	出土場所時代	類別分類	石材	全長 (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
265	第62図	PL.46	R318	その他 の表採	表採 古代	石器 砥石	凝灰岩	6.0	3.3	2.6	58.0	

写真図版

PLATE









19



20



21



22







PL.8 1地区(1次調査) 出土遺物





1. 調査区全景 (西から)



2. 調査区全景 (西から)



1. SB01 (北から)



2. SK01・SK02 (南から)



1. SK01 (南から)



2. SK02 (南から)



1. SK02 覆土堆積状況 (南から)



2. SK02 遺物 (63・64・66) 出土状況 (南から)



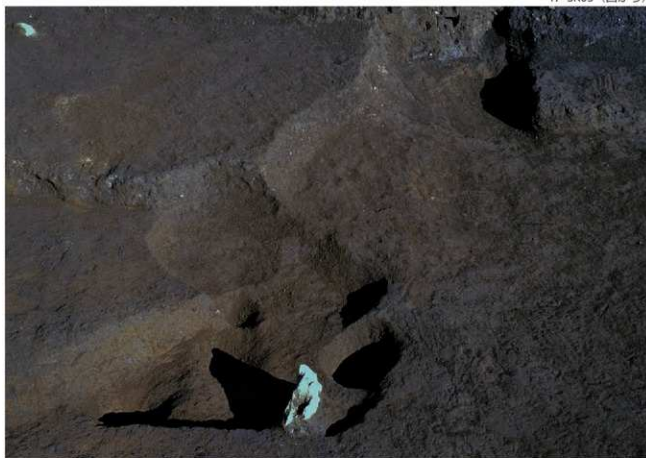
1. SK03 (東から)



2. SK04 (東から)



1. SK05 (西から)



2. SK06～09 (南から)



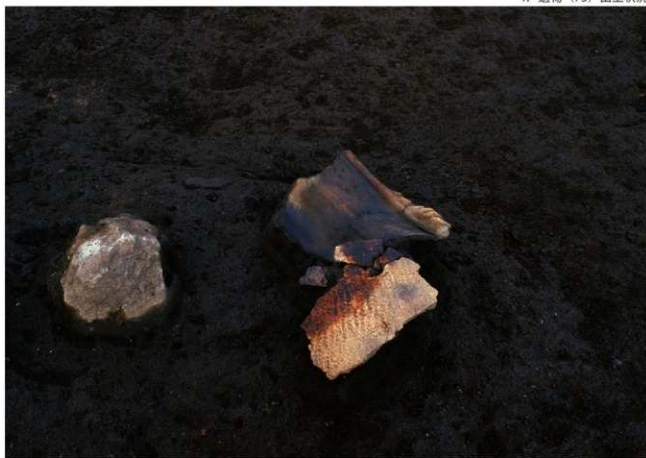
1. SK08 遺物 (68) 出土状況



2. FP01 (南から)



1. 遺物 (73) 出土状況



2. 遺物 (74) 出土状況



1. 遺物 (115) 出土状況



2. 遺物 (138) 出土状況



1. 遺物(197)出土状況



2. 2次調査の様子(西から)



3. 2次調査の様子(東から)



4. 1次調査遠景(南東から)



5. 1次調査の様子



SB01 出土遺物

SK06 出土遺物



SK02 出土遺物



68



68 00000





73



73 (四)

包含層出土遺物











119



120



124



125



126



127



121



122



123



128



129



130



131



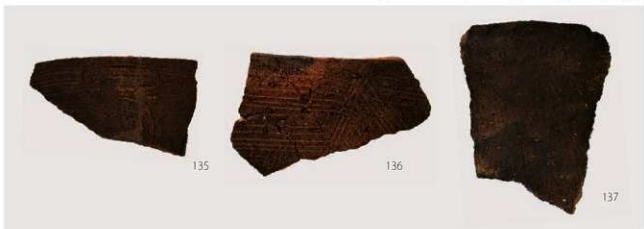
132



133



134







151



153



154



152



155



156



157



158



159











1. 調査区全景 (南から)



2. SK01 ~ 03・Pit01 ~ 02 (西から)



1. SK01 完掘



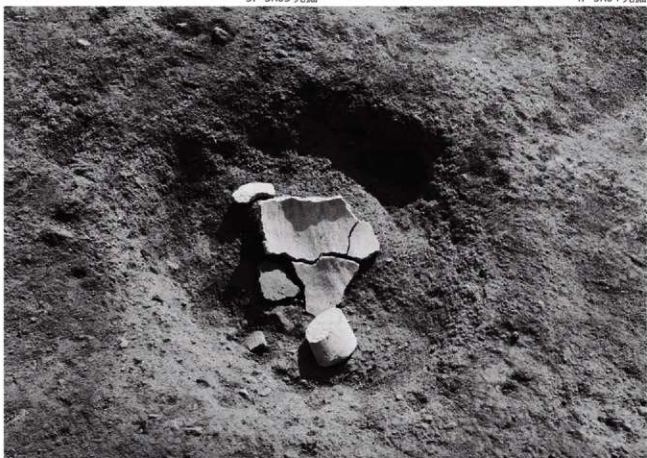
2. SK02 完掘



3. SK03 完掘



4. SK04 完掘



5. 遺物(201・243)出土状況



1. 遺物(231・246・252)出土状況



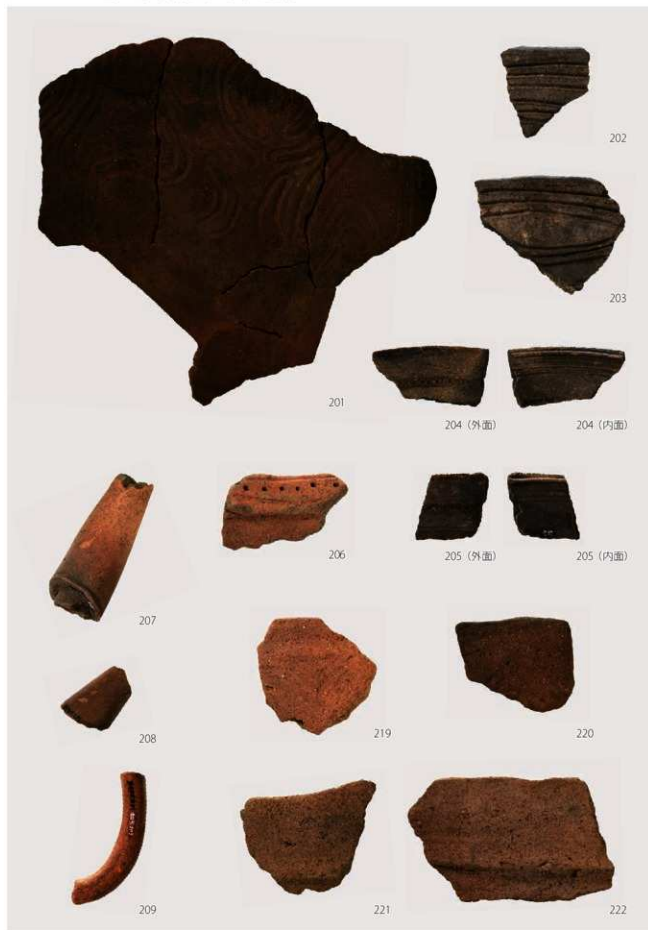
2. 遺物出土状況



1. 遺物 (250) 出土状況



2. 遺物 (235) 出土状況





223



224



225



227



228



229



230



226









1. 3地区 重機掘削の様子



2. 3地区 3トレンチ (南東から)



3. 3地区 1トレンチ (南東から)



4. 3地区 2トレンチ (北東から)



5. 5地区 2トレンチ土層



6. 5地区 重機掘削の様子 (東から)



7. 5地区 トレンチ全景 (南東から)



報告書抄録

ふりがな	なかじまいせき
書名	中島道跡
副書名	
シリーズ名	富士市埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第75集
編著者名	古瀬岳洋(編)・若林美希
編集機関	富士市教育委員会(担当課:文化財課)
所在地	〒417-0061 静岡県富士市伝法66番地の2 In 0545-30-7850
発行年月日	令和5年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 東経	地区名	調査期間	発掘面積 (㎡)	発掘原因
		市町村	道跡番号					
なかじまいせき 中島道跡	しずおかけん 静岡県 ふじし 富士市 はらだ 原田	22210	049	35 10' 23.93" 138 42' 07.82"	第1地区 (1・2次調査)	19861201 ～ 19861220	200	確認調査
				35 10' 24.13" 138 42' 08.69"	第2地区 (3次調査)	19890109 ～ 19890202	350	学術調査
				35 10' 20.19" 138 42' 11.01"	第3地区 (4次調査)	19891030 ～ 19891102	400	確認調査
				35 10' 30.68" 138 42' 11.63"	第5地区	19990114	11	確認調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
中島道跡 第1地区	集落跡	縄文時代	竪穴建物 2 土坑 10	縄文土器 石器・石製品				
中島道跡 第2地区	集落跡	縄文時代 古墳時代	土坑・ピット (中世以降) 6	縄文土器・石器・土製品 土師器・灰輪陶器	土俵の脚部 塊状耳飾り			
中島道跡 第3地区	集落跡	縄文時代 古墳時代	なし	縄文土器・土師器 須恵器・陶磁器				
中島道跡 第5地区	集落跡		なし	なし				
要約	<p>本書では、中島道跡の発掘調査の成果を報告する。</p> <p>中島道跡は富士山南麓の末端丘陵上、松原川に近接して立地する。対岸には宇東川道跡が存在し、地理環境と活動時期が中島道跡と重なる。</p> <p>中島道跡第1・2地区の発掘は昭和60年から3次にわたる本発掘と試掘がなされ、竪穴建物2、土坑・ピット16を検出し、縄文時代から古墳時代にかけての遺物が出土した。縄文土器は中期末～後期前半に該当する称名寺式～堀之内式土器が優勢であり、道跡の年代もこの時期に位置づけている。またほぼ同時代とみられる福田K2式、緑帯文、松ノ木式の関西系土器が少数見られるのも特徴である。縄文時代以降、生活の痕跡は明確ではないが、古墳時代前期の土器が散見される。</p>							

富士市埋蔵文化財調査報告 第75集

中島遺跡

発行年月日 令和5年3月31日

編集・発行 富士市教育委員会
〒417-0061 静岡県富士市伝法66番地の2
TEL 0545-30-7850 FAX 0545-30-6210
E-mail: ky-bunkazai@div.city.fuji.shizuoka.jp

印刷・製本 株式会社文光堂
〒417-0041 静岡県富士市御幸町3-18

(富士市行政資料登録番号 R4-48)